



始



松井文學士講述

(非賣品)

最近支那政界の趨勢

大正十一年度

早稻田大學

講義

14-690



最近支那政界の趨勢

松井文學士講述

(非賣品)

大正十一年度早稻田大學講義



最近支那政界の趨勢 目次

第一章	支那近代ノ革新運動	一
第二章	支那近世ノ革命運動	一七
第三章	第一革命	二五
第四章	北京統一政府	四〇
第五章	帝政運動ト第三革命	四四
第六章	列強ノ對支政策	五五
第七章	日支交渉	六〇
第八章	袁氏没後南北妥協ノ大勢	六八
第九章	南北對峙	七八

目次 終り

一
一七
二五
四〇
四四
五五
六〇
六八
七八

最近支那政界の趨勢

松井教授述

内務省
文庫
著名人物
第一章

支那近代ノ革新運動

宣統帝 隆親王
劉坤一 遠世凱
西太后 孫寶琦 光緒帝 徐錫麟

摘要

変法合奏 改革ニ関スル新法令 憲政ノ準備 光緒帝及ヒ西太后ノ死

遠世凱ノ免官 皇族内閣ノ成立 國會速設及ヒ利権回收ノ輿論 鐵道幹

線國有問題

明治三三年ノ北清事変ハ支那ニ於ケル國民ノ思想ニ大ナル影響ヲ與ヘタリ

前ノ日清戦争ハ日本ト支那トノ争ヒト見ルヨリモ寧ロ日本ト李鴻章トノ衝突ト見ルヘキニシテ此ノ戦争カ支那ニ及ホシタル影響ハ素外薄弱ナリキ。然ルニ北清事変ハ支那ト列國トノ争ヒニシテソレカ支那民心ニ及ホシタル影響ハ日清戦争ノソレトハ到底比スヘキニアラサル程大ナルモノナリキ。此ノ戦争ハ右側モナク支那ノ識者ハ政治界ニ新運動ヲ起セリ。尤モソレ以テ明治三十一年庚辰有為ノ計畫シタル政治改革ノ試カナサレタルガソレハ全ク失敗ニ終レリ。北清事変後ニ至リテ前ヨリモ更ニ自覚的ナル新運動起リ来レリ。明治三十四年張之洞、劉坤一ト云フ二人ノモノ共同シテ革新ノ意見各ヲ提出シタルカ如キハ其主ナルモノナリキ。其ノ意見各ノ大要ハ「西洋ノ文化ヲ採用シ、日本ヲ模範トシテ政治改革ト人物養成トヲナス可シ」ト云フニアリキ。是レ有名ナル交法合奏ナリ。

張之洞ハ日清戦争当時ハ稍日本ニ対シ及感ヲ抱キ居リシガ戦後ハ鐵國主義ヲ排リテ少年ヲモ改革ノ必要ヲ唱ヘ居タル人ナリ。彼ノ思想ノ根柢ニハ保守的ナル處アリシモ他ノ一面ニハ革新ノ必要ヲモ認メ居リシナリ。劉、張ニ氏ニ刺激サレテ支那民心ノ動キ出シタルコトハ確實ナリ。

斯クシテ明治三十五年ヨリ三十八年ニケテ政治改革ニ関スル種々ナル新法令相續キ發布サレタリ。ソレヲ總法令ノ内容ハ先ツ次ノ如キモノナリ。
1. 滿州人ト漢人トノ結婚ヲ許スコト。
2. コレハ清朝ニ対スル反抗心ヲ緩和スル爲メナリキ。

2. 海外ニ留学生ヲ派遣スルコト。
是レハ海外文化ヲ吸收スル爲メナリキ。而モソレヲ速成的ニナス必要アリトシテ先ツ手近カナル日本ヘ多クノ留学生ヲ出タスト云フ事トセリ。尤モ明治三〇年頃ヨリ少シク留学生ヲ送り居タルガ此法令出テシヨリ益々多ク送ル様ニナリシナリ。

3. 京城大学堂ノ規模ヲ擴張スルコト。
將來學問上教育上ノ中心ヲ造ル爲メナリキ。最近北京大学ト改称サレタリ。
4. 練兵場ヲ作り新式ノ陸軍ヲ教練シ其ノ充實ヲ計ルコト。
5. 従来行ハレ居タル形式的ナル官吏登用試験ノ制度ナリシ科擧ノ制ヲ廢シ官吏ハ主トシテ留学生ノ内ヨリ拔擢シテ採用スルコト。
6. 銚山其他実業ヲ盛ニナラシムル爲メ組織ヲ擴大スルコト。

等ナリキ。如斯緒計畫カ中央ニテナサレ居ル則ニ地方ニテモ革新ノ氣運カ育
生シ来レリ。前述張之洞ノ如キハ南方ニ於ケル莫ノ卒先者ニシテ又遠去凱ハ
北方ノ中心人物ナリキ。遠氏ノ改革ハ主トシテ財政、教育、実業ハ警察等ニ
関シタル事柄ニシテ其ノ顧問トナリシ人ノ多クハ日本人ナリキ。斯如ク表面
如何ニモ革新ノ氣運盛ニナリシカ、ソレカ実質的ニナル程度迄実行ナシ居
ルカ疑ナリキ。当時清朝ノ政治ノ中心ナリシ西太后ハ朕命革新ノ意志ヲ持
テ居タル人ニテハアリシガ彼女ハ寧ロソレヨリモ自分ニテ新ニシテ政治機關ヲ組
織シテソレニヨリテ自分自身ノ勢力ヲ固メント云フカ如キ野心ヲ抱キ居レリ。
其為ニ彼女ハ政務處ト云フ新ニシテ政治機關ヲ組織シタルナリ。此ノ政務處ニ
集リ諸般ノ政治ヲ議スルモノヲ政務大臣ト呼ビ居リシガ政務大臣ノ中ニハ吳
興ニ政治革新ノ見識ト了解トヲ持テ居ル者ハ以ナカリキ。
張之洞、劉坤一ハ何レモ政務大臣ニハアラザリシガ此ノ政務新ニ關係スルコ
トハ為シ居タルナリ。張氏ハ革新ノ先覚者トナサレ居リシガ此ノ變事交ノ以
以前ニハ勸學篇ト云フ著書ヲ公ニシテ清朝ニ忠節ヲ盡セト論シタル程ノ人ナ
リキ。然シ彼ニハ盛ニニ革新ノ必要ヲ唱ヘタルナリ。故ニ当時ノ識者ヨ

リ「迎合ノ人」ト評サレ居タルナリ。然シニハ熱アリキ。遠去凱ノ改革ニ
至リテハ單ニ一人ノ人氣取リヲ目的トシタルモノニシテ若吳ノ吳ニ至リテ
ハ張氏ニ及ハサルコト遠シト云ハサルヘカラス。
当時政治ノ当局者カ改革ニ對スル熱誠ヲ缺キシノミナラス、彼等カ其手先キ
トシテ養成シタル海外留学生モ速成ト云フ目的ニテ教養サレタルモノナリシ
為メ其人々ノ吸收シタル新知識ハ根本的ニ練リ上ケラレタルモノニアラザリ
キ。ソレ故自國ノ政治ヲ改革スル事ニハ彼立タザリキ。ノミナラス彼等留学
生達ハ半解ノ新知識就中政治ニ關スル新知識ヲ以テ自國ノ政治上ノ缺矣ヲ批
判シ、清朝ニ對シテ反感ヲ抱ク様ニナレリ。而シテ当時ノ革命党ト脈ヲ通シ
テ革新ヨリモ一歩進ミテ革命ヲ起サントスルカ如キ考ヘテ有スル者多クナレ
リ。於茲清朝ハ明治三六年ニ「留学生ハ革命党ニ接近ス可ラス」ト云
フ意味ノ訓令ヲ發シタル程ナリキ。
如斯革新ノ実質如何ハ疑問ナリシガ表面ハ革新ノ思想カ此頃ヨリ一般ノ流行
トナリ来タリシナリ。其内ニ日露戰爭始マリ日本カ愈々勝利ト云フ事ニナリ
テヨリ益々痛切ニ支那民心ハ改革ノ必要ヲ感シタルカ如シ。日露戰爭ノ結果

如何ト云フコトニ就テハ清朝ノ当局者ハ非常ニ心配ニ居タルナリ。西太后自身モ其爲ノ一昨北京ヲ立テ退カントセリト云フコトナリ。日露戦争ノ結果ガ支那民心ニ政治改革ノ必要ヲ痛感セシメタリト云フ事ハ日本カアレ丈ケノ小国ニ拘ハラズ大國ノ口シヤヲ撃破スルヲ得タリト云フコトハ金ク日本カ憲政ヲ布キテ居リシ故ナリ。ト云フ事カ當時ノ支那敵者ニヨリテ盛ニ論セラレシヲ見テモ明カナリ。既ニ日露戦争以前ニ駐佛公使劉寶琦ヨリ憲政ノ利益ヲ述ヘタル意見存カ北京ニ送ラレシタリシカ其後日露戦争進行スルニツレテ速ニ俄ニ氏ヲ始メトシ朝野ノ識者ハ切リニ憲政ノ必要ヲ力説シタルナリ。憲政ノ採否如何ト云フカ如キ大問題ハ光緒帝ニヨリテ決セラルト云フヨリモ寧ロ西太后ニヨリテ決セラルト云フ可キナリキ。西太后ハ盛氏ノ勸メニ從ヒ其ノ採否ヲ決スル爲メ先ツ五名ノ委員ヲ任命シテ外國ノ憲政ヲ調査セシムルニトセリ。委員出發ノ際北京停車場ニテ革命党ノ爲メニ狙撃サレタルガ西太后ハ再ヒ其補員ヲ任命シテ調査ニ行カシメタリ。彼等委員ハ日英米法佛ノ五ヶ國ヲ廻リテ約八ヶ月ヲ経テ帰國シタリ。明治三

六

九年ノ夏ナリキ。此ノ五ヶ國ヲ如何ナル程度ニ調査ヲナシタルカハ疑問ナリ。或人ハ日本人ニ其ノ後命存ヲ書カシタル者モアリタリト云フコトナリ。然レトモ彼等ハ北京ニ歸リテヨリハ一聲ニ憲政ニ賛成ノ意味ヲ報告シタリ。サレバ西太后ハ決心シテ明治三十九年九月憲政ノ準備ヲ命スル詔ヲ發布シ委員ヲ任命シテ先ツ制度ノ改良ニ着手シタルナリ。此ノ際西太后ハ如何ナル理由ニヨリテ憲政ヲ採用スルニ決シタルカハ重大ナル意味アルモノト考ヘサルヘカラサル位ニ疑ナリ。識者ノ中ニハ支那ヲ強クスルニハ日本ノ先例ニ依ヒテ憲政ヲ実行スルニ若カスト考ヘ居タル者ハ少カラサリシナリ。日露戦争ニ於ケル日本ノ勝利ハ一層此考ヘテ強カラシメタルガ如シ。サレド當時ノ支那人ノ一部ニハ單ニ自國ニ富強ナラシムルト云フ事以外ニ他ノニツノ目的ノ爲メ憲政ニ賛成ヲ唱フル者アリキ。即チ其ノ一ハ憲政ニヨリ清朝ノ安全ヲ計ル爲メ。及ヒ其ニニハ憲政ヲ布クコトニヨリテ革命ヲ避クルコト可能ナリト考ヘタル者ナリキ。西太后モ恐ラク此ノニツノ直接利益ヲ得ル事ヲ動機トシテ憲政ニ賛成セシモノナラン。其後憲政実施ト云フ事ニ對シテ當局ニ誠意ノ缺ケ居タリト云フ事ハ明

七

カニ此事ヲ裏書ナシ居ルモノナリ。

憲政準備ノ第一歩トシテ滿人ト漢人トヲ平等ニ扱握採用スルコトハナリテ、
張之洞ト袁世凱トハ先ツ軍機大臣ニ任命サレタリ。軍機大臣トハ内閣ノ上ニ
立ツ最高ノ行政機関ナリ。軍機ニ集マリ諸般ノ政治ヲ論スル者ナリ。
然ルニ依然トシテ滿人ノ勢力大ニシテ彼ノ西太后モ此ノ西名ニ信賴シ居リシ
カ兩人ヲシテ充分ニ手配ヲ振ハシムルコト能ハサリキ。換言スレハ人心緩和策ト
シテ此ノ兩人ヲ採用セテコトモ其ノ効力ニ於テハ案外薄弱ナリキ。
ノミナラス當時支那革命党ノ運動力追々露骨トナリ。我明治四十年ノ六月ノ
頃革命党員ナル徐錫麟カ守備巡撫ナル恩銘ト云フ滿人ヲ暗殺セシ事アリキ。
此ノ事件アリシ爲メニ清朝ノ革命党ニ対スル態度カ益々神経過敏トナリ来レ
リ。
此ノ事件ニ聯関シテ秋瑾女史カ革命ニ参加セリト云フ理由ヲ以テ死刑ニ處セ
ラレタリト云フ事実モアリタリ。政府トシテハ疑ノ目ヲ見ハリ民間ノ集會結
社ニ對シテ嚴重ヲ極メタル警戒ヲ居リシニモ拘ハラズ民間ニ於テハ政府ニ對
スル及村次第ニ深クナリ之カ大イニ憲政ノ前途ヲ危フカラシムルカ如キ状況
ヲ呈スルニ至リシモノナリ。

其間形式上ニ於ケル憲政ノ準備漸次進行シテ明治四一年八月ニ至リ先ツ憲法
大綱ヲ發布セリ。ソレニハ君主ノ大权ト人民ノ權利義務トノ要領ヲ示シ併セ
テ議院法ヲ附加シ議院制改定ノ九年間ニ實施スヘキ政治ノ目錄ヲモ發表セリ。
其レニヨレバ君主ノ大权ヲ述ハタル中ニ大清皇帝ハ萬世一系タルベシト云
ヒ或ハ又皇帝ハ神聖ニシテ侵ス可ラスト云フカ如キアリシカモ明ニ日本
憲法ノ直訣ナリキ。是レニヨリテ見ルモ清朝ハ憲政ニ對シテ誠意ナカリシコ
ト明ラカナリ。

此茲人民カ政府ノナスコトニ安セス民間ニ於テ直接ニ立憲運動ヲ唱ヘ国会制
故ヲ要求スル様ニナリシハ当然ノコトナリ。如斯憲政ノ將來ヲ測リ知ルハカ
ラサル状態ニ陥リシ時今一ツノ不幸生シタリ。明治四十一年ノ十一月ニ光緒
帝崩シ。其翌日一日遷レテ西太后亦無クナレリト云フ事ナリ。
帝ノ死因ニ就キテハ當時ヨリ既ニ種々ノ風説アリタリ。ソレニ則シテハ遠臣
カ疑ハレ居レト今日尚不明ナリ。其右先帝ノ甥ニ当ル當時三歳ノ幼少帝位ニ
ツキ宣統帝ト号シタリ。而シテ其父即チ先帝ノ弟ニ当ル醇親王載灃親政トナ

リテ校見ヲスルコトナレリ。

西太后ハ近世支那ノ女傑ナリキ。其レ大ケ又婦人トシテノ短所ヲ暴露シタル
莫モ多カリキ。而シテ晩年ノ清朝ヲ支ハテ其威嚴ヲ保テシハ全然此人ノ為メナ
リ。光緒帝ハ西太后ノ甥ニテ太后ニ推サレテ帝位ニ就ギタルナリ。彼ノ実力
ハ西太后ノ威カニ正例サレタシモ不推サレタシト能ハサリシカ如シ。光緒帝自
身モ明治三一年親有為ヲ用キテ政治改革ヲハカリシ事モアル程ニテ例ハ其政
策失敗セリトハ云ヘ改革ト云フコトニ就キテハ深ク考ヘ居タル人ナリ。
其レ西太后ト光緒帝トハ清朝ニ取リテ重要ナルキニ成セリト云フコトハ清朝
ノタメニ不幸ナル事ナリシカ其上宣統帝即位後一ツ日返キ盛衰ニ劇ク免職ト
ナリタリト云フ事ハ清朝ノ為メニハ二重ノ不幸事ナリキ。
コレハ前ニ遠カ光緒帝ノ政治改革ノ際帝ヲ裏切りテ其ノ政策ヲ失敗ニ終ラシ
メタリト云フ事ニ就キテ先帝ノ弟ニ当ル醇親王カ元帝ニ対スル書ミヲ報ヒメ
ルナリトモ云ハレ又ハ遠カ當時計畫シ居タル日本ニ対スル米清聯合カ餘リニ
遠ノ独断ナリシタメニ罰セラレタルモノトモ言ハレ居ルカ其ノ真相ハ不明ナ
リ。

兎ニ角遠氏カ清朝ヨリ追ハレタリト云フコトハ清朝ト民(國)トノ間ニ溝ヲ作り
タルモノナリ。

清朝ノ内幕ニ関スル研究ハ中々大ケ敷キ事ニテ民国ニナリテヨリ種々之ニ関
スル著書表ハレタルカサレト其ノ真相ヲ知ル事ハ殆ト不可能ナリ。

遠氏ニモ勝リテ従来滿漢人ノ感情ヲ和スルコトニ對シテ功勞アリシ張之洞也
明治四十二年ノ二月死セリ。

遠二氏去リテ後清朝ハ又滿人ノ勢力ニ独占サルノ概ニナリ從ッテ國民ノ
反感ヲ深ムル如キ結果ニ至リタルモノナリ。

元來清朝ノ計畫シタル憲政準備ニハ清朝自身ニ誠意ナク又了解ナキ狀況ナリ
シカソレニアキ足ラズシテ民間ヨリ發生シ来タル民権運動ニモ亦餘リ深キ根
底ナカリキ。少シク具体的ニ云ヘハ憲政ヲ近キ内ニ実行スルト云フ事ニ就キ
テ種々ノ調査又統計必要トナレリ。其事務ニハ留學生ヲ採用シタリ。其人々
カ外國ヨリ得来レリ。新知識ト支那ノ久シキ間ノ情実ヤ弊害等ハ至ル處ニ於
テ衝突セリ。

由來地方官トシテハ其職務ヲ利用シ巨大ナル利益ヲ得テ居リシカ新制度ナル

ニツレテ共利益ヲ奪ハルニトコナルヲ以テ憲政ニハ甚ク不満ナリキ。人民トシテハ大多數ノ者ハ政治ト云フ事ニ就テ何等ノ了解モ見識モ無カリニ處ヘ調査ト云フ面列ナルコトヲ命セラレタル為メニ其ノ調査或統計ノ弊種ニマギレ地方民ヨリ特別ノ利益ヲ吸收セントシタル者モ多カリキ。尚ホ其ノ事務ニ當リシ留學生達ハ絶テ理窟的ニ習ヒ未タル新知識通リニセントセシ為メ却テ地方人ヲ煽動シタルカ如キ結果現ハレタリ。

此如キ調子ニテ地方自治實施ニ就キテモ地方長官卒先ニテ反對ヲ唱ヘタリ。又地方審判所ト云フモノ設ケラレシモ司法权独立ノ精神徹底ニ居ラザリシ為メ事實ニ於テハ行政官之レヲナシタルカ如キ場合多カリキ。又民間ヨリ起リシ立憲運動モ外國ノモノヲ直訳シテ其俗利用セントシタル為メ實際ト合致セサル場合多カリキ。

北清事変後起リシ立憲運動ハ清朝ニトリテハ自家ノ安立ト云フコトノ為メニ用ヒラレ民間ニテハ政治改良及ヒ外國トノ對抗等ヲ要求スル為メニ唱ヘラレタリ。然レ自己ノ安立ヲハカル為メニアルニセヨ國力ノ充実ヲ計ル為メナリシニ^モ華新ト云フ事ハ既ニ輿論トシテ動キタレタルモノナルカ其ノ根底ハ頗

ル性ニキモノナリキ。

元來革新運動ハソレ程深キ自覺的根柢ナカリシニセヨ一度動キ出セハ其ノ運動自身ニテ自身ヲ押し進ムル大ケノ力ヲ持チ居リ其ノ速度モ次第ニ加ハリ未ルモノナリ。其ノ運動ハ輿論トナリ輿論ハ又輿論ヲ振メ行クモノナリ。

古來支那ニ於テハ輿論カ強キ勢力ヲ持チ居タルモノナリシヨリ其ノ輿論ニハ深キ根柢無カリレニセヨ人心ヲ動かスコト出来得ルナリ。此ノ輿論ヲ振ムル為メ最モ有效ナリシコトハ新聞紙ノ發達セリト云フコトナリキ。日清戰爭後上海ヲ中心トシテ新聞紙起リ次第ニ發達シテ支那言論ノ中心トナリタリ。

日露戰爭台ニナリテヨリ此等新聞紙カ聲ヲ擧ヘ華新及革命ヲ奉フ様ナリシ為メニ輿論益々盛ニニ唱ヘラル、様ナリタリ。其ノ當時ノ輿論ハ如何ナル状態ニ集中シ居タルカト云ハ、國會遠設ト云フコトニアリキ。

如此立憲運動次第ニ盛ニナリ居ル間ニ明治四十二年十月ヲ以テ各省ニ諮議局ト云フモノカ設ケラレタリコレハ我國ノ府縣會ニ相當スルモノナルカ此ノ會議ニ於テ第一ニ呼ハレタルハ國會附設ト云フコトナリキ。各局ノ代表者カ特ニ北京ニ赴キ其ノ要求ヲ提出シタルモ政府ヨリ何等ノ明確ナル答ヲ得ルコ

トカ出来サリシナリ。

英ノ翌年四月三月十月ニ北京ニ議院ナルモノ設ケラレタリ。是ハ將來國會ノ基礎ヲナス可キモノニマリタリ。其ノ會議ニモ國會建設ト云フコトヲ猛烈ニ叫ハレタリ。其ノ爲メ政府モ止ムヲ得ズ。國會創設予定ヨリ四ヶ年早ムルト云フゴトヲ承諾シタリ。是レハ明確ニ政府ノ輿論ニ對スル讓歩ナリキ。

此ノ時係セテ發表サレタル條件ニ基キテ其翌四十四年五月責任内閣ノ基礎ヲルモノ作ラシタリ。日本ト独乙トノ制度トヲ参考シテ作リタルモノニシテ内閣ハ君主ニ對シテ責任ヲ負フヘキモノトシテ夫々政務ニ對スル分擔ヲ定メラレタリ。普通ノ大臣十名アリ。其上ニ協理大臣二名置キ尚ホ其上ニ一名ノ總理大臣ヲ置キテ諸職ノ政務ヲ司ラシメタリ。コノ十三名大臣ノ中漢人ハ四名ニシテ残り九名ハ悉ク滿人ナリキ。而モ其ノ九名ノ滿人ノ内五名眞皇族ナリキ。是レハ明らかニ滿人ノ勢力ヲ漢人ノ勢力ヲ壓シ居タルコトヲ証明シ居ルモノナリ。

ソコテ輿論ハ大イニ之ヲ罵倒シ噴飯シ。輕蔑ヲタリ。或者ハ皇族内閣ナリト云ヒテヒタリ。就中華革命黨ノ連中ハ盛ニニ清朝ノ誠意ナキヲ寫リテ今彼外國

ノ圧迫ニ對シテ清國ノ安全ヲ保ツタメニハ清朝ニ政治ヲ任シテ置クコトハ到底不可能ト言ヒテ政府カ從來外國ニ與ヘ來レル數度ノ權利ヲ指摘シテ切リニ利收回收ヲ叫ビタルナリ。清朝ハ是レカ爲メニハ大イニ固リシ様ナリ。

利收回收トハ主トシテ商工業ニ與スル經濟的利權ヲ指シタルモノナリキ。如斯回收運動ハ曰清戰爭右頃ヨリ唱ヘラレ出シタルモノナルガ北清戰爭右至リテ外國ノ支那ニ對スル圧迫著シクナルニ及ヒテ即チ支那内地ノ經濟的利權

ヲ他國ニ奪ハルハコト甚シクナルニツレ益々盛ニ唱ヘラル様ナレリ。當時ノ識者ハ此ノ利收回收ト國會建設トヲ標語トシテ盛ニ輿論ヲ煽リタルナリ。今ヤ革命黨ハ輿論ヲ武器トシテ清朝ヲ覆サント企ツル様ニナリシナリ。

如斯皇族内閣ニ對スル不信任ノ聲高マリ未タル時ニ當リ更ニ人心動搖ヲ招キタル不幸ナル事件起リタリ。ソレハ即チ鐵道幹線國有令ヲ發布シタル事ナリ。鐵道幹線國有令ニヨレハ外國ヨリノ借款ニヨリテ鐵道ヲ經營シ其内務ニ必要ナル幹線ヲ國有ニスルト云フ計畫ヲ書キアリシナリ。此ノ計畫ハ當時ノ支那

政府トシテハ必スシモ無難ナルモノニハアラサリキ。此決ノ支那ハ利收回收ノ風潮盛ニナリシタメ出来得ル大ケ支那内地ニ於ケル事業ハ支那人自身ニヨ

一六
 リテ經營セント云フ傾向アリテ民營事業諸方ニ起リシナリ。然ルニ其事業ノ
 多クハ經營者ノ利ノ犧牲トナリテ實際ヲ奉クルコトヲ出来得ルモノハ極メテ
 散カリシナリ。此ノ弊害ヲ認メテ政府ハ自ラ鐵道ヲ經營シ其發展ヲ期セント
 シタルナリキ。而シテ其ノ國有トナス可キ鐵道ノ中ニ湖北省ト四川省トヲ連
 絡スル川漢鐵道ト云フ鐵道モ入り居タルカ此ノ川漢鐵道國有ト云フコトニ就
 テ四川省民カ激烈ナル反對ヲ唱ヘタリ。其主ナル理由ハ、川漢鐵道ハ先キニ
 光緒帝ノ許可ヲ得テ己ニ民營トナリ居ルモノニシテ今豈レラ政府カ取り上ケ
 テ國有トスルト云フ事ハ取りモ直サス四川省民ノ利益ヲ無視シタルモノナリ
 ト云フコトヲ其ノ主旨ナリキ。又鐵道ヲ國有ニスル爲メ政府カソレヲ如何ナ
 ル方法ニヨリテ賣ヒ上ケルカト云フ事ニ就テモ不安ノ念ヲ抱キ居ル者ヲクア
 リタリ。
 旁々受シカ利収回收ノ風潮ニ煽ラレテ政府カ外國ノ金ヲ借り鐵道ヲ國有ニス
 ルト云フ事ハ併兼回中ノ鐵道カ外人ノ手ニ歸ミテ終ア端緒ヲ削クモノナリト
 小云フ議論盛ニ唱ヘラル。概ナリシモノナリ。而シテ此議論ハ實際ノ反抗
 運動トシテ表ハレタルトキ政府ハ之ヲ兵力ニヨリテ威壓セントシタリ。其爲

ニ及抗ハ益々猛烈トナリ来タレリ。受レハ四川省ノミナラム點ツト全國的ニ
 人心動搖ヲ生スルニ至レリ。而シテ此ノ混亂ニ乘シテ愈々革命党カ清朝軍費
 ノ計畫ヲ実行スルニ至リシモノナリ。

第二章 支那近世ノ革命運動

著名人物

孫文、黃興、唐才常、朱啟仁 (未完)

摘要

三合會、興中會、三民主義、華興會、中國同盟會、革命ノ氣運又ヒ其ノ準備
 (未完)

革新ノ運動次第ニ行結マリ清朝ニ遠ニ之レヲ探攷スル手段ニ窮スルニ至レ
 リ。其ノ結果具體的ニ破産スルニ及ヒテ革命トナリシモノナルカ此ノ破産
 即チ革命カ起ル以前ニ於テ革命ノ運動カ革新運動ト相俟テテ企テ居タリト云

フコトハ吾人ノ大イニ考ヘサル可クサレ事ナリ。

革命ノ運動始メテ具体的ニ表ハレタルハ明治七八年未ノコトナリキ。此ノ動
乱ノ主謀者ハ孫文ニシテ三合会ナル秘密結社之レト連絡ヲ保チ居レリ、孫文
ハ近世革命党ノ巨魁ニシテ其ノ一派ノ人々ハ或多ク秘密結社ヲ作り居レリ。
而シテ是等ノ秘密結社ハ夫々他ノ同種類ノ秘密結社ト連絡ヲ保チ居リタルナ
リ。

革命運動ノ最盛ナルリシ處ハ本東省ト湖南省トナリキ。特ニ本東省ニハ著
名ナル外國貿易港ナリ。支那唯一ノ貿易港ナリシカ一八四二年ノ南京條約ニ
依リテ五港カ貿易ノタメニ開放ナレ後モ貿易ニ於テハ最モ繁盛ヲ極メタル
地ナリ。又シテ外國人ト接触シ居タル為メニ本東人ハ他省人ト異ナリ。遂取ノ
亂黨ニ富ミ居タリ。

湖南省ハ學問ノ盛ナル所ニシテ清朝以來多クノ卓拔ナル字者ヲ出レタリ。
新思想ノ氣吹エシテモ革新ヲ叫ブニシテモ殆ソト本東ト、湖南カ先鞭ヲツケ居
レ如シ。孫文ハ本東ノ人ニシテ、孫文ト協力シテ革命ヲ行ヒシ黃興ハ湖南人
ナリキ。此外革命運動ニ加ハリテ活躍シタル人ノ中ニハ此ノ兩者ノ人カ極メ

ヲ多カリキ。

孫文ハ字ヲ逸仙ト云ヒ、本東省香山縣ノ人ナリキ。彼ノ著書「孫文字鏡」ニヨレ
ハ彼ハ明治十八年ノ清仏戦争ニ於テ支那ノ敵レタルヲ見テ憤慨シ此時ヨリ清
朝叛覆ヲ思ヒ立テリトノコトナリ。其ノ後明治七五年興中会ヲ組織シ、統イ
テ七八年最初ノ革命的動乱ヲ企テシガ失敗ニ帰シ、一先ツ英國ヘ脱奔シタリ。
彼ハ英國ヨリ日本ニ歸リ日本ニ同志ヲ得、次イテ或ハ南洋、或ハ米國ヘ返回シ
テ再ヒ日本ヘ歸來セリ。彼ノ革命ニ関スル議論ハ此ノ巡遊ノ間ニ熟シタルモ
ノナリ。

孫文ノ説ニヨレハ清朝ヲ覆シテ漢人ノ國ヲ建ツルコトヲ「民族主義」ト名ツケ、君
主專制ヲ上メ民主共和政治ヲ布クコトヲ「民權主義」ト名ツケ、更ニ政州風ノ社
會主義ヲ唱ヘテ「民生主義」ト稱シ居レリ。之カ彼ノ「三民主義」ニシテ彼ハ之レヲ
実行スルヲ以テ自己ノ任務トセリ。孫文カ最初ノ革命ニ失敗シテ英國ニ
逃レテヨリ後明治三十一年來有為ヲ中心トスル革新運動、企テラレ、失敗ニ
歸シタルコトハ前ニ述ヘタルカ、其ノ同志者ナリシ湖南人、唐才常ハ明治
三十三年ノ光緒事變ノ混亂ニ乘レテ漢口ニテ動乱ヲ起セシカ之レ亦失敗ニ帰

シタリ。此時ニハ孫文又我台湾ヲ根拠トシテ大イニ広東方面ニ活躍セントシ
タルニ成功セザリキ。孫文ト相対シテ他ノ一方ノ革命ノ巨魁トナリレハ黃興
ト云フ湖南人ナリキ。

黃興ハ明治三十六年頃宋教仁ト云フ同仰ノ人等ト共ニ華興会ト云フ結社ヲ作
リ長江沿岸ノ秘密結社ナル哥老会ト連絡シテ革命ヲ企テシカ失敗シテ我日
本ハ逃レ来レリ。而シテ我東京ニ於テ孫、黃、兩派ノ革命党ヲ团结シ中國同
盟会ヲ組織セリ。而レテ此ノ同盟ノ機關雜誌トシテ「民報」ヲ発行シ誌上盛ニ
清朝ヲ攻撃シ革命ノ輿論ヲ高揚セシナリ。此ノ時ヨリ革命運動ノ規模益々大
ナルニ至レリ。

當時我因ニ留学シツ、アリシ支那留学生ハ殆ント此ノ同盟ニ共鳴セレヤカ
キ。

彼等留学生ハ革命ノ建設的方面ヨリニ革命の破壞的方面ニ賛成ノ意ヲ表シタレ
ナリ。彼等ハ一朝ニシテ熱烈ナル破壞的革命論者トナレリ。革命ハ破壞ヲ前
提トスルモノナリト云フコトハ云フマテモナキコトナリ。破壊ノ無キ所ニハ
真ノ建設ナン。熱情的ナル青年留学生ハ破壞的革命論者トナリタルハ無理カ
キ。

ラス等ナリ

彼等ガ日本ニテ學ヒタルコトハ革新ト云フコトニナリシナラシモ青年ノ血ノ激
スル処揀黄ニ氏等ノ宣傳ヲ待ツ迄モナク彼等ハ直チニ革命氣分ニ浸リシナリ。
斯ノ如ク革命ノ風潮次第ニ傳播シ来ルニツレ運動モ組織的ニ行ハルノ様ナリ
来レリ。

革命ニハ其ノ理論及氣分モ元ヨリ必要ナレトシテ革命ヲ實現スルコ
ト能ハズ。直接ノ実行運動件ハサリシカ革命ナル空論タルニ過キサレナリ。組織
立テル実行運動ヲナス爲メニ組織立テタル準備カ必要ナリ。彼等革命党員モ
此ノ準備ハ決シテ怠ラサリキ。彼等革命党員ハ早クヨリ外國ニ居留シ豊實ナ
ル財産ヲ貯メ居ル革命ノ間ニ運動ヲナシ革命ノ費用ヲ集ムルコトニ注意シ来
レリ。ソレノミナラス愈々革命ノ旗ヲ奉クルニ當リテ或ル実カノ援助ヲ求ム
ルコトノ必要ヲ感シ来レリ。革命ハ一種ノ一時の暴力運動ナリ。殊ニ政事
革命ニ於テハ暴力或ハ暴力ナクシテ成功スルト云フ事ハ殆ト不可能ノ事ナ
レハナリ。其レニヨリ彼等ハ其暴力或ハ暴力ヲ以テ居ル或ニ方面ト連絡ヲ取
ルコトニ盡カシ来レルナリ。其一方ハ革命的色彩ヲ有スル秘密結社ニシテ此

一、その軍隊ナリキ

支那の政地ハ官吏又ハ官吏ト同心異体ナリ。読書人ノ玩弄物ナリシト云フコトヲ得ヘシ。理想ハアリテモソレハ実行ト併ハサル空論タルニ終ル場合マシ。畢竟少數ノ政治當局者ノ利害ヲ本意トシテ居タルモノナリ。大多數ノ被治者ハ利害ハ聲口擧性ニ供セラレタル如キ傾キアリタリ。従ッテ世人ノ常ニ不安ヲ感シ一衆人民ハ治者ノ政策ニ信頼スルコトヲ得ス。自ラ自管ノ手段ヲ講セサルヘカラサルニ至レルナリ。

而シテ其ノ自管ノ手段ヲ取ル必要ニ基キテタクノ秘密結社生レタルナリ。近世ニ至リテ滿洲人タル清朝ハ支那ニ君臨シテヨリ及清朝思想ノ暗流カ我々ノ秘密結社ヲ生シタルモノナルガソレカ集合サレテニ合会、哥老会、等ノ大規模ノ秘密結社組織サレタリ。

而シテ其分派ハ散レク各地ニ散在シ居レリ。是等ノ内ニハ軍ニ政治的、社会的ノモノタルノミナラス宗教的色彩ヲ帯ヒタルモノモ少カラサリキ。斯ノ如キ結社ハ南方支那ニ多クアリキ。是等結社ノ會員ハ不平人士カ或ハ生活上ノ不安ヲ感シ居レル人々ナリキ。其團結ハ本クモアリ又案外鞏固ナリ。

社会ノ裏面ニ存在スル特殊ナル勢力トシテ其力ヲ握リ居タル為メニ清朝ハコレカ為メニ大イニ苦シメラレタリ。

白蓮教匪又ハ長髮賊ナト云フ如キモノハ皆斯ノ如キ秘密結社ヲ背影トセルモノナリキ。革命党カ各地ノ秘密結社ト連絡ヲ求メタルハ然ル可キ事情アリシナリ。

廣東ノ三合会ノ首領鄭聘因、楊子江岸ノ哥老会ノ首領タル馬福益等ハ孫、黄ノ革命計劃ニ参加シ大イニ力ヲ注キタリ。

支那ノ軍隊ハ一種ノ窮民收養所トモ云フ可キ處ニシテ生活ニ苦シミシモノカ募兵ニ志シテ兵卒トナレルモノナレハ軍隊カ土匪同様ナル暴行ヲ恣ニスルコトハ珍ラシカラサリキ。

近世支那ノ軍隊ニハ旧式ト新式トノ二ツアリキ。然シ其ノ何レモ長官カ制服ヲ肥サンカタメニ部下兵卒ニ対スル半当ノ裁命或ハ全部ヲ横領シテ兵卒ニ優サハル場合カカリキ。其為メニ兵卒ノ不平ハ絶ハ間ナカリシト云フ事ナリ。

一、斯様大軍隊ヲ鐵軍ト呼ビ居タリ。一、昨年頃ノ新軍ニハ此ノ鐵軍ト云フ語ヲ度々用ヒラレ居タリ。

冰ニ新軍ノ將校ノ中ニ革命思想ニ勤カサレテ進ミテ革命党ニ連絡ヲ通
 スルモノモアリキ。革命党ニ取リテハ是方有力ナル援助トナリシナリ。
 明治四十一年揚子江ノ北岸安慶府ノ砲兵隊長龍成基ヲ部下ヲ碎ヒテ動乱ヲ起シ
 タルモ如キハ明ラカニ當時ノ新軍ノ中ニ不逞ノ形勢ヲ踏ミ居タルカラ露露シ
 タルモノモアリ。又孫文ハ或佛武官ノ援助ヲ得テ南京ト武昌トニ駐在スル新
 軍ト連絡ヲ通スルコトヲ得タリト云フコトヲ彼自ラ公言シ居ル位ニナリ。要
 スルニ新旧何レノ軍隊モ清朝ニ取リテハ餘リ忠實ナルハキモノニハアラサリ
 キ。中ニモ新軍ノ一部ニハ既ニ革命思想ノ廣入ニテ革命党ノ有力ナル後援者
 トナリ得ル勢力ヲ有シテ居タルナリ。
 如斯手段ニヨリテ革命党力次第ニ團結ヲ固クスル傍ラ將來ノ為メニ有力ナル
 援助ヲ得ル計畫ヲメグラシ居タルナリ。
 明治四十年ヨリ四十五年頃迄ノ間ニ諸處ニ於テ革命の拳兵ノ企テヲ試ミタリ
 丁度明治四四年ノ始メ頃本東省ニアル本東城ヲ奪取セント企テ失敗シ党員七
 十二名カ死刑ニ處セラレタリ。此多勢ノ犧牲者ハ黃花岡ニ葬ラレタリ。此
 事件カ當時革命党員ノ士氣ヲ鼓舞スルニ力アル動機トナレタリト云フコトナリ。

孫文自テ言ハ彼ハ後ハ明治二十八年ヨリ此等ニ至ル位ニ凡ソ十回拳兵ヲ
 企テ十回トモ失敗タルナリ。故ニ此ノ最在ノ革命失敗ヨリ革命党ハ方
 面ヲ交ヘ長江沿岸方面ニ於テ新軍ト連絡シテ拳兵ノ計畫ヲ立ツルコトナレ
 リ。
 此ノ拳兵カ即チ第一革命ニシテ前途ノ鉄道國有案々地好機會ヲ失ヘタルモノ
 ナリ。

第三章 第一革命

重要人物
 孫文 遠志凱 馮國璋 段祺瑞
 武昌ニ於ケル中華民國軍政府ノ設立
 清朝遺式ノ再起ヲ求ム

遠氏ノ十九信條。資政院。參議院。孫文大統領トナル。

孫ニ氏ノ協調。

遠氏ノ立場。孫文ノ立場。

明治四十四年十月十日ノ晚ニ革命党ヲ武昌ノ新軍ト相携ヘ断行シタル革命運
動意外ノ成功ヲ爾ヲシタリ。孫文自ラモ此ノ成功ハ全ク意外ノモノナリシト
云ヒ居レリ。

△十三日黎元洪カ其ノ首領ニ奉ケラレ武昌ニ於テ中華民國ノ軍政府ヲ作ルコ
トナレリ。

始メノ間ハ只普通ノ暴動ナリト考ヘラレ居タルモノカ意外ニ大キ影響ヲ及ホ
シ一ヶ月経スニ早クモ全国ノ三分ノ二ハ清朝ノ命令ヲ奉セサル様ナレリ。

於茲清朝ハ頗ル狼狽シ俄カニ遠中凱ヲ再ヒ奉ケテ用ヒントシタリ。遠ハ
先ニ政府ヨリ逐放セラレ暫ク隱居ノ身トナリ居タリシガ。然レ乍ラ清朝ノ内
部ニ就テハ深ク注意ヲ耕シ居タリ。殊ニ慶親王ニ連絡ヲ求メ政府ノ幸

情ヲ深ク知ルコトニ熱心ナカリキ
此ノ動亂起レルヲ見テ遠氏ハ清朝カ自分ニ再起ヲ求メ来ルコトヲ豫期シ居レ

リ

實際當時清朝ノ信頼シ居タル北方ノ軍隊ノ中堅トナリ居ル人ハ多クハ昔ノ遠
氏ノ部下ナリシナリ。中ニハ軍ニ部下ト云フヨリモ一層深キ關係即チ子分關

係ニアリタルモノモ火カラサリキ。彼ノ馮國璋。段祺瑞ノ如キ將軍ハ全ク遠
ノ子分ナリシト云フヘキナリ。故ニ清朝トシテハ此際遠氏ノ再起ヲ求ムルト

云フコトハ極メテ必要ナルコトナリト認メラレタリ。又北京ノ外交團ハ前
ノ北清事変以後遠氏ニ對シテ多大ノ信用ヲ有セシ。關係モアリ此動亂ヲ鎮

ムルニハ遠氏ヲ指キテハ他ニ適當ナル人物ナカレバシト考ヘ居リタリ。
我等ノ關係ヨリ清朝モ愈々遠氏ノ再起ヲ求ムルコトナリ動亂發生後僅カ四

日ヨリ遠氏ニ對シテ革命軍討伐ノ全權ヲ委託スルコトナリシナリ。是レ殊
ニ遠氏ニ對スル清朝ノ屈服ナリキ。殊ニ遠氏ニ軍事上ノ全權ヲ授ケタルコト

ハ清朝自ラ縊ル繩ヲ遠氏ニ手渡シタルト云テ様ナルコトナリキ。三年前ニ政府
ヨリ逐放サレタル遠氏ハ此時ニ至リ再ヒ呼ヒ起サレタルナリ。遠氏ハ容易
ニ承諾セサリキ。

再三ノ懇願ヲ煩ハシテ始メテ漸ク之ヲ承諾シタルナリ。

彼ハ先ノ商朝ニ巨額ノ軍費ヲ要求シタリ。其ノ金額ハ四〇〇万兩ナリキガ此ノ大金ハ悉ク討伐ノ爲メニ用ヒラシニハアラスシテ之ヲ以テ武備方面ノ革命党ヲ買収シテ益々革命ノ大旗ヲ捲ナラシメタル如キ結果ヲ生シタルナリ。當時革命党ヲ煽動シ其ノ勢力ヲ増サシメルコトハ清朝ヲ苦シムル絶好ノ手段ナリシナリ。

遠氏ハ清朝苦シメハ苦シム程 且ニ依願シ去リ、而シテ遂ニハ政教ヲモヒノニ一任スルナリト理想シ居タリ。畢竟、遠氏ハ此際清朝ヲ窮地ニ陥セシムルハ自己ノ將來ニ取リテ最モ必要ナルコトナリト考ヘ居タリキ。當時北京附近ノ軍隊中ニモ不徳ナル形勢表ハシ革命党ノ思想ニ応セシコトヲ清朝ニ向ヒソ、ノカシ兵カヲ以テ北京ヲ脅カサントスル態度ヲ示シタルモノモアリシガ是モ實ハ遠氏カ共裏面ヨリ煽動シタルモノナリト云フ風説行ハレタリ。

遠氏カ北京ハ入ル前ニ既ニ幾多ノ陰謀ヲメグラシ清朝ヲ苦シメントシタルカ、其ノ陰謀ノナカリシトスルモ清朝ハ餘程苦シキ立場ニ陥リ居タルナリ。十一月ノ始メニ至リ將來ノ憲法ノ基本タルヘキ十九信條ト云フ者ヲ發表セリ。

其内ニ於テ將來ノ國會ノ权限ヲ極端ニ大ナラシムル様ナキ條ヲ含ミ居レドソレハ唯清朝カ目前ノ苦ミヲ脱スル爲ノ方策タルニ過キサリキ。然シ乍ラ此ノ十九信條ニヨリテ目下北京ニ開カレ居タル資政院ヲシテ假リニ國會ノ發言ヲナサシムルコトヲナシタルナリ。其爲メニ假國會トシテノ資政院ニシテ總理大臣ヲ選舉シタル其ノ結果ハ遠氏カ當選セシモノナリコレニヨリテ遠氏ノ計畫ハ愈々功ニ近ツキ愈々北京ニ入りテ政界ノ中心人物トシテ大イニ活動スルコトヲナレリ。

彼カ入京シテヨリ僅カ三日内ニ新内閣ヲ組織シ終レリ。遠ガ中心人物トナリタルニ引換ヘ當テ三年前ニ彼ヲ放逐シタル醇親王ハ悉ク遠ノ爲メニ圧制サレテ勢ヒ根柢ノ職ヲ退カサルヘカヲサリキ。然シ遠氏ノ目的ハ只一個ノ總理大臣トシテ清朝ノ爲メニ努力カスルト云フニ非スレテ一方ニハ清朝ヲシテ益々窮地ニ陥ラシメ他ノ一方ニ於テハ南方ノ革命軍ト妥協シテ独リ北京ノミナラス全國内ニ於テノ中心人物トラスル大望ヲ抱キ居レリ。從テ最早ハ革命軍ヲ征服スルコトハセハ清朝ヲ苦シムル上ヨリ見テ不得策ナリ。寧ロ革命軍ヲ利用シテ清朝ヲ勞サスノガ遠ニ取リテ利益ナリキ。

ソレ故十一月下旬ニ謂ユル漢陽ノ戰ニ於テ革命軍ガ一時失敗シタル時ニモ遠
氏ハ飽迄モ之ヲ追求セントセザリキ。又△シ頃ニ南京カ革命軍ニ攻メラレシ
時ニモ散テ南京ヲ放棄セントハセザリキ。

其頃既ニ革命側ニ於テハ團結鞏固トナリ。革命ニ参加シタル十一省ノ代表者
集リテ始メ漢口ニ於テ會議ヲ開キ、コトニ於テ中華民國臨時政府組織大綱ト
云フモノヲ作レリ。然ル處尙モナク南京カ革命軍ノ牛ニ帰シタル爲メニ(一)
月ノ始メ)右代表者ノ會議更ニ南京ニ遷サレタリ。其時ニハ十六省ノ代表
者集マレリ。

如斯革命側ノ團結固クナルニツレ革命側ノ決心ハ愈々強クナリ十二月末ニ至
リ恰モ其頃英國ヨリ帰着シタル孫久ヲ選ヒテ中華民國ノ臨時大統領ニ推選ス
ルコトニ決シタリ。其翌明治四三年改メテ民國元年トナリ臨時政府組織サレ
ヘ南京ニ於テ)尚十六省ノ代表者ノ會議ヲ參議院ト改称シテ之ヲ併合國會ノ
基礎トセント云フコトナレリ。

如斯革命側ノ團結固クマラサル尙ヨリ遠氏ハ英國公使ナル *Johnston* ノ手ヲ
経テ武昌方面ノ革命軍ニ対シテ内々妥協ノ運動ヲ開始シタリ。

此時 *Johnston* ハ革命ノタメニ南支那ニ於ケル英國ノ商業カ大ナル打撃ヲ
受ケ居ルテフ実況ニ鑑ミ可成運カニ南北協調ニテ平和ヲ回復セシメタキ希望
ヲ持テ居タル爲メニ彼ハ遠氏ノ依頼ヲ容レテ勸告遂ニ南北講和會議ヲ上海ニ
開カサルニ至リシナリ。 *Johnston* 自身モ漸然遠氏ヲ救ケルニモアラヌ南
方ヲ援助スルニモアラヌ此ノ戰ノ終局ヲ告ケントセリ。

日本モ上海ニ於ケル此ノ講和會議ヲ派シシメントシテ働キ足ナリキ。十二
月々末五回ノ會議開カレタルカ南方ニテハ清朝ノ退位ト共和政治ノ実施ト云
フコトヲ飽迄モ主張シ結局ハ共和ヲ實施セサレハ此動亂ノ治マラサル如キ狀
態ニ陥リシナリ。
遠氏ハ始メハ立憲君主制ヲ主張シ居タルガ今ヤ共和ノ大勢カ殆ント動カスベ
カラサルモノナルコトヲ親感シタルナリ。然レ遠トシテハ此際自ら先シテ共和
ニ賛成スルコトハ自分ノ爲メニ不利益ナリ。依ッテ自分ハ直接ニ責任ヲ負
ハズ可成清朝ヲシテ共和ニ從ハサルノ止ムヘカラサルカ如キコトヲ計畫セ
シナリ。其ノ手段トシテ上海會議ノ實況ヲ詳ニ清朝ニ上奏シ飽迄モ立憲君主
制ヲ守ルカ、或ハ共和政治ヲ採用スルカト云フ決心ヲ國民會議ニ同マテ其ノ

意見ニ徴シテ決定スル方宜シカラント云フ如キ計畫ヲ勸メタリ

十二月ノ末宮中ニ於テ皇族會議開カレタルヲ其ノ席上ニ於テ目下ノ形勢ヲ察

シテ清朝ノ運命ヲ國民公議ノ決ニ委然ニ任セント決定セリ

民公議ヲ招集スル方法ハセテ遠ノ手ニ任スルコトハナレリ

同ノコトナルガ前途ノ通り南方革命党側ニテハ北方ノ態度如何ニ拘ハラヌ

着々自己ノ計畫ヲ勸メテ既ニ革命政府ヲ組織シテ北方トノ妥協ヲ全ク度外視

スルカ如キ傾向アリシナリ

故ニ遠トシテハ今更國民會議ヲ開カント思ヒテモソレハ到底実現スルコト不

可能ノ事ナリト知レルナリ

於茲遠ハ寧ロ新設サレタル南京ノ革命政府

ニ向ヒテ直接妥協ヲ試ミユヨリテ一方ニ於テ清帝ノ退位ヲ決行セシム他ノ

一方ニ於テハ革命政府ヲ自由ニ自己ノ手ノ内ニ入レテ陰謀ヲ逞シクセントセ

リ、其ノ結果民國元年ノ一月中旬頃ヨリ遠ト孫文トノ間ニ電報ヲ以テ直接ノ

談判開カレタリ、既ニ上海ノ講和會議ハ敗レ居タルナリ

為メニ南北ハ文戰

狀態ニ再ヒ立テ度ル可キナラニ以外ニモ其ノ講和談判カ電報ヲ以テ迷途サレ

居タルノミナラス今又遠孫二氏カ直接ニ妥協ヲ始メタリト云フコトハ不思議

ナルコトナリ

テ重大ナル意味ヲ有シ居ルモノナリ

Fartherman ハ暗ニ味方ニ遠ヲシテ革命軍ヲ圧迫セント考ヘタル為メニ

南北ノ協調ヲ運動セルカ如シ、實際當時ハ勢カトシテ自然ニ遠氏カ勝ツカ如

キ狀態ナリキ

ソレテ釣ラレテ何等自信モナク確定的態度ナシニ其手傳ヲシ

メルハ日本ナリギ、日本ノ態度ハ極メテ不鮮明ナリキ

先ッ當時遠氏ノ立場ヲ考ヘ見ルニ彼ハ大勢既ニ共和ニ傾キ居ルコトヲ觀破シ

居タリ、從テ今後革命軍ト戰フヨリハ今將ニ絶エナントシテ居ル清朝ノ余威

ヲ打テ切ルコトカ自分ニ有利ナルコトヲ知リ居レリ

又革命側ト雖モ決シテ恐ルハ、ニ足ラヌモノナルコトヲ信シ居レリ

現ニ遠ハ革命側ノ内部ニ向ヒ買収手段ヲ実行シ居リ

又革命側ノ團結モ實際表面ニ表ハレタル程鞏固ニアラスト高ヲク、リ居タルナリ

然シ遠ハ當時財政ニ苦シミ居レリ、彼ハ清朝ノ皇族ヨリ金ヲ取り、又ハ英國公債ヲ發行シタリシ以外ニ主ニ外國借款ニ依リテ其困難ヲ救ハントシテ居タルカ失敗ニ終レリ、當時ノ諸外國ハ殆ント皆遠氏ニ信頼シ居タリト雖モ此ノ勳

此が萬一外人排斥ノ危険ヲ併フ様ニナランコトヲ恐レ居レリ、ソハ遠ニ向ニ
財政上ノ援助ヲ與フル爲メニ革命側ノ反感ヲ招クナラド云フコトヲ知リ居レ
ルカ故ナリ。現ニ革命軍モ政米ノ新庫ヲ利用シテ若シ政米ノ或國ケ遠氏ニ財
力ノ援助ヲ與フルナラバ革命軍ハ政米人ヲ敵視シソレカ爲メニ意外ノ事変ヲ
引キ起スヤモ知レスト云フコトヲ切リニ宣傳シ居タリ、コレ大イニ效力アリ
タリト云ハレ居レリ、現ニ長江方面ノ外人（主トシテ英人）ハ遠ニ味方スレ
ハ革命軍ノ反感ヲ買フコトヲ知リ英國ハ自國ノ公使ヲシテ南北協調ノ講和ヲ
期クコトヲ恐レセシメタリ。

如斯状態ナリシヨリ遠ハ財政上極メテ困難ナル状態ニアリシナリ、其他清朝
皇族及ヒ滿洲人ノ大官ノ内ニハ飽迫モ清朝ヲ維持シ様ト云フ割合ニ硬骨ナル
団体アリタリ、ソレ即チ宗社党ト云フ団体ナリキ、コレハ遠ガ革命団ト通セ
ントシテ居ル事ニ大反対ナリシナリ、又革命党ノ方ニテモ遠ガ革命側ノ要求
ヲ拒ミソレ故革命カ成立セスト云フコトヲ唱ヘテ遠ヲ否難スルモノヲカキキ
尚ホ其上蒙古、西藏、方面ニ外交上ノ難問題起リ来リ之モ遠ノ手ニヨリテ起
ルコトナルヘカヲササキ、ソレ故ニ遠氏トシテハ成ル可ク早ク革命政府ト妥協

スルコト得難ナリトナリ、

孫文ノ立場ニ至リテハ遠氏ノソレヨリモ尚一層困難ナリキ、元來革命發生以
來南方ニテハ共和ト云フコトノ政治的意義ヲ忠實ニ了解セルヤ否ヤハ別トシ
テ唯人氣カ浮キ立テテ表面ハ如何ニモ浩氣アリテ益々暴烈シツ、アリシカ如
カリキ、殊ニ女子ノ浩氣ノ状態ハ目撃マシキ程ナリキ。

上海會議前後ニ至リ女子ガ軍隊ヲ募集シタリ、或ハ黃鵠集ノ演說會ヲナシタ
リシコトアリシモ愈々南京ニ革命政府設ケラレ、ヤ女子參政同盟會出未タリ
此時急迫激ノ女子ノ一団カ參議院ニ亂入シテ參政要求ノ叫ヒヲ擧ケタル事モ
アリキ、女子ニシテ既ニ然リトスレハ男子ハ云フ迄モナク革命ノ效果ヲ全フ
スルカ爲メニ忠實ニ努力シ居ラント推測サレハキセマモ實際ハ大イニソ
レト異ニシ居タリ、當時ノ女子ノ浩氣ト云フ事ハ從來女子ノ家庭ノ内ニ束縛
シ過シタル支那ノ習慣上ノ缺陷カ革命ノ風潮ニ煽ラレテ突飛ナル破烈ヲナシ
タルモノニシテ革命當時ノ一餘興ト見ルヘキナリ、
如斯表面ハ甚々浩氣アリシカ内實ノ面結ニ至リテハ甚々薄弱ナリキ、當時ノ
革命軍ニハ武昌ト南京トノ二ツノ中心アリテ其ノ雙方ニ集リシ人々ニハ決シ

テ誠意アル相互ノ了解ハナカリキ。其他ノ各地ノ革命政ト称スル者ノ内ニハ所謂日知見ノ曖昧ナル者ヲクシテ決シテ彼等ノ大多數カ革命ノ必要ヲ自覚シ居リニハアラス。ソレカ表面ノ統一サレテ革命政府出来上リタルナリ。其ノ政府トテモ其ノ目的ノ利害ヲ異ニシタル人々ノ集リニシテ此及対ノ命令徹底シ革命側ニ行ハレタル訣ニアラス。

又其ノ政府ノ首能タル孫文ニ於テモ亦軍事上ノ指揮官タル黃興ニシテモ決シテ人心ヲ統一スルニ充分ナル威望ヲ有セシニハ非ス。夫ハ革命政府カ成立シタルコトモ北京政府カ南方討伐ノ確固タル決心ナカリシ故ナリトモ見ラレナリ。

孫文 自身モ此事ニ就キテ次ノ如ク言ヒ居レリ。

「自分ハカホテヨリ革命方器ヲ作りテ種々ノ計畫ヲ立テ居、シカ愈々此ノ革命ノ成就スルニ至リテ自分ノ計畫ハアマリニ理想ニ偏シ過キ之ヲ今日ノ中国ニ適用スルニ困難ナリト云フ非難起リ来レリ。其結果折角ノ革命モ破壊ニ成功セシノミニテ建設ノ方ニハ失敗セリ。是ハ自分ノ才能モ不充分ナリシナランモ然シ覚負カ真ニ革命ノ意義ヲ了解セス。從テ共和建設ノ熱心ヲ缺

キ居リシ事ナリト

孫文ノ理想カ當時ノ支那ニ取リ余リニ高邁キタリシ。事實ニシテ又當時ノ革命貴族カ各自利害ヲ異ニシテ到底一致ノ行動ヲ取リ得ザリシモ事實ナリキ。コハ健全ナル共和ノ建設ニ取リ大ナル障害トナルモノナリシカ最モ其際立チ切ケタルモノハ財政困難ト云フコトナリキ。コレハ漸ク成立シタル革命政府ヲ毛覆滅セシムル程ノ力ヲ有シタリキ。革命軍力各種ノ官金ヲ没収シ富豪ノ献金ヲ募集シ又海外居留民ヨリノ寄付ヲ得テ軍費ヲ調達シ居タリシカコレニハ制限アリ。故ニ外国人ヨリノ借款ニ頼ラントセシカ諸外國ハ革命亂ノ經過ヲ考ヘテ漸時々支那ヘノ投資ヲ見合セテ并タリシ爲ニ外債ヲ頼ムコトハ殆ント絶望ナリキ。以テ北京政府ノ方カ商運ニ有望ナリキ如斯キ境遇ニ立ケテ吾カ理想通りノ共和建設ニ失望セシカ殊ニ財政ノ新政府ノ基礎ヲ動搖セシメツ、アルコトヲ知りタル彼ハ以テ諸國ヲ倒壊スルコト、共和政治ヲ採用スルコトヲ以テ満足シ今后ノ整理ニツキテハ一切エテ遠慮ニ一任セント思考セシナラント想像シ得。即チ民國元年ノ一月下旬ヨリ二月上旬ニ至リシ遠慮ノ交渉ハ清帝退位、共和制設立ト云フコトニ就

キテハ既ニ一致シ又如何ナル形式ニヨリテ実施スヘキカ問題トナリ居タ
リシナリ

即チ退位后ノ清朝ヲ如何ニ待遇スヘキカト云フコトハ孫文カ臨時大統領
ノ位ヲ袁氏ニ譲スコト及ヒ速カ清帝ヨリノ委託ニヨリテ新共和國ヲ設立ス
ルコト等三ツノ条件カ既ニ内約サレ居タリト推察サル既ニ其後ノ事實ハ
正ニ如斯ニ現レ来レリ孫文ハ困難ナル苦シキ立場ヨリガレテ共和實施ノ
成功ニ甘ンシ其後ノ仕末ハ縱テ袁氏ニ委託セント爲セシモノニシテ只自分
一己ノ利害ヲ考ヘテ俄カニ革命政府ヲ振り棄テタリトハ思ヘス只孫カ袁ニ
對シテ斯クノ如キ讓歩ヲ爲シタルハ當時ノ革命政府ノ基礎ノ益弱ナリシ事
ヲ承スモノニシテ其後ノ共和政府カ形式的ノモノニ過キスシテ袁氏ノ恩ヲ
俟ニ左右サルニ至リシ根本ノ原因ナル可シ

孫文二人ノ妥協ニヨリテ愈々共和政治ヲ設立セハモハヤ國民會議ヲ開ク
必要ハ消滅セリ。速トシテハ己レカ共和ノ宗旨者タルコトヲサケテ清朝カ自
ラ退位ヲ申出ル如クニ仕向クレハ可ナリキカネテヨリ袁ハ自己身下ノ揚渡
等ヲシテ表面ニハ立憲君主制ヲ唱ヘシメテ世間ノ意向ヲ探ラシメ居レリ。其

右共和ノ大勢一定セルヲ見テ速ハ更ニ共和促進會ヲ作ラシメ北京方面ニ於
テ共和賛成ノ叫ヒヲソノカシメタリキ。

コハ寧口江速ナル計畫ナレ既高直接ニ清朝ヲ脅威セシコトハ宗社黨ノ中
心人物タル良湖ヲ暗殺セシメタルコトナリ。更ニ進ミテハ洪棋瑞以下四十六
名ノ有力ナル武官ヲ殺害シテ共和促進ノ電報ヲ北京政府ニ送ラシメタルコ
トナリ。其電報ノ内ニハ「若シ清朝ノ内ニ共和ニ及対スルモノアラハ吾人等ハ
兵ヲ率ヒテ入京シ其人々ト共和ノ利害ヲ論セシト云フ如キ文言在リキ此
電報ニヨリテ清朝ハ全ク絶望セシメラレ今后ハ只袁氏ニスカリテ我儘命ヲ
定メサル可カラサルカ如キ状態ニ陥レリ。

斯クシテ清帝ハ自ら民國元年二月十一日退位ノ詔勅ヲ發セリ。コレニテニ
九七年間継続セル清朝亡ヘリ。而ルニ其詔勅ノ中ニ清帝ハ袁氏ニ全権ヲ托シ
テ共和政府ヲ組織セシメ又南北統一ノ方法ニツキテハ國民軍ト校議セシムト
ノ旨記サレタリキ。換言スレハ今后ノ共和政府ハ清帝ノ恩惠ニヨリ且ツ清帝
ヨリ認メラレタルモノナリト云フコトニ歸スコレハ革命軍ノ大ナル讓歩ナ
リキ退位后ノ清帝ハ依然トシテ大清皇帝ト云フ尊号ヲ保ツコトナリタル

王世襲ニハ非ラズ尙新政府ヨリ四百萬元ノ歳費ヲ得テ生ミ井スルコトハナ
レリ

第四章 北京統一政府

革命ノ結果トシテ共和政府ヲ成立セシヨリ此革命ニ映カレル人々ハ始メ
ヨリ共和建設ヲ目的トシテ忠實ニ努力シタリト考フルハ早計ナリ。孫文以下
或一派ノ人々ハ始メヨリ共和ヲ理想トナシタリシモ大多数ハ清朝ニ対スル
反感ト其政治ニ対スル不平トニ基ケリ。古来支那ノ上ニ縲リ返サレタル
ト同意味ノ革命ヲ考ヘ居タリシナリ。又今尙皇帝ノ位ヲ奪ヒ合フ年ヲサクル
爲ニ共和ニ賛成シタルモノ多カリシナラン。

共和ノ政治的意義ヲ十分理解シタル上ニテ忠實ニ努力セシトハ思ハレズ。
革命後カ我東ニ於テ「民報」ト云フ一ツノ機關雜誌ヲ発行シ居リテ頃ニモ其

紙上ニ於テ共和ノ政治的意義ヲ論シ居リシモノ少ナカリキ。其大部分ハ清朝
排斥論多カリキ古来支那ニハ革命思想行ハレ不良ナル帝ヲ排斥シ別ニ人民
ニ取リテ幸福ナル皇帝ヲ立フルト云フコトハ屢々行ハレタリキ。是支那古来
ヨリノ因襲ナリ。今回ノ革命モ此思想ヲ根底トシテ清朝ニ対スル反感ヲ爆発
シテ生シタル支那固有ノ政治運動ニシテ政界ノ共和思想ニタマタマ刺激セ
ラレテ革命ヲ起シタルモノナリ共和ノ爲メニ革命ヲ起セシニ非ラズシテ革
命ノ爲ニ共和ヲ用ヒタルモノト見ル可シ。故ニ眞ニ共和政治ノ精神ニ基ケル
改革ノ完成ニ対シテ不誠意ナリシナリ。

革命ノ成功ト共ニ革命後内部ニ争ヲ生シソレト同時ニ其勢力衰ヘ始メタ
リ。遠氏ノ如キ奸雄ニ非スニハ後始末ヲ全フスルコト能ハサルカ如クナレハ
即チ此革命カ支那固有ノ革命ナリシカ故ナリ。孫文カ革命政府ヲ提ケ出シテ
後始末ヲ遠氏ニ一任スルコトハナリシヨリ革命政府人全ク自主的行動ヲ取
ルカ如キ勢力ヲ失ヒテ遠ニ歸柔サルカ如キ傾向アリキ。清帝ノ退位セリト
ハ遠モ遠ハ清帝ヨリ委託サレテ共和政府ヲ作リタルモノニシテ革命後ハ殆
ント考ヘラレサリキ。然レニ共和政府ヲ南京ニ置クコト遠氏ハ南京ニ来リテ

大總統トナルコト及ヒ南京政府ニテ作りタル臨時約法ヲ守ルコト等ノ約束
カ革命政府ト共和新政府トノ内ニ締結サレ革命政府ノ面目ハ保タレ居リシ
カ後ニハコレヲモ裏切ラル、カ如キ有様トナレリ

清帝退位后南京政府ニテハ遠氏ヲ臨時大總統ニ送テ遠氏ヲ迎フル為メ
ニ歡迎使ヲ北京ニ送レリ。以一行カ北京ヘ到着セシヨリ二日即ケ二月九日
俄カニ北京ニ軍隊暴動起リ歡迎使一行モ暗殺セラレタリ。而シテ北京ハ未タ
不穩ニシラカ、ル際遠氏カ北京ヲ去リテ南京ヘ赴クコトハ治安ノ為ニ不得
策ナリト考ヘラレタリキ。以暴動ノ報ケ南京ニ位ハリ南京政府ニテハ其事情
ヲ察シ遠氏ハ北京ニ在リテ南方ヲ親裁シ新共和政府ノ大總統トナルコト
ヲ承認セリ。然レモ其軍隊暴動ハ遠氏カ教唆シタルモノニシテ實ハ遠氏カコレ
ヲ口実トシテ南京ヘ赴クコトヲサケントセシハ明カナリ

孫文カ絶望シタル程不統一ナル南京政府カ容易ニ遠氏ニ謀ラレシハ当然
ト云フ可ナレモ此ニハ遠氏ノ買収政策カ映カツテアリシナリ。遠ニ遠ハ北京
ニ於テ就任シ唐紹儀ヲシテ新内閣ヲ組織セシメ今迄南方ニアリシ參議院ハ
北京ニ遷サレ又コレハ歐國會ニシテ正國會ハ翌年ヲ以テ開カル、コトハ十

リ居レリ尚更ニ北京ニ於テ臨時約法發表サレ又、如斯シテ南方政府ハ全ク解
散シ北京カ政治ノ中心トナリ是ヨリ遠カ統一政策ヲ実行スルコト、ナレリ
後系族度カ遠氏ノ為ニ離棄サレ来レル革命党トシテ遠氏ノ行動ヲ束縛スヘ
キ唯一ツノ手段トシテ頼ルヘキモノハ臨時約法ナリ。コレハ五十大ヶ条ヨリ
成リ立ツ假憲法ニシテ今右遠氏カ自己ノ野心ニマカセラ其統一政策ヲ実行
セントスルニ当リテ其行動ヲ束縛スルニ足ルモノハ此約法アルノミナリキ其
約法ノ根本ノ要領ハ參議院ニ絶大ナル権限ヲ與ヘテ著シク大總統ノ行動ヲ
束縛シ居リシナリ

例ハハ官制ノ制定國務委員ヲ任命スルコト宣戰講和條約締結等ニ就キテ
大總統ハ一々參議院ノ同意ヲ得ルヲ要ス尙法律案ノ議決ヲ參議院及ヒ大總
統國務委員ノ連法行為ニ對スル彈劾等ハ參議院ノ権限ニ屬シ居レリ如斯約法
ハ遠カ甘ンシテ服従スル道理ナリ後日遠氏ト旧革命党トノ反目ハ其ニ革命
トナリテ破烈スルニ至レル禍根モ實ニ此約法ノ内ニ潛ミ居リシナリ。此約法
ニヨリテ十月以内ニ國會カ開設サレ其國會ニ於テ正式ノ憲法カ制定セラ
ル、予定ナリキ。斯クシテ共和政府カ北京ニ設ケラル、ニ至リシモ遠ト旧革

命をノ意志トハ決ミテ疎通サレ居ラサリキ。旧革命後ハ新ニク同盟会ト云フ
 政変ヲ作り孫文黃興カ主ヲ率ヒタリ。以テ会ハ民権尊重ヲ主張シ及テ派リ遠ノ
 権限ヲ承継セントスルモノナリシカハ遠氏ニ取リテハ邪廢物ナリキ。然ルニ
 同盟会ハ遠氏ニ対シテ叛逆スルコトニ反セシ一派カ分立シテ共和使ヲ作り
 黎元洪其首領トナリキ。是レハ寧ロ國家主義ヲ持テ政府擁護ヲナスカ如キ傾
 向アリキ以テ政変カ成立セシ頃唐紹儀ノ率ヒタル新内閣ノ組織ヲ見タルモ
 ニケ月半ニテ内閣ノ為メニ倒レタリ。其三番目ニ趙秉鈞ノ手ニヨリテ内閣成
 立セリ趙ハ革命前ヨリ北京ノ警察長ヲ把持シテ遠ノ為ニ働キタル人ナリキ
 趙ノ警察長ト改稱シ兵カト梁士詒ノ財政々策トハ遠ノ計画ヲ成功セシム
 ルニ大イニ力アリキ。

斯ル人ニヨリテ組織サレタル内閣カ遠氏ニヨリテ次第ニ左右セラレ、ニ
 至リ真ノ政党内閣トシテノ実ヲ得サリシコトハ当然ノコトナリ唐内閣
 タオレテ南モナク同盟会ノ内ニ変化起リ民権ヲ尊重スルトハ云ヒナカラ直
 接ニ遠氏ニ反抗セスニ間接ニ遠氏ノ手改ヲ压迫スヘシト云フ主意ノモトニ
 国民党ト云フ一ツノ独立政変起レリ是レハ同盟会程烈シカラサリシモ遠
 氏ニ取テハ一大政敵ナリシナリ前ノ共和使カ暗ニ遠氏ヲ殺スルカ也キ形
 式アリシカ統イテ共和使ノ外ニ民主黨カ起リ高統イテ統一使生レ皆遠氏ノ
 奥敵トシテ認メラレタリキ

斯クノ如クシテ民国元年暮レテ新ラタニ政界ヲ緊張セシム可キ問題残サ
 レ居レリソハ国会開議ナリキ其選挙ニ際シ国民党ト遠ノ奥敵ト競争セシカ
 其結果ハ国民党ノ大勝ニ帰セリ愈々四月ヲ以テ国会開議サレントスル前以
 外ナル事件安泰セリ即ケ国民党ノ理事タル宋教仁カ国会ハ臨席スル為ニ出
 衆スル際上海ニ於テ刺客ニ刺サレ其傷ノタメニ死セシコトナリ是所謂宋案
 ナルモノナリ其事件ノ調査ニ進ムニツレテソレニ總理趙秉鈞カ關係シテ居
 リ遠氏ノ内意ヲ侵ケタルモノナラントノ疑深クナレリ其翌年趙カ俄カニ死
 セシハ遠カ自己ノ罪惡ヲ恐レテ毒殺セシモノナリトナサレ居レリ遠カ国民
 党ノ人ト謀リテ趙ヲ暗殺セリト云フ疑深クナリ遠ニ対スル国民党ノ反感
 甚タシクナレリ二月四月八日国会開会サルハ参謀院ト衆議院トヨリ
 ナル参議院復ハ二百八十一名後者ハ五百七十三名合セテ八百五十四名上レ
 ルカ其約半数ハ一ニ国民党員ナリキ政府ハ是レニ對抗スル手改ヲ取ラサル

可ラナルニ至リ一方買収ニヨリテ國民度ヲ切リ崩スト内情ニ他ノ一方ニ於テハ梁士詒ノ尽力ニヨリテ共和民主統一ノ三度合同ニテ進歩党ヲ作レリ其首領ハ黎元洪ニシテ明ニ遠ノ輿論トナレリ

新国会ニ於テハ次國ニハ何人ヲ正式ノ大統領ニ選フヘキカト云フニ就キテ考慮セシカ目下ノ慶國氏ヨリ外ニハ其人ナシト云フコトヲ知り其代リ大統領ノ権限ヲ束縛セサル可ラスト云フ意見ノ一致ヲ見結局約法ノ精神ヲ失ハサル如キ憲法ヲ作ルト云フコトモ一ツノ手段ニシテ又ハ國民度ニヨリテ責任内閣ヲ作リテ遠氏ヲ束縛スヘシトノニツノ方法ヲ案出セシカ是等ノ向題ヲ提出サレサル以前ニ國民度ニ取リテ緊急事件起リキコハ五ヶ國英独仏日露銀行団ト遠トノ内ニ借款契約成立セルコトナギス是ヨリ以前英米独仏日露銀行団ト遠トノ内ニ借款ノ申込ミアリタルモ日露ト他ノ諸國トノ間ニ意見ノ相違起リ又借款ノ条件ニ付キテ民國內部ノ反対ノ為ニ行キ難キミトナリ居レリ民國元身米國力究然大ヶ國ノ借款團ヨリ脱セリ其理由ハ借款團ノ条件ハ民國ノ財政ニ關係シ民國ノ独立ヲ害セントスルモノナル為メ米國ハトコマテモ門戸開放ヲ標榜シ民國ノ財政ニ関スル如キ借款

ニハ關係セスト主張セリ

遠ハ宋案ニヨリテ自己ニ對スル旧革命度ノ反感力峻巖トナリ何時平和カ破裂スルヤモ知レストノコトヲ知シ其際勝利ヲ占ムルニハ先ツ財力ヲ豊富ニスルハ要アルコトヲ知り如何ナル條件ヲモ忍ノヒテ外國借款ヲ成立セシメントスル決心ヲ立テ米國ヲ除ケル五ヶ國借款團ニ向ヒテ急速ニ交渉シ二千五百萬磅ノ借款契約ヲ成立セシメタルナリ此際國會ニ向ツテ何等ノ夫券ナク全ク独斷ニヨリテナシタルモノナレハ國會ニテハ憲法行為トナシ國民度ハ猛烈ニ反抗セリ恰モ其頃宋案ノ内狀明白トナリ遠張ノ兩人ハ其責任ヲ免レ得サルカ如キコト明カトナリ且ツ右借款問題トカ重ナリテ國民度ハ勿論旧革命度系ニ屬スル南方ノ政治家軍人ハ遠ニ對スル不信ノ声ヲアケ南北ノ關係極メテ峻巖トナレリ

此借款ニ成立シタルコトハ遠ニ取リテノ大ナル強ミナリキ南方ノ反遠運動ヲ压迫スルコトニ就キテハ比莫大ナル金力カ遠ニ取リテ大ナル助ケトナリシナリ其金力ニヨリテ左右ニ得ヘキ遠氏ノ兵力モ南方ニ比シテハ遠力ニ優劣ナリキ南方トシテハ綏イテ江西都督ノ李烈鈞安徽都督ノ柏文輝広東都

督ノ胡漢民ノ三名ノ有スル兵力ヲ頼ミ得ルノミナリキ斯クテ遠氏ハ万一ノ際ニ一挙ニ南方ヲ圧倒スル準備ヲ整ヘル傍ニ動乱破裂ノ責任ヲ南方ヘ夏ハスカ如キ計畧ヲモメクヲシツ、アリキ其準備整ヒタル民國元年六月ヲ以テ李烈鈞ヲ免職シ候イテ湘湖ノ二氏ヲ免職セシメタリシレハ南方派ニ対スル大ナル侮辱テアリ從ツテ平和破裂ノ導火線トナレリ

血性男兒トシテ知ラレタル李烈鈞ハ今ヤシノフコト能ハスミテ湖口ノ砲台ヲ占領シテ討遠軍ヲ起スコト、ナレリコレニヨリテ英ニ革命起レリ遠ノ政敵トシテ久シク不遇ノ地ニ沈ミ居リシ岑春煊カ上海ニ在リテ討遠軍大總統トナレリ是レヲ推挙シタルハ黃興ニシテ黃自身モ南方ニ於テ比革命ニ参加セリ以革命ハ成功ニ起リタルモノニシテ南方ハ準備不十分ナリキ旧革命噴タル孫文黃興ハ遠ノ專政行為ヲ不快ニ思ヒシモ旧革命噴復ヲ集メテ再ヒ反遠運動ヲ起スカ如キ努力ヲ欠キ居レリ

カ、ル革命ニハ商人ノ同情ト助力ヲ求ムル必要アリキ然ルニ南方ノ住人ハ遠ノ統一政策カ着々実行サレテ世ノ秩序カ恢復シツ、アルニ満足シテ再ヒ動乱ノ禍ニ苦メラルハコト、深ク嫌悪セリ遠カハ勝ヲ期シ居リシハ南方

ノ住人カ秩序ノ安定ヲ欲求シ居ルコトヲ知セルカ爲メナリキ革命噴ノ内訌ニ於テモ第一革命ノ頃ヨリ完全ニ一致シ居ラザリキ其後モ議論ノ上ニ於テハ兎モ角一致セリト云ヘトモ実行ノ上ニ於テハ遠ヲ壓スルコトヲ得ザリキ故ニ孫文ハ始メヨリ討遠ノ計ヲメクラシタルコトモナリ又上記ニ都督モ十分ナル打合セアリシニ非ス李烈鈞其人モ江西方面ノ革命派ニ誘ハレテ自己ノ血氣ニ任セラズ兵ヲ率ケタルモノナリキ要スルニ南方派ハ遠ニ対シテハ深キ不滿ノ叫ヒヲ率ケツ、アリシト云ヘ其声ノ大ナリシニ比シ固結ハ極メテ茲弱ナリキ遠ノ爲ニ反ツテ其叫ヒヲ利用サレテ南方ニ対スル國民ノ同情ヲ失フカ如キ傾向アリキ換言スレハ英ニ革命ノ主謀者ハ遠其人ニシテ革命ノ結果ハ遠ノ統一政策ヲ完成セシムルニ過キザリキ

討遠軍ハ近々ニケ月ノ間ニ全ク北軍ノタメニ壓迫セラレ旧革命噴ノ首領連ハ上海ニ集リ居リシカ愈々革命カ失敗セシヲ見テ統々海外ヘ敗走セリ南京ニ根據ヲ置キシ黃興モ最後マテ戦フコトヲ得スシテ何時ノ間ニカ敗走シタリシカ是等ノ事ハ革命軍ニ取ツテハ大ナル打撃ナリキ南京カ張勳ニヨリテ占領サレシ時日本ノ國旗カ侮辱サレ吾居國民カ迫害ヲ受ケタルコト大ナ

ルモノアリキ

コレハ一時南京事件トシテ我軍隊ノ輿論ヲ騒セリ其後各地ニテハ日支両
國人衝突起リキ以事件ハ撤少ナルモノナリシカ是レハ日支兩國ノ感情ノ融
和ヲ缺如セシコトヲ暗示セルモノニシテ兩國ノ為ニ悲シム可キコトナリキ
比ノ動乱ニ當ツテ英國カ前ノ革命ノ如ク南方ニ對シテ好意ヲ示サスムシロ
國氏ノ統一政策ノ完成ヲ希望シ暗ニ助力セルハ國氏ニ取ツテハ一ツノ強味
タリギ兵ニ革命ノ突撃ニ於テ北京國會ノ國民復議復ノ内ニモ急ニ南京ニ走
ツテ革命軍ニ参加スル者モアリシカ北京ニ殘リシ者ハ皆國氏ニ直接反抗ス
ル勇氣ヲ缺ケリ後ツテ國氏ハ從來ヨリ以上ニ國民復議ヲ憚ルハ必要ナカリキ後
來輿論ノ中心ナリシ進步派ノ内ニモ分裂生シタル事ヲ知リシ國氏ハ別ニ公
民復議ヲ組織セリ比公民復議ハ國氏ノ内命ヲ受ケテ國會ニ於テ先ツ大總統ノ選
挙ヲ主張セリ國民復議ニテハ當時大總統トナリ得可キ人ニハ國氏ヲ置イテハ
他ニ人物ナキヲ覺付キ大總統選舉ニ先ケテ憲法ヲ制定シテ其权限ヲ定メ置
クコトノ必要ヲ力説セリ然ルニ英ニ革命失敗ノ為メ比主張ヲ実行スル能ハ
ズ大總統ノ選舉ヲ先キニ実行セザル可カラサルノ止ムナキニ至レリ同年十

月ニ至リ國會ニ於テ其選舉力行ハレテ定ノ如ク國氏カ大總統ニ當選シ蔡元
洪カ副大統領ニ當選セリ

茲ニ於テ我日本ヲ始メ他ノ各國ハ中華民國ヲ承認スルニ至レリ國氏十月
十日即チ英一革命ノ記念日ヲ以テ正式ニ大總統ニ就任スルノ儀式ヲ行ヒ正
式ニ政府力始メテ組織サレタリ其後モ國民復議ハ憲法制定ヲ要求シテ止マヌ
既ニ六月ニ憲法起草委員六名カ任命サレテ其人々ノ中ニヨツテ憲法ノ草案
カ作ラレ居ル筈ナリシモ其委員ノ約半數ハ國民復議ナリシタメ其委員ノ
起草ニタル憲法案ハ結局國氏ニ取リテハ極メテ不利ナルモノナリシハ推測
ニ餘リアルモノナリキ十月下旬ニ至リテ脱稿セシ憲法草案ハ果シテ國民復
議ノ希望ニ合シタルモノ即チ大總統ノ权限ヲ極度ニ束縛シタルモノナリキ
比案カ國會ニ於テ若シ通過セシニハ國氏ハ國民復議ニ屈服セシコトナル茲
ニ於テ國氏ハ非常手段ニ訴フ比苦境ヨリ脱出セザル可ラザリキ即チ十一
月四日ニ至リテ突然國民復議解散ノ命令ヲ發シ其議復四百三十八名ノ議復資
格ヲ剝奪セリ其結果約半數ノ議復殘リシモカハル小數ノ議復ノミニテハ議
會ヲ圍キ議事ヲ進行スルコトヲ得サリキ議復ノ過半數出席セザレハ議事ヲ

ナスコト能ハサルハ議院法ノ規定ナルヲ以テ議會ハ自然國會ニ得サルニ至
レリヨツテ議會ハ議事ヲ中止シテ其代リニ中央政治會議ナルモノヲ設ケテ
機關ニヨツテ政治ヲ議スルコト、ナリキ

此會議ニヨツテ約法條令ハ作ラレコレニヨリテ新憲法制定セラル、ニ至
レリ然レ既ニ國會カ中止サレ居リシヲ以テ正式ノ憲法ヲ制定スル能ハス
故ニ先ツ此會議ノ命令ニヨリテ前ノ臨時約法ヲ修正スルコト、ナレリ其修
正約法ヲ作りテ右將來ニナラヒテ正式憲法ヲ制定セントセリ民國三年五月
一日修正約法發布サレシカ其要領ハ著シク大總統ノ权限ヲ擴張シ國會ノ权
限ヲ縮小セルモノナリキ尙此法ニヨレハ國務院カ設ケラレテ政府ノ事務ヲ
掌ルコトニナリ居ルモコハ只遠氏ノ命令ヲ実行スル事務院タルニ過キサリ
キ先ノ臨時約法ニヨツテ英ヘラレタリシ人民ノ權利ハ修正約法ニテハ殆ン
ト剝奪セラレタリキ旧約法ハ國民ニ對シテ政府ノ行政ノ責任ヲ負フ事ニナ
リ居リシモ新約法ニ於テハ大總統自ラ其責任ヲ負フ政府ハ實ニ有名無實
トナレリ其實際ニ於テハ一切ノ政治ハ大總統ノ独斷ニヨリテ決セラレルコ
ト、ナリ陸海軍モ大總統カ其元帥トシテ一切ノ軍務ヲ管理シ別ニ將軍行ヲ

設ケテ軍務ヲ司ラシメ將軍ヲ各有ニ駐在セシメテ夫々各有テ監督セシムル
コトニナリ居レリ各有ニハ將軍ノ外ニ巡按使ナルモノヲ置キ民政ト警察ト
ニ當ラシメタリ而シテ各有ノ司法ト財政トハ直接中央政府ヨリ監督サル各
省ニハ形式ニテモ地方自治機關ヲ設クルコト、セリ此修正約法ハ民國三年
七月ヨリ實施セラレタリ

於茲遠氏ノ統一政策モ一先ツ完成セリ此政治ノ外面的形式ハ共和ノ相ヲ
有スルモ其運用ハ全ク專制政治ニ外ナラザリキ然レ既當時ノ民心ハ著シク
平和ノ安定ヲ希望セシ爲ニ斯ル專制納ナル遠氏ノ政策モ止ムナク承認スル
ニ至レリ遠氏ハ此成功ノ氣勢ニ乘シテ自己ノ手腕ヲ試ミンタメ徹底的ニ專
制政治ヲ實現セントセリ是即ケ彼カ起セシ帝政運動ノ初メナリ而シテ遠氏
ノ此運動ノ失敗カヤカラ夫那現代ノ政局混乱ノ一端トナレリ

第五 章

帝政運動ト第三革命

帝政運動ハ遠氏ノ專制的統一政策ノ延長ナリ遠氏ハ修正約法ニヨリテ大統
統ノ任期ヲ十ヶ年トシ尚重任ヲ許ス事トシ軍人ニ對シテハ告諭ヲ出シ自己
ニ忠義ヲ尽ス可キコトヲ要求シ官吏ニハ職務令ヲ奉シテ円柄ナル要求ヲ強
制セリ學校ノ教科書ニモ斯ル横暴ナル主義ヲ奨励スヘキ記事ヲ挿入セシメ
タリ教員ニテハ孔子ヲ尊ヒ嚴格ナル孔子崇ヲ行ヒ孔子ノ君權尊重ノ忠義若
孝ヲ鼓吹セリ何レノ時代ニ於テモ支配者ノ地位ニアリシ者ハ偉ニ以孔子ノ
忠義若孝ヲ自家ノ地位擁護ノ爲ニ利用スルカ慣例ナリキ實ニ孔子ノ思想即
チ儒教ノ教義ハ支配者階級ノ哲學ニシテ支配者階級ノ爲ニハ極メテ都合ヨ
キ保護ノ役ヲ勤ムルモノナリ遠氏モ其慣例ニヨリテ將來自己カ皇帝タラン
トスル準備トシテ實權ハ既ニ握レルカ支配者哲學ナル孔子教ヲ宣位セリ當
時民間ニ於テサキニ退位ニタル宣統帝ノ爲ニ同情ノ念ヲ懷ク者少ナカラス
彼ノ宋杜寅ノ如キモ清帝復位ヲ目的トセル運動ヲ續ケタリ以運動ハ可ナリ
力強キモノナリシカ俄カニ遠氏ヨリ實權ヲ奪フ程ノ實カヲ有セサリキ當時
又別ニ盧君英和例ヲ主張スルモノアリキ即チ政君ノ實權ハ共和ノ大總統ニ

委任シ皇帝ハ宗教及道德ヲ管理セシメントスルモノナリキ何レニセヨ皇帝
ヲ戴ク考ヘカ輿論トシテ人民ノ一角ニ起リシコトハ爭フヘカラサル事實ナ
リ如斯輿論ノ一部カ旧皇帝ノ復位ヲ要求シワ、アル際ニ遠氏カ其位ニ就ク
コトハ遠氏トシテモ可ナリニ困難ナルコトハ知悉セリ斯ルカ政ニ遠氏ハ自
己ノ帝位ニツクコトニ及対スルカ如キ人々ヲ買収セシムルタメ自己ノ部下
ヲシテ其運動ヲ開始セシメタリ幸ヒ大正三年夏歐洲大戦勃發シ列國ハ支那
ヲ顧ル暇ナカリシニ乘シテ自己ノ策畧ヲ遂行セントセリ次イテ大正四年日
支交渉ノ起リシヲ幸ヒニ恰カモ日本カ支那ニ對シテ如何ニモ大規模ナル野
心ヲ懷ケルカノ如ク吹漲シラ民心ヲ以方面ニ集中セシメ又レニヨリテ自己
ノ地位ヲ安全ニセントセリ以日支交渉カ漸ヤク解決サレテ向モ帝政實施ノ
運動ハ着々實行サレワ、アリキ四年八月ニ至リ民國政府顧問ナリシ米人
Goodman 氏カ帝政論ヲ發表シ現在ノ支那ニハ共和ハ適セス帝政カ最モ
適當ナリトノコトヲ述ヘ尚平和ヲ亂シテ迄モ帝政ヲ布クコトハ不可ナリト
付加セリ

於茲遠氏一味ハ以帝政論ノ本質ヲ解スルコトナク好年明ヲ得タルモノト

シテ益々帝政鼓吹ヲナシ以帝政論ノ形式方面ノミヲ宣位セリ八月下旬園氏
一味ハ憲安会ナルモノヲ組織シテ共和政治ノ害ヲ研究セリ其材料ハ多クハ
南米メキシコ等ノ例ヲ採レルハ面白キ現象ナリキ以テ今ノ積極的目的ハ帝政
鼓吹ニアリシコトハ明カナリ當時又同シ園氏ノ異議ナル亦東派ノ団体モア
リ以テ尙領カ梁士詒ナリシカ是人梁力自己ノ勢力ヲ張ル為ニ帝政運動ヲ利
用シタルカヤキ傾向アリキ其為ニ憲安会号トハヨク統一セラレサリキ其後
憲安会ハ固モナク内訌ノ為ニ解散トナリシカ梁氏一派ノ帝政運動ハ益々盛
トナリ具体的行動トシテ現ハルハ至レリ梁氏ハ當時國會ノ職務ヲ代行ス
ル為メノ参政院ニ根拠ヲ置キテ帝政運動ヲ行ヒツ、アリキ既ニ以時代ニハ
強制的ニ園氏カ帝位ニ就クコトハ不可能ナリ故ニ表面ナリニ人民ノ賛成ヲ
得ル必要アリキ故ニ帝政派ハ金力ト威力トヲ以テ頼リニ人心ヲ買収系統シ
始メタリカクシテ右國民大會ヲ開キ団体投票ヲ行ヒ帝政派ハ共和政ヲ決セ
ントセリ勿論園一派ノ考ヘハ國民大會へ出席スル代表者ノ選挙ハ政府力
カト金力トヲ以テ極力ヲ考シテ帝政賛成者ノミヲ出ス所存ナリキ
民國四年十一月廿六日大會カ開カレ其投票ノ結果ハ二千八ノ代表者カ悉ク帝

政ハ立憲君主制ニ賛成セリ参政院ハ此結果ヲ理由トシテ園氏ニ對シテ推
戴書ヲ發シ皇帝タルコトヲ促セリ園氏ハ形式上一時許諾シ爾後ノ請求ヲ受
ケテ愈々帝位ニ即ケリ然レモ其態度ハ恰モ自身ハ皇帝タル事ヲ欲セザルモ
無理ニ推挙セラレタルヲ以テ止ムナクト去ツカ如キ形式ヲ裝ヘリ是レ民國
四年十二月十二日ナリキ
於茲園氏ハ純然タル皇帝トナリ澄マシ翌年正月ヨリ年号ヲ洪憲ト改メ自
ラ即位ノ式ヲ行ヘリ園氏ハ以國元諸外國ノ態度ニ絶エス注意ヲ私ヒツ、ア
リシ元別ニ干渉スル模範ナカリシヲ以テ安堵シ居レリ然ルニ帝政運動ノ最
中即今民國四年十月下旬叙日本力戦力ニ帝政延期勸告ヲナシ續イテ英露仏
伊ノ四ヶ國カ同稱ノ勸告ヲナセリ日本當局ノ承認ニヨレハ以テ帝政實行ハ
折角平和トナリシ支那モ又々動亂ノ巻ト化スモ、ニシテ再ヒ支那ノ乱ルハ
ハ東洋平和カ乱ルハコトナリ故帝政實行延期ヲ勸告スルモノナリトノコト
ナリキ然ラハ何故ニ早ク勸告セザリシヤハ疑問ナリ或ハ我政府ハ英國ノ指
揮ヲ受ケタルヤモ知レズ外務省ト陸軍省トノ意見ノ相違セシコトハ注意ス
ヘキ点ナリ英國等ノ忠告ニヨリテ我國カ始メテ勸告セリト見ルカ最モ正當

十見解ナリ

何レニシテモ其勸告ハ既ニ時期ヲ失セリ故ニ遂ニ一派トシテモ殆ント熱セ
ル帝政運動ヲ成カニ中止スルコト不可能ナリシハ当然ノコトナリ日本ハ二
國迄モ勸告ヲナセシカ全然容レラレザリキ遂ニ一派ハ外國ヨリノ干渉ニ関
係ナク運動ノ整理ヲ努力セリ斯クシテ帝政運動ハ益々白熱化セシカ以運動
ノ前途ヲ阻害スルカ如キ原因内閣ニ起レリソハ国内ニ於ケル帝政反対
運動ノ氣運漸次濃厚トナリシナリ以帝政反対ノ氣運ヲ牽ケシ団体ノ内ニ大
体三ツノ種類アリ其(一)ハ帝政ノ前途ヲ真ニ不安ニ思ヒシ人々ノ団体コレハ
遠氏ノ友人ノ部下ニ多カリキ(二)ハ遠氏其人ノ野心ヲ不快ニ感シタル人々
ノ団体ニテコレハ革命黨ノ多数ナリ(三)ハ北京政界ノ暗闘ニ於ケル不平
分子ノ団体ナリ是レニハ前述ノ如ク梁氏ヲ頭目トスル左派派アリ又段祺瑞
ヲ首領トスル右派派ナルモノアリ尚以外進歩派ニ屬スル政客アリ夫々其勢
力ヲ競ヒ梁氏一派カ以帝政運動ニ尽力スルニ從ツテ勢力ヲ得来レルヲ見テ
他ノ人々カ自ラ互ニ反感ヲ懷キ運動其物ニモ反対スルカ如キ結果ヲ生セリ
其反対運動ノ傾向ハ漸次顯著トナリ殊ニ上海ノ方面ニテハ其反抗運動ノ具

①

体的ニ表ハル、ニ至レリ遂ニ政府モ之レカ為メニハ苦心セサルヘカラサル状
態ニ至レリ然ルニ遂ニ皇帝タルコトヲ約シテヨリ間モナク即ケ十二月下旬
ニ至リ殊ニ甚シク遠氏ヲ驚カシメタル事件起レリ即チ雲南將軍ノ唐繼堯ヨ
リ帝政中止ヲ要求スル電報ヲ發ケ取りタルコトナリ勿論遠氏ハ拒絕ノ返電
ヲ發セルモ雲南ニ於テハ何処迄モ遠ノ帝政ニ反対スルト云フ主旨ヲ以テ独
立ヲ宣言シアル迄モ共和政治ヲ擁護シテ遠ノ野心ヲ挫カン目的ニテ討逆軍
ヲ組織セリ是等ニ革命ノ準備ナリキ

雲南軍兵カ如何ナル理由ニヨリ如何ナル順序ヲ以テ決行サル、ニ至レル
カハ頗ル其真相不明ナリ然レモ此は岑兵ハ唐氏一側ノ考ヘニハ非スシテ其外
ニ至レテ計画セルモノアリテ唐氏ハ其者ニ促カサレテ表面ノ実行者トナリ
タルニ過ギサルコトハ疑フヘカラサルコトナリ其計画者ノ一人トシテ北京
ノ將軍府ニ奉職シ居リシ蔡鈞ナル人アリ蔡氏ハ先雲南將軍タリシコトアリ
テ比力固ハ自己ノ勢力地ナリシナリ而シテ唐氏ハ自己ノ後輩トシテ蔡氏カ
推荐セルモノナリ蔡氏カ及遠運動ヲ計画セルコトニ就テハ予テヨリ疑ヲ侵
ケ居リ遠氏トシテモ或疑ヲ懷テ居リシトノ事ナレハ蔡カ及遠運動ノ計画ヲ

ナシ居リシハ明カナリエレカ或動機ヨリテ急ニ唐氏ヲ促シテ挙兵セシメ
タルナラン然レモ其動機力如何ナル真相ヲ有スルヤハ不明ナリ

蔡氏ノ共謀者トシテ遠氏ノ部下ノ馮國璋ナル將軍アリ馮氏ハ江蘇將軍ト
シテ南京ニ駐在セシカ彼モ帝政ニハ反対ニシテ是レカ爲メニ遠氏トノ間ニ
不和ヲ生シ自然蔡馮兩人カ相結シテ反遠ノ計画ヲ謀リ居レリト云ハル遠モ
馮氏ノ行動ニハ深ハ疑ヲ懷キ斯カル者ヲ南京ニ居ラシムルハ不和ナレハ業
東ニ呼ビ戻スコト、ナリ居ルコトヲ自ラ氣付テ自己ノ安全ヲ計カル爲ニ平
メヨリノ反遠運動ヲ蔡氏ニ促シテ挙兵セシメタルモノナリト云フ人モアレ
ト是ハ單ニ消息トシテ取ルヘキモノニシテ事實トシテ採用スルコト不可ナ
ルカ其時ノ事情ヲヨク穿テ論ナリ是レ實ニ庚三革命ノ原因ナリト認ムヘ
キモノアリ

庚三革命ニ就キテ旧革命党ハ始メニハ密接ナル關係ヲ有セナリキ旧革命
党ハ庚ニ革命ノ失敗後殆ント分裂シ孫文ハ吾國東京ニ於テハ華革命党ヲ組
織シ黃興ハ米國ヘ亡命セリ其旧革命党ノ分裂ヲ區別セハ四種ニ分ツコト得
ルニ急進理想派孫文ヲ中心トシテ吾國東京ニ根據ヲ有セシモノハ一

一、黃興一派ノ軍人派ニシテ之レハ米國及ビ東京ニ散在セリ、

二、岑春煊ヲ主トスル漸進派ナリ、之レハ南洋方面ニ密レリ、

三、唐紹儀、湯化龍以下ノ言論派ナリ、之レハ大抵上海ニ集リ居レリ

之等ハ何レモ袁氏ニ対シテ不快ノ念ヲ抱キ、何事カヲ計画シツツアリ
シカ、其ノ間ノ連絡ハ不充分ナリキ、其ノ間ニ於テ前ノ第一革命ノ暴動
者李烈鈞カ又一種ノ反袁運動ヲ起スルニ奔走シ居リテ、寧口岑春煊一派
ト親シニス蔡錫トモ連絡ヲ取リ居タリシモ、愈々蔡氏カ第三革命ヲ起ス
ニ當テ李氏モ亦雲南ニ入り込ミテ之ニ共同スルコトナレリ、此ノ革命
動機後一ヶ月ニシテ岑氏ハ我東京ニ來リ孫文ト会見シテ何事カヲ計画ス
ル所アリ、更ニ駭ジテ孟西村ニ赴キテ革命ニ参加スルコトナレリ、孫
文カ東京ヨリ上海ニ入り込ミシハソレヨリ更ニ三月月後ナリ、之等ハ即
チ旧革命党カ最初ヨリ充分ノ連絡ヲ得テ此ノ革命ニ参加シタルモノニハ
アラナルヲ証明セルモノナリ、要スルニ第三革命ハ袁氏幕下ノ軍人ニ
シテ、而クモ旧革命党ト多少ノ連絡ヲ有スルモノニ依テ端緒ヲ開クレタ
ルモノナリ、然レモ反袁ノ氣分殊ニ帝制討滅看トシテノ袁氏ノ野心ヲ憎ム

感情ハ策外各方面ニ漲リ、旧革命党ハ例ハ分裂ハナシ居タリニカトモ、
絶ヘズ攻策ノ氣運ヲ刑戦ニ悟タリシコトハ預テカアルコトナリ、從テ此ノ
革命ノ靈雨ニ應リテヨリ旧革命党カ一散ニ若氣ツテルコトハ勿論、其ノ他
總テ攻策ノ立場ニ在ル人々ハ次第ニ之レニ參加シテ、根底ヲ動カトナリ
米レリ、即チ前ノ第一革命ヨリモ根底深ク且ツ範圍モ広ク、例ハ次行陣
備ノ程度ニ於テハ尚ホ不充分ナリト多ク反響氣運ノ大勢ニ役サレタル哉
ニ於テ大ナル懸味アリキ、袁氏モ此ノ動亂カ以外ニ發展スルニ警キ居ル
中ニ民國五年三月ニナリテ広西將軍陸榮廷又革命ニ參加シテ独立ヲ宣言
セリ、其ノ頃革命軍即旧國軍ハ北方ノ四川省ニ侵入シテ袁派ノ軍隊ト對
峙シテ稍據ハサル形勢ニ陥リ居タリ、然レ分後ノ發展カ多少氣運ハレル
如ク收斂ナリシモ今広西省カ革命ニ參加セシタメ勇氣ヲ恢復セリ、從テ
袁氏ニハ容易ナラサル打擊トナリキ、加フルニ袁氏ハ當時動亂ノ始末ニ
就テ頻りに外交團ヨリ諮詢セラレ又討伐ノ爲ニ財政ノ困難ヲ感ジ、天
下ス獨同璋等ヨリ帝政中止ノ勸告ヲ受ケル有様ニテ次第ニ悲觀セサルヲ
覺タル程ニ至リキ、茲ニ於テ改訂三月二十三日ヲ以テ帝政取消ヲ宣言
スルコトナレリ、

帝政ヲ取消セハ革命軍モ口實ヲ失テ不得已動亂ヲ止ムルナラント考ヘ
タルモノニテ、其ノ傍ヲ徐世昌、段祺瑞ノ兩人ニ南北妥協ノ件ヲ委託セ
リ、然レ革命側ハ只帝制ヲ止ムルコトダケニテハ満足セズ、袁氏ヲシテ、
大統ノ職ヲ退クシメ、尚ホ帝制ノ發起タル十三人ヲバ死刑スデキコトヲ參
件トスルトスル位ノ意氣込ナリシカハ、帝制取消ハ從ラニ袁氏ノ權威ヲ
傷ツケタルニスキナリキ、然レ四月ニ至リ廣東將軍龍濟光カ又革命
側ニ壓迫ナレテ独立ヲ宣言スルコトナリ、此ノ龍氏ハ袁氏ノ恩ヲ蒙レル
人デアリ、從テ袁氏ノ信頼ヲ受ケ居タル人ナルカ其ノ人々今龍ヲ独立シ
タト云フコトハ愈々袁氏ニ打擊ヲ加ヘタルモノナリ、尚ホ當時袁氏ハ頻りに
二人心ヲ緩和スル手段ヲ謀ジテ、新ニ責任内閣ヲ作ルコトニナリ段氏ヲ
シテ其ノ内閣ヲ組織サセルコトナレリ、最早ソレ等ハ手遅レニシテ
翌五月ニナリテハ南方ノ各省カ相繼テ獨立シ、又殆ンド独立セントスル
バカリノ動搖ヲ示シ居レリ、北ノ内蒙古ニ於テハ巴布札布カ動亂ヲ起シ
滿州ニ於テハ奉天將軍ノ張作霖カ之亦大恩ヲ蒙ル袁氏ニ叛カントセル程

勢ナリキ、其ノ混亂ノ向ニ於テ吾國璋ク時局解決ヲ計ルタメニ同志ノ人々ヲ南京ニ集メテ五月下旬ニハ所謂南京會議ヲ開キシカ之レヲモ何ノ効ナクミテ馮カ時局ニ取テ或ル重要ナル地位ト勢カトテ有シ居ルコトヲ世間ニ公告セルニスキス、其ノ同ジ五月ニ於テ南方ノ革命軍ハ軍務院ヲ組織シテ軍務院ノ名ヲ以テ龍ク迄モ袁氏ノ大統領タルコトヲ承認セス、龍ク迄モ共和ヲ擁護スルカ務ヲ宣言シ發表セリ、抑々袁氏カ帝制ヲ討馬シタル時ニハ我日本ニ或ル利権ヲ與ヘテソレト交換ニ帝制ヲ承認サセント企テタリ、ソレガ成功ヲ見サリシカハ今度ハ英國ニ依頼シテ其ノ援助ヲホメタリ、英國ハ初メハ袁氏ニ助カヲ與ヘシカ其ノ後ノ形勢ニ顧テ忽チ態度ヲ一変シテ日本ト共同スルコトニナリ、大イニ袁氏ヲ失望サセタリ、其ノ中ニ袁氏カ信賴セル云西、云東ノ二省カ叛キ又財政ノ困難ヲ救フ窮策トシテ兌換停止ヲ実行サセタルトカ甚ガシク政府ノ信用ヲ失ヘル一理理由トナリキ、又南北妥協ノ仲介者トシテ段祺瑞ヲ用ヒシカ段氏カ私カニ馮國璋ト連絡シテ自分等ノ前途ヲ開拓スルトソ考ヘ忠實ナル部下トシテ傷トナラズテセザリキ、此等ニ至テ運石ノ快傑袁氏モカ盡キ策窮シテ頓

内ト憤慨トニ因ヘタ結果民國五年六月六日五十八オヲ以テ遂ニ歐州ノ風ト化セリ、

第六章 列強ノ對支革命

袁氏カ崩レテ後、支那ノ政界ハ、利益ノ衝突ト陰謀ノ競争ノタメニ、正務黒台モ困難ノ中ニ入ツテ行キタリ、其ノ困難ニ對スル列強ノ國モ自カラ紛窮ノ中ニ入ラサルヲ得ザリキ、之レハ必シズシモ袁氏ガ崩シクタメノミト云フベカラズ、現ニ袁氏在世ノ時ヨリ自ラ列國ノ對支關係ヲ自巳ノ国内政策ニ利用スルタメニ苦心シタ結果トシテ以前ヨリ懸レカケ居タリ、又例ヘ袁氏カ左程ノ苦心ヲ持シ居ラザリシモノトシテモ第一革命後ノ支那ノ動搖ハ對支關係ニ重要ナルコトヲ齎ラサザルヲ得ス、其ノ変化ノ有様ヲ彙ネルコトカ、革命以後ノ支那ノ狀態ヲ知ルニ欠クベカラザル條件ナリキ、

袁氏ノ没後ノ狀態ハ先ツ第一革命前後ヨリ袁氏ノ没スルマテノ五六年

向ノ列強ノ対支關係ヲ大見スルナリ、此ノ対支關係ハ、政治、経済ノ兩
方面ニ大体ハ分レレカ此ノニツハ全ク分離シテ考フルト、出来ヌトアリ、
但レニセヨ日清戦後以テ活潑ニ現レ来リタルモノ、コレヲ最初ハ露国ナリ、
又露国ノ方ヨリ動キカケタノミナラス当時ノ支那ノ外交ノ李鴻章ガ我日
本ヲ抑ヘレタメニ露国ニ信賴スル關係ヲ取リシタメニ対支關係カテシタ
リ、向モノク日露戦争ニ於テ露ノ対支關係カ大ナル打撃ヲ蒙リ、諸外國
モ一時キヲ引ク様ニナレリ、向モノク露国ガ再ビ日本ニ接キスル方針ヲ
トレ取ニナリシタメニ他ノ一方ニ於テ英露ノ關係カ和シ来リ、之ニ日英
露三國ノ向ニ或ル親シミガ現ハレ之レカ自ラ対支關係ニ現レ来タレリ、
而カモ其ノ側ニ米國ガ特殊ノ活動ヲナス様ニナリタリ、其ノ關係ノ變化
ヲ説明スルタメニハ先ツ英露兩國ヨリ始メルカ便利ナリ、我カ日本ガ朝
鮮ヲ併合シテヨリ大ケ月後、支那ノ革命ヨリハケ月前ニ露カ突然支那ニ
対シテ伊犁(イリー)ニ於ケル利益(露国ノ)ヲ保証スベキ大ケ条ヲ提
出シタリ、此ノ伊犁ハ外蒙古ノ支那領ニシテ露領ノ中央亞細亞ノ東ニ当
リ、前ニ一八八一年ノ条約ニヨリテ露カ伊犁ニ対シテ商業上ノ或ル特權

六六

ヲ得タルガ今ヤソレラ一層増大スルタメニ露國ニ公テタルモノニシテ
遂ニ自由行動ノ發展ニテ承諾サセタリ、ソレト殆ド同時ニ英國ノ片馬
(ヘンバ)占領問題起レリ、支那ノ雲南省ノ西隅ニアリテ、英領ビルマ
ニ接近セル地方ナリ、此ノ方面ノ國境ハ正確ナラザリキ、ソレヲ英國ハ
利用シテ片馬ヲ領土ノ中ニ引キ入レントシテ俄ニ占領ヲ試ミタレト支那
ヨリ抗議アリタレト、之ハ曖昧ニシテ終ヒタリ、
向モノク第一革命カ起リ其ノ時ニ英露兩國カ大野心ヲ起シテ對馬ヲナ
セリ、ソレガ蒙古ト西藏トノ独立問題ナリ、蒙古ノ背後ニハ露アリ、西
藏ノ後ニハ英國アリタリ、露ノ東洋政策カ日露戦争ノタメニ覆カヘサレ
テヨリ後ニ露ハ別ニ蒙古ノ方面ニ自國ノ利益ヲ関カントシタリ、外蒙古
ノ庫倫ニハ蒙古人ノ信仰スル喇嘛教ノ本尊ノ活佛住シ居タリ、既ニ腐敗
シタル喇嘛教ニ迷ハサレテ広ク滅ビツツアル蒙古人ノ上ニ絶大ノ威カト
信用ヲ有スル活佛カ露ノ後援ヲ頼ミニシテ支那ノ革命後向モノク独立ヲ
宣言シタリ、支那ニハ清帝ガ遜位シテ革命政策起リ、ソレニ伴ヒテ前後
ノ問題起リ、為ニ放任シ居タル内、露ト活佛トノ關係ク感ニナリ民國內

六七

年露蒙協約成リ迄佛ハ全ク露ノ手先キトナリテ支那ニ反抗スルニ至リ、此ノ外蒙古ノ動搖ハ内蒙古ニ及ビテ其ノ中ニ民国ニ年トナリテ、宋教仁暗殺ノ事件起リ民国内部ニ憂フベキ動亂起レリ、依テ政策トシテ政府ハ亟カニ蒙古問題ヲ、解決スベキ状態ニ至リ、固ルニ承諾ヲ得テ露ニ提議シタルモ露ニ拒絶サレ、露國ヨリ自由行動ヲ取ルトテ及対ニ脅カサレタリ、其ノ談合ノ向ニ第二革命カ起リ、ソレハ蒙外ニ早ク静マリタレバ、其ノ前後及分ニ付キ相当ノ及分ヲセサルヲ得ナリキ、依テ政府ハ一大議歩ヲ露ニ謀ヘテ漸ク露支條約カ成立シタリ、時ニ民國二年十一月ナリキ、之レハ外蒙古ハ自立タルト、露支兩國同様ニ軍隊ヲ留メス、移民ヲ送ラズ、又政治ニ干渉セズト約シテ革命ニ清國ハ外蒙古ニ宗主権ヲ有スト云フ名義ノミヲ存スルコトニテ、斯ノ如ク露支ノ向ニ交渉起リテ結末付キタレバ自治ヲ與ヘラレタル外蒙古ヲ加ヘテ三國ノ關係ヲ、猶不明カニ決定スレ會議ノ必要起レリ、ソレガ民國三年ニ恰克()ト云フ處ニ開カレタルモ中途ニシテ行儀ミ居タルガ、始メテ()ノ條約トナリテ懸マリタリ、之レニ依リテ外蒙古ハ民國ノ宗主権ノ下ニ自治ヲ

許サレ領土ト政務ニ内スル條約ヲ外國ノ諸國ト結ブトハ出来サレトモ、商工業等ニ関スルモノハ、自由ニ外國ト結ビ得レトナレリ、猶ホ露支支外蒙古ヨリ代表者ヲ送ラセテ加ヘテ從不露蒙ノ向ニ結バレクル條約ノ條約ハ有知ト云フナレリ、

蒙古問題ハ右ノ如ク一段落ヲ告ゲシガ、ソレト全ク切リ落シテ別ニ考ヘラレザル西藏問題カ次ニ充分ノ解決ヲ結バズニテ終レリ、西藏ハ英國ノ後援ニテ獨立ヲ宣言シ、從テ英支ノ交渉カ起テ未タルモ、露國ニ此ノ制度ニ附テハ深キ關係アリニテ、此ノ問題ク純キテ英露間ノ交渉ヲ惹起スルコトナリ結局英藏露支四國ノ關係カ復雜ニ錯綜シ来レリ、其ノ錯綜ヲ説明スルカタメニハ西藏ノ獨立問題カ起リシニ十年前以前、民國元年ヨリ凡ソ二十年前ニ逆ホリテ右四國ノ關係ヲ觀ル必要アリ、西藏ノ酋長トシテ、宗教藏ノ本尊トシテ強大ナル勢力ヲ振ヘルモノハ、達賴喇嘛 Dalai 彼ハ都ノ拉薩ニ住セリ、彼ノ統括スル喇嘛教ハ西藏ヲ根柢トシテ尚ホ広ク支那省邊州蒙古方面ニ広マリテ居リ、殊ニ蒙古人ハ怨心ナル信者ナリ、西比利亞ノバイカレ湖ノ東方ニ住ム *Buryat* 蒙古人モ、

ロニアノ国籍ニ属シテハ居レトモ矢張り喇嘛教信者ナリキ、ロニアハ此ノ *Buryat* 人ヲ懐柔シテ利用シテ遠嶺喇嘛ニ接近セント考ヘタリ、
Balai ト親ムイハ即チ露国ノ勢力ヲ蒙古ニ広メ且ツ西藏ヲ通シテ、
 英領印度ヲ脅カスニ就テ有利ナル手段トナルカ故ナリ、依テ *Buryat* 人、
Barjigty (ドルゼエグ) 者カロニアノ先キトナリテ、之レガ新
 次 *Balai* ニ接近セリ、之レ明若ニ十七年頃ノ事ナリキ、之レ以テ
 西藏問題復雜ニナリ来レリ、只国々ノ方ヨリ来メテ西藏ニ接近シタルノ
 ミナラズ、西藏ノ方ニ於テモ之レヲ受入レル下心アリキ、此レヨリ以前
 ニ印度ノ北境ニ *Sikhim* 国アリ、北国ノ事ニ就キテ西藏ト英トノ
 間ニ争生ジ其ノ際天那(清国)政府ハ *Sikhim* ヲ英ノ保護トスル
 及ビ將來印度、西藏間ノ貿易ノ促進ヲ助長スルコト等ニ同意シテソレニ付
 キテノ条約ガ結バレタルコトアリ、此ノ事件ニ就キテ *Balai* ハ甚ダ
 清国ヲ頼リナク思ヘリ、寧ロ今後ハ露国ノ保護ヲ仰ギタルガ得策ナリ
 ト考ヘタリ、ソコニ露西軍ノ方ヨリモ接近ヲ求メテ来リシ故ニ露、藏親
 善ガ案外早ク進歩セリ、一方ニ於テ英ハ之ニ依リテ印藏間ノ貿易ニ際キ

注意ヲ私ヒ居タリシカ、露藏親善ノ取勢ガ次第ニ鞏固シ来ルヲ見テ、將
 来露国ニ対シテ印度ヲ防衛スル必要ヨリ政治上ノ意味ニ於テ深ク西藏ノ
 事情ニ注目セサルベカラザルニ至レリ、故ニ於テ明治廿四年ニ英國ヨリ
Balai ニ使ヲ送リテ親ヲ結ブ手段ヲ廻ラセシ所、ソレガ受附ケラレ
 ザルノミナラズ、皮肉ニモソレト同年ニ俄ノ *Barjigty* ガ *Balai*
 ノ使トナリテ露国ニ赴キテ保護ヲ求メル有様ナリキ、ノミナラズ運三
 五年ニハ 西藏ニ内スル露清天同保護条約 方密約トシテ成立セリ、之ハ露
 独ノ新聞紙上ニ洩レテ世ニ知ラレタルモノナリ、其ノ内容ハ露清ニ同ガ
 西藏ヲ保護シ西藏ノ軍事訓令ハ露国負担スルコト等ヲ約セルモノナリ、
 北方ニ於テ西藏ニ対スル英ノ神経ハ益々過敏トナラサルヲ得サル状態ト
 ナリテ寧ロ或ル打撃ヲ西藏ニ与フル必要アルヲ認メルニ至レリ、當時ノ
 印度大使ノ *Casson* ハ是非西藏ヲ英ノ勢力ニ従ハシメザルベカラズ
 ト決心シテ其ノ目的ヲ以テ交渉ヲ開クコトナレリ、ソレガ眞面目ニ受入
 レラレザリシタメニ *Casson* ハ兵カヲ用ニル覚悟ヲ定メタリキ、當
 時ノ英國ハ露国ニ対抗スルタメニ凡ニ手手段ヲ講ズル必要ニ迫マラレタ

日本ヲ助ケテ露西亞ト戦ハシメルト云フモ英國ニトリテハ有利ナル
一手後ナリキ、實際日本ト英國ノ利害カ一致シタル所ニ彼ノ日露戦争
レリ、其ノ戦、最中若三十七年八月ヲ以テ *Young's handbook*
大佐ノ卒ユル英國遠征隊カ平年以上ノ困難ヲ忍ビテ印度ヨリ拉薩ニ侵入
シテ同年九月ヲ以テ英藏協約ヲ締結セリ、ソレハ西藏ニ對スル支那ノ宗
主權ヲ認ムルガ然シ今後西藏ト印度ノ間ニハ自由ノ貿易ヲ開キ、西藏ハ
英國ノ承諾ナクシテ、決シテ或外國ニ土地ヲ讓ラサルヲ約セルモノニ
テ尚本西藏ヨリ償金ヲ支拂フニナレリ、但シ *Delais* ハ此ノ時既
ニ脱走シテ居リテ彼ハ當時外蒙古ノ庫倫ニ向ヒテ走リソウアリキ、然レ
ニ西藏ハ勿論支那ノ居地ナルヲ以テ支那トシテハ英國ガ據ママニ武力干
渉スルヲ黙認スルヲ得ズ、依リテ清國ヨリ特使ヲ印度政府ニ送りテ
交渉ヲ開キ我が明治三十九年四月ヲ以テ北京ニ於テ「西藏ニ関スル英支条
約」締結セラル、之レニ依テ西藏ニ對スル支那ノ宗主權カ確立ナシ、西藏
ニ於テ英國ノタメニ二三ノ貿易地ヲ開放シ英國ハ西藏ノ鉄道電信ニ付テ
或ル特權ヲ得ルコトニナリ償金ハ之レハ清國ガ西藏ニ代リテ支拂フニ

ナレリ

此ノ条約ハ英國トシテハ温和ナル方針ヲ取リシモノナルガ英本國ノ
内閣カ代テヨリ西藏方針カ一変セル爲ナリ、又英國カ當時親露政策ヲ取
ル様ニナツテ従来ノ英露ノ反目カ大ニ和ラゲラレタル結果ナリ、其ノ英
露ノ親和カ益々熟シテ遂ニ明治四十二年（八月、九月）夏ニ有名ナル東洋
一國スル英露協約カ出来テ今後英露ハ共ニ西藏ノ領土ノ保全ニ同意シテ
政治上ノ干渉ヲ加ヘザルヲ約束セリ

西藏向題カ石ノ如錯雜ヲ極テ居ル間ニ、先キニ拉薩ヲ出發シタル *Delais*
Lai ハ何ヲナシツツアリシカト云フニ付キテ物語アリ、

彼ハ *Young's handbook* ノ軍隊ヲ避ケテ一旦蒙古ニ逃レタルモ、其
ノ目的ハ更ニ遠ク露西亞ニ赴ク爲ナリト云ハレ居レリ、然ルニ途中ヨ
リ支那政府ノ爲ニ引戻サレテ一旦北京ニ立チ歸リソレヨリ更ニ拉薩ニ歸
リタリ、拉薩ニ歸リシハ實ニ明治四十二年八月十リシヲ以テ結局五年間
拉薩ヲ商レテ乘取セルナリ、彼ガ北京ニ滞在セル間ニ、我日本ヲ訪問セ
ントシタル説アリ、ソレカ中止サレテ更ニ特使ヲ送ラントセル説アリキ、

其ノ他西藏親善ヲ助ク可キ種々ノ手段ガ廻ラサレタリト云フ説モアリ、
又其ノ動機ハ或日本ノ有志者カ直接 Dalai 二説キ進メタル結果ナリ
トモ云フ説アリ、如何ナル目的ニテ日藏親善カ計画サレタルカト云フ種
々ノ懐側カ許サルハキ筈ナリ、中止サレタルハ日本ガ英國ニ遠慮セルタ
メナリ、

七四

戦後日、英、露ハ親睦ニナリ、戦後日本ハ滿蒙ニ勢力ヲ振リ清国政府
ハ之レカ爲ニ大陸ヲ没サルルニハ非スマト云フ疑アリキ、副島大将、大
谷光瑞五年間ノ乗取ヲ概トシテ日本ノ意ヲ告ケントセリ、

右ノ英露協商ニ依リテ兩國共ニ西藏ノ一ニハ此ノ後干渉セザルコトニ
ナレリ、即チ西藏ノ制度ヲ支那ノ各省ト同様ノ組織ニ改メント計画シタ
リ、其ノ計画ヲ進行セシムルタメニ、駐藏辦事大臣ト云フモノヲ任命シ
テ、例ハ強圧ヲ加ヘテモ、最モヨク目的ヲ達セントスル程ノ熱心ヲ持テ
居タリ、從テ軍隊ヲ西藏ニ送ル必要ヲ認メテ、現ニ其ノ一部ハ明治四十
二年二月ヲ以テ西藏ノ首府世蓋ニ渡ヘシタリ、遂ニ其ノ強圧ヲ避ケテ

一度印度ノ北境ニ脱走シタリ、即チ *Swajiling* 二逃レタリ、暫ク
其ノ地ニ滞在ニ居タルモ彼ハ印度大使ノ *Minto* 二會見シテ何事ヲカ打
合セヨナシタリ、一方ニハ露ニモ特使ヲ送り更ニ北京ノ外交團ニモ訴ヘ
テ、此ノ清國ノ急激ナル干渉ヲ免レル運動ヲ試ミタリ、英國トシテハ西
藏ノ動搖ハ直チニ印度ノ北境地等ニ悪影響ヲ及ボスアルヲ見テ干渉ヲ
試ミタキ意ハアレ氏夫ノ英露協商ガ存在シテイル以上ハ如何シテモ積極
的行動ハ是ニ控マ可キナリ、然ルニ此ノ後向モナク支那ニ革命起リ其ノ
際ニ露買外蒙古ニ干渉シタルヲ見テ露國ト妥協ノ上新タニ西藏ニ対ス
ル勢力擴張ヲ試ミレフトトナレリ、西藏ハ民國元年四月ノ頃ヨリ氏國ニ
対シテ抗運動ヲ始メ八月ニハ遂ニ獨立ヲ宣言シタリ、其ノ前後ニ且テ民
國ト西藏トノ間ニハ戦ガ交ヘラレ英國ハ西藏ノタメニ頻リニ民國ニ警告
ヲ與ヘ居タルタメニ、自然民國ト英國トノ間ニ憎リ生ゼリ、其ノ間ニ遂
ニ彼ノ外蒙古ノ活佛ト連絡ヲトリテ遂ニ民國二年ノ始メニ至リテ藏藏
協約成立セリ、之レハ互ニ獨立ヲ認メ互ニ相助ケ互ニ交通ヲ自由ニスレ
タメナリト云ハレ居レリ、此ノ藏藏ノ二國カ極手スルトスレバ、蒙古ノ

七五

保護有タル露國ト西藏ノ後援者タル英國トノ間ニ縁分妥協起ルハ当分
リ。果シテ民國元年亦頃駐英民國公使ヨリ北京ニ送レル報告ガ支那ノ新
南紙上ニ掲ゲラレタリ、ソレハ、藏藏ニ因スル英露協約下云フモノナリ、
即ケ英露カ夫々西藏ト外蒙西トヲ自己ノ勢力地トスルコトヲ約シタルモ
ノナリ、常ニ英國ノ外交方針ヲ暗示スルト云ハレル London Times
紙ガ西藏ニ對スル強固ナル意見ヲ公ニシテ居ルヲ見レバ當時英國ノ方針
ハ民國ノ主權ヲ認シテモ西藏ヲ自己ノ勢力地トスル決心ヲ取り居タルモノ
ノ如ク見ラル、茲ニ於テ前ノ明治四十年ノ英露協約ヲ喪失スル必要起リ新
タニ西藏ニ因スル英露協約ヲ結ビ改ムルニ至レルモノト思ハル、此ノ協
約ノコトヲ固クテ民國政府ハ後援ナシ、之レニ就キテ英國ト交渉ヲ固ク
必要ヲ生ジ、依テ英支藏三國ノ會議ヲ印度ニ開クニ決セリ、如メハ *Delhi*
Meeting (大吉嶺)ニ開催スル事ナリシカ後ニ會場カ唇々喪失サレテ民
國二年十月ヨリ開会スルコトナレリ、然シ三國ノ意見最易ニ一致セズ
故ニ翌三年七月ニ至リ行キ悔ミトナリテ一度中止セサルヲ得ザル状態ト
ナレリ、其ノ時會々歐洲大戦起リタメニ英國ハ暫ク西藏問題ヲ放棄セザ

ルヲ得ザルコトナリ、從テ三國會談ハ不解決ノ終今日ニ到レリ、如斯
蒙古、西藏ノ同類ハ天那政府動乱ニ促サレテ右氣ヲ起シタルモノナルカ
夫那本部ニ於ケル外國ノ経済的活動モ亦此ノ政府ニヨリテ漸クニ緊張ヲ
ナシ末レリ、殊ニ鐵道ニ因スル權利ノ競争猛烈ニ起レリ、此ノ競争ハ日
露戦後ニ一時緩漫ニナレリ、又支那自ラモ利権恢復ト云フニ努力シタ
ル結果トシテ鐵道ニ於テハ日本ノ南滿線及ビ安奉線、露國ノ東清線、独
ノ山東線、佛ノ雲南線、英ノ九龍線ノミ外國ノ所有ナリキ、其ノ他ノ鐵
道ハ皆支那ノ手ニ歸シテ終ヘリ、只其中ニ或ル物ニツキテハ資本ヲ外
國ヨリ借用シタルモノアリ、然ルニ革命後ノ民國政府カ財政ノ困難ニ苦
シミ勢ヒ外國ノ借款ニ頼ミテ行カサルヲ得サルコトニナリタルヲ以テ、
外國ハソレヲ機會トシテ又ニ鐵道利権ノ競争ニ熱中スルニ至レリ、ソノ
鐵道利権ト云フハ、或レ外國カ、自分ノ所有物トシテ、支那ニ鐵道ヲ送ル
ニアラズニテ、或レ鐵道ノ資金ヲ民國ニ貸附スルカ、又ハ其ノ貸附ノ優
先權ヲ握ルニナリキ、然シ外國ヨリ云ハハ其ノ鐵道ヲ振振トシテ自己ノ
努力ヲ植付ケル利益アリ、民國政府ヨリ見レバ其ノ借入レタル鐵道資

金ノ貸分カラ財政ノタメニ融通スル便利アリタリ、此ノ鐵道ヲ布設スル
テハ確カニ支那ノ商工業ヲ發達サスベキ利益アル事ナルモ、政府ガ莫大
ナル資金ヲ外國ヨリ借り入レテ例ヘ實際鐵道ヲ敷設シタルモノトシテモ
其ノ鐵道ノ利益ト云フモノガ政府ニトリテ利益ナルカ否カト云フテハ疑
向ナリキ、政府ハ莫大ナル借款ヲ及還スルヲ能ハズシテ自愈其ノ鐵道カ
外國ノ為ニ利用サレルト云フ恐レアリタリ、外國テハ又其ノ結果ヲ予現
ニ作ラザラテ民間ニ資金ヲ借シ附ケル運動ヲ試ミ居タリ、爲ニ列國ハ各支
那ニ對スル投資團(銀行会社)ヲ設キテ主トシテ其ノ手ヲ通シテ經濟上
ノ活躍ヲ試ミタリ、其ノ団体ノ中ニテ最モ優勢ナリシハ露、佛、白聯合
ノモノナリ、次ニハ英、日、米、日等ナリキ、此ノ露、佛、白ノ
聯合投資團タル *Belgium Syndicate* カ民國元年九月ヲ以テ、
海濱鐵道借款ト云フモノヲ引キ受ケタリ、此ノ資金ハ二億五千萬フランニシテ
及ビテ、西ハ甘肅省ノ蘭州ヨリ起リ北支那ノ最モ繁華ナル地方ヲ貫キテ
東方ノ海岸ニ達スルモノナリ、終莫ハ其ノ海岸ナル海州ト云フ所カ或ハ
揚子江ノ北岸ニテ其ノ河口ニ近キ海門州デアルカト云フテガ充分ニ決定

シ居フサトキ、此ノ鐵道ハ將來尙ホ西ニ延長シテ遼カニ中興亞細亞ニ連
絡スル事ナリト思ハレテ居ルモノニシテ、確大ナル計畫ニ基ケルモノナ
リ、次テ翌民國二年八月ニ同ジ *Syndicate* ガ更ニ一ツ支那ノ西部ニ於ケ
ル同次鐵道借款ニ千五百萬法ヲ引キ受ケタリ、之ハ山西省ノ大同州所
ヨリ南ニ四川省ノ成都ニ連絡スルモノニシテ其間凡百六十哩ト計算サレ
居レリ、此ノ線ヲ速ク北ニ延長セハ蒙古ヲ横斷シテ西北利亞鐵道ニ連絡
シ得ルモノナリ、從テ之ハ露國ニトリテ利益アル計畫ノ如キ性、實
ヲ有ス、其ノ露ト常ニ相結ベル條目カ別ニ民國三年二月ヲ以テ南支那ニ
於テ鐵道借款ニ千四百萬法ヲ引キ受ケタリ、之レハ支那ノ海岸ニア
ル欽州ト云フ所ヨリ北ニ向ヒ成都ニ通ズルモノニシテ延長ハ七〇〇哩ト
云ハル、之ハ成都ニ於テ同次鐵道ニ聯絡スルモノナリ、即チ露佛カ聯合
シテ支那ノ西部ヲ南北ニ縱斷スル勢力帯ヲ作ラントスル計畫ニ基ケルモ
ノナリ、此ノ外露ハ一ツ北滿州ニ於テ東清線ト東部西北利亞ノ黑龍江
鐵道トヲ連絡スルタメノ鐵道ニ付テノ借款ヲ引キ受ケタリ、當時之レハ
五千萬ルビナリキ、此ノ線ハ本線ト支線トヲ合シテ五千分レ居タリ、

故一之ヲ普通北滿州ノ北滿五鉄道ト称セリ、

英國ハ右ノ如キ露佛ノ活動ヲ傍觀シテハ居ラザリキ、英國ハ從來抱ケル或ル大計画ヲ實現スルタメニ此ノ機會ヲ利用シテ、其ノ一歩ヲ進メント考ヘタリ、其ノ計画トハ東ニ揚子江地方ト英領印度トヲ結付ケル大鐵道ノ敷設ナリ、從來英國ハ此ノ揚子江地方ヲ以テ自己ノ勢力地ト見做シテ、或ル外國ノ侵入ヲ妨ゲルコトニ注意ヲ極ヒ居レリ、此ノ方面ニ於ケル我國ノ鐵道計画、如キモ常ニ英國ニ妨ケラレテ目的ヲ果サザリキ、其ノ揚子江方面ト印度ノ交通ヲ奇ルカタメ鐵道計画ノ一歩トシア民國三年ニ寧湘鐵道(八百万磅)ノ借款ヲ引受ケタリ、之ハ南京ヨリ西ニ向ヒテ湖南省ノ長沙ニ達スル凡ソ七百七十哩ノ線路ニシテ、之ハ尚木西ニ向ヒテ進ム計画ナリキ、而シテ此ノ線ヲ遠ク印度ニ結ビ付ケルタメニハ其ノ途中連絡トシテ支那ノ雲南省ト、英領バルマトヲ連絡スル緬漢鐵道ト云フモノモ同時ニ計画サレツツアリキ、然シ之ハ遂ニ借款ノ契約ハ成立セザリキ、此ノ計画ハ實ニ大規模ナルモノニシテ、能ク揚子江地方ヲ自己ノ勢力地トシテ、固持スル決心ヲ示セルモノナレカ、尚木此ノ江ノ南

北ニ於テ其ノ他ノ鐵道ニ關スル借款契約ヲモ能ビ居レリ、例ヘハ寧湘線ノ西ニ接シテ沙嶼線アリ、之レハ揚子江ノ中程ニアル沙市(對岸)ヨリ興義ニ達スルモノナリ、之レモ八百哩ノ延長ヲ有セリ、江北ノ浦信線ト云フ、凡ソ三百五十哩ノ一線ヲ引キ受ケタリ、之ハ南京ノ對岸ニアル浦口ヨリ西ニ向テ信陽ニ達スルモノニシテ經濟上極メテ有利ナルモノナリ、次ニ浦口ヨリ北天津ニ達スル津浦鐵道ト云フモノハ已ニ英佛ノ共同投資ニ依テ完成サレ居タリ、此ノ鐵道ノ北ノ半分ハ獨ガ資本ヲ担任シ、夫レカ濟南ノ所ニ於テ獨ノ所有セル山東鐵道ニ連絡セリ、独ハ山東省ノ經濟上ノ利益ヲ占有スルニ満足セズシテ更ニ西ニ黃河ノ平原ニ經濟的發展ヲ試ミル計画ヲ抱キ居タリ、其ノ計画ニ基キテ民國三年ニ日本鐵道ニ關スル借款契約ヲ結ビ、此ノ線ハ山東ヨリ西ニハ河ノ平原ニ走ルモノニシテ殊ニ其ノ北方ノ線ハ更ニ山西省ノ方面ニ延長サルル筈ナリキ、其ノ山東ニ於ケル獨ノ利益ヲ尚木西ニ擴張セントセシハ獨トシテハ必ズナルコトナリト思ハルレド、然シ獨ハ此ノ外ニ尚木南支那ニ於テモ必ズ其ノ利益ヲ爭ハントスル計画ヲ立テタリ、然シソレハ必ズ獨ノ利ヲ損ナルヲ

提出ニテ他ノ計画ヲ排斥シ、同地方ニ於テ自國ノ資本ニ依テ或ル鐵道ノ借款ヲ取り結ビシガ鐵道鐵道ナリ、

列國ガ此ノ鐵道政策ニ熱中シテ各自將來ノ努力モヲ振振スルニ苦心シツツアリシ間ニ其ノ競争ニ拘ハラザリシハ米國ナリ、只米國ハ淮河(揚子江ノ北)ノ治水工事ニ付キテノニ千万弗ノ借款ニ志ジ、又陝西省ノ延長縣ノ油田採掘ニ付テ米英合辦ノ事業ヲ起ス契約ヲ結ベリ、之レハ英ニ民間ニ年ノ一ナリ、然シ之ハ兩方共利權ヲ保留セ、ルニ止マリテ實際ノ成績ヲ求メタルニテラズ、然レニ滿州ニ對シテハ矢張り鐵道ノ一ニキラ出シタリ、又滿州ノ實業ヲ振盪サスルタメニ國際的借款ヲ開辦スル契約ヲナシタリ、米國ハ曾テ明治四十二年ニ滿州ノ鐵道ヲ中絶セシメントスル運動ヲ起シテ日露ノ反對ヲ受ケテ成功セザリキ、然テ南滿州ノ錦州ヨリ北滿州ノ愛理ニ至ル所謂錦愛鐵道ヲ計畫シテ、之レモ露西亞ニ反對ヲ受ケテ失敗ニ終レリ、然シ米國ノ滿州ニ對スル貿易ノ發展ニハ深キ注意ヲ払ヒテ、ソレガタメテハ自然日露ノ勢力ヲ抑ヘサルベカラズト考ヘテ、實ハ其ノ目的ヲ達ジヘテ國際借款ヲ開辦スルニ至レリ、即チ列國共同シ

テ滿州ニ投資スル計畫ヲ立テタルモノナリトス、サレド勢ヒ日露ノ利益ト衝突セサルヲ得ザリキ、此ノ共同借款ノ成立ニツキテ大イニ盡カセルハ奉天ニ居タル米國領事 *Steingate* ナリ、彼ハ當時ノ清國政府ノ財政ノ困難ニ苦シミテ、是非外國借款ニ頼ラサルヤカラサル境況ニ陥レルヲ見又清國ノ幣制カ余リ複雑ニシテ外國トノ通商ニ不便デアリ、是非改良ヲ加ヘサルヘカラサル状態ナリシヲ認メテ此ノ際一大借款ニ志スル運動ヲ試ミテ其ノ結果一先ヅ米英ノ間カケニ假契約ヲ結ベリ、然ル後日露ハ其ノ契約ヲ基礎ニシテ更ニ英仏德ノ資本團ニ共同スルヲ試キ勸メタリ結局明治四十四年四月ヲ以テ、米英德仏ノ四國ノ財團カ共同シテ清國ノ一徳兩ニ志スル契約成立セリ、此ノ借款ハ幣制改革ノタメト云フ名義ナリシカ其ノ一部分ハ滿州ニ於ケル企業資金トシテ用ヒラルル若ナリキ、蓋シ米國カ滿州ニ於ケル日本ノ勢力ヲ抑ヘルタメニ英仏德ノ資本團ヲ誘ヒ込ミテ滿州ニ於ケル經濟發展ヲ試ミントセンケタメナリ、茲ニ於テ日露ハ勿論之レヲ悉シテ看過スルヲ得ズ、右ノ四國並ニ清國ニ對シテ抗議ヲ提出シタルカタメニ、此ノ向題カ一時非常ニ混亂セリ、其ノ時折シモ

支那ノ革命起リシタメニ此ノ問題モ一時、中絶ノ止ムナキニ至レリ、
 革命ノ結果トシテ民国政府カ成立シテヨリ此ノ借款問題再興サレタリ、
 然シ日露兩國ノ利益ヲ無視スルノハ結局不得策ナリト認メラレタリ、新
 二其ノ兩國ヲ加入セシムルトニセリ、依テ大國借款用成立セリ、其ノ代表
 者ガ民國元年ノ五月ヲ以テ倫敦ニ會議ヲ開キ次第ニ巴里ニ移サル、其ノ席
 上ニ於テ日露ノ滿蒙ニ於ケル特殊利益ヲ如何ニ取り扱フベキカノ問題ガ
 喧シク論討サレシコノ結局日露ノ利益ヲ傷ツケナキ様ニスルヲ解ヲ得テ、
 大國間相互ノ基礎條約カ成立セリ、然レ後民國ニ支那ヲ違メタリ、然ル
 ニ民國ハ其ノ借款ノ用途ニ就キテ大國間カ干渉スルコトニ不厭ナリキ、一
 時此ノ大國ニ干渉ナキ他ノ資本家トニシテ借款ヲ契約セルコトアリテ大國
 トノ契約ハ容易ニ成立セザリキ、其ノ上ニ民國二年(一九一三)三月、
Wilson ガ米國ノ大統領トナリテ外交政策ヲ改メタル結果トシテ米國
 ノ資本國、此ノ際大國間ヨリ脱退セザルベカラザルコトナレリ、以テ
Wilson ノ意見ニヨレハ此ノ大國ノ借款ノ条件トシテ其ノ借款ノ用途ヲ監
 督スルト云フノハ支那ノ行政權ノ独立ニ干渉スルモノナリ、斯ノ如キ、

財政上ノ監督ハ遂ニハ政府上ノ干渉ニ違ミ行クヤモ計ラレズ、ソレハ米
 國ノ伝統的対支政策ニ及スルモノナリ、夫レ故ニ我米國ノ資本國カ此ノ
 大國ニ加入スルコトハ自分トシテハ認可スルヲ許サズ、支那ノ富源ヲ開
 發シ、支那國民ノ自由ナル發展ヲ助ケルト云フコトニ就キテハ元ヨリ賛成
 スル所ナルモ只我米國ハ同情ヲモトトシテ相互ノ便宜ヲ計ルタメニ支那
 ノ門戸開放ノ主義ヲ守ラザルバクアラズト云フ主義ナリ、

此ノ宣言ハ米國ノ支那ニ對スル伝統的政策ニシテ正統ト友情ヲ以テ、
 支那ニ親シミ列國カ共同シテ支那ノ経済的開發ヲ助ケントスルノガ即チ
 其ノ政策ナリ、夫レハ必ズシモ忠實ニ実行サレザリシモノナルガ殊ニ我
 日本ニ對シテ深ク疑ヒヲ抱キ、我日本ノ已ムヲ得サル大體發展ヲ妨ゲン
 トシテ時々支那問題ニ向テ突飛ナル干渉ヲ試ミルコトハアルモ、然シ米
 國カ、或ル莫遠其ノ伝統的政策ヲ實キテ未ダルコトハ公平ニ承認セザルベ
 カラズ、今ヤ彼ハ其ノ政策ヲ主張シテ他ノ五國ノ聯合ヲ絶タント決心セ
 リ、依テ米國資本國ハ不得已大國間ヨリ退クコトナリテ、或ル三國間ガ
 改メテ民間ニ交渉ヲ進メタリ、民國二年、四月下旬ヨリ彼ノ二千五百

万磅ノ大借款契約成立セリ、其ノ借款ノ用途ハ極多細目ニ規定サレアリ
テ支那全国ノ塩稅收入ヲ以テ其ノ担保トスルコトナリ、其ノ上ニ其ノ收
稅法ノ改良ノタメニ鹽務所ヲ置キ外國人ガ之レヲ管理スルコトナレリ、
此ノ大借款ガ案外早く成立シタルハ當時袁世凱カ其ノ統一政策殊ニ反對
炭ヲ壓迫スルカクメニ借款ノ必要ヲ感シテ居タルウタメナリ、其ノ結果
トシテ塩稅ガ外國管理ノ下ニ置カレタリ

比ノ借款ニ付キテ尙一ツ注目スベキコトアリ、即チ此ノ借款ハ民国ノ政
治上ノ目的ノ爲ニ使用スベキモノデアルカ、又經濟上ノタメニ使用スル
モノナルカ制限ニ付テ一時喧マシキ議論アリシカ結局両方面ニ使用シテ
可ナリト云フコトニ決定シテ其ノ意味ニ於テ借款成立セリ、然ルニ民国ノ
經濟上必要ナル借款ヲ一々右ノ五國固ク共同シテ取扱フコトナレバ相互
ノ間ニ意見ノ一致セサル場合多カルベシ、其ノ相談ノ間ニ他ノ資本家カ
自由ニ活動スル恐レアリ、夫故ニ五國固ハ民国ノ政治借款ガニ交スル
コトトシテ、他ノ經濟借款ハ各固ノ自由ニ任セタル方可ナリト云フ意見
ニナレリ、之ハ英國ノ主張ナリシモ他ノ四國皆之レニ賛成セリ、改メテ

八六

尙シ民国二年九月ヲ以テ其ノ形ヲ發表セリ、之レヲ以テ經濟借款ハ今後
各固ノ隨意ニ任セルコトナレルカ故ニ、各固ガ主トシテ鐵道ニ関スル利
權ニ付キテ競争ニキテ始メルコトナレリ、畢竟民国ノ經濟借款ニ付
キテハ右ノ五國ノ聯合ハ全ク無關係ナリト云フコトナレリ、

如斯經濟借款ハ各固ノ自由ニ任セテ云フコトナリシガ、而モ米固ハ
五國ノ資本田ヲ助ケテ支那ニ投資サセル方針ヲトサリキ、茲ニ於テ米
固ノ資本家ノ中ニハ政府ノ後援ヲ俟タズニテ個人的ニ投資ヲ試ミタルモ
ノアリ、或ハ鐵道ニ對シ或ハ大運河ノ改良工事ニ對シテ夫々借款ニ志ジ
タルモノモアリ、然シ強テ他ノ列國ト經濟上ノ利権ヲ争ハントス態度ヲ
示ワザリキ、勿論米固ト並ニ支那ニ於ケル經濟上ノ利益ヲ云ムルト云フ
目的ヲ有シテハ居タルモ政府カ自固ノ資本田ヲ助ケテ外國ト利益競争ヲ
試ミルト云フコトハカヲ入レサリキ、一國ノ政府カ自固ノ資本家ノ對外
投資ニ對シテ援助ヲ與ヘズト云フコトハ必ズ之モ正当ナル位置トハ云ハレ
ズ、之ハ往々失敗ヲ招クコトアリ、現ニ米固ト並ニソレニ付キ苦ニキ經驗
ヲ嘗メタリ、ソレニモ不均米固ノ實業家ガ一々政府ニ依頼スルコトナク

八七

道ニテ支那ノ実業家ト直接ニ相親ミ、相携ヘル方針ヲ取リテ進ミツツアルノハ今後ノ米支通商ノ發展ニ對シテ有利ナル結果ヲ生ムナラント云フ
 一ハ明白ナリ、如斯^{米國}何人の自由發展主義ヲ取リテ進ミツツアル間ニ他ノ方面ニ於テ他ノ列國ニ優レル頭着ナル支行動ヲ企テ居レリ、ソレハ支那ニ對スル文化政策ナリ、例ハハキリスト教ノ傳導ニ於テモ、教育ノ普及ニ於テモ病院ノ設備ニ於テモ凡テ社会生活ノ改善ヲ目的トスル文化事業ニ於テ米國ハ他ノ列國ニ確カニ優レリ、之等ノ文化的施設ハ殆ト皆宜教師ノ経営セル所ニシテ畢竟傳道ノ附帶事業ナリキ、其ノ事業ノ全部カ皆成績ヲ挙げ居ルトハ云ハレザレバ、斯ノ如キ事業ニカラ注グ^ハ確カニ米支親善ヲ進ムルニトリテ有クナル一因トナル筈ナリ、

其ノ米國カ支那ニ對スル友情ヲ吟ビ文化事業ニ於テ支那ヲ助クマシト
 林ニ居リテラ英ノ西藏ニ對スル計畫、又ハ露ノ蒙古ニ對スル野心ニ付テハ別ニ察ク、^ハ咄^ハズシテ又我日本ノ滿蒙ニ於ケル勢力發展ニ付キテハ疑ノ眼ヲ見張リテ居ルト云フハ怪ムベキ所ナリ、米國ハ多ク太平洋ノ彼方ニアリテ又其ノ國自身經濟上困難ニ際シテ妨ゲナキニ反シテ我カ國カ

土地狭ク、人多ク從テ經濟上ノ困難ヲ感ジ居ルモノナレハ近キ大陸殊ニ滿蒙ニ向テ特殊ノ關係ヲ持ツニ至ルハ不得已コトナリ、米國人カソレヲ以テ侵略主義ト解釈スルノハ米國分^{活動}元來何人の自由主義ニ基キ居ルニ對シテ、我カ日本ノ發展ヲ常ニ國家的活動トシテ現レテ居ルト云フ^一ガ、米國人ノ眼ニ怪シク映スルカタメナリ、從來列國カ支那ニ於テ租借地ヲ取リ、又利益範圍ヲ定メテ相互ニ夫レヲ承認シ合ヒテ未ダ爾故特ニ滿蒙ニ於ケル日本ノ利益範圍ノミヲ非難スルノハ甚タ不当トスル所ナリ、ノミナラズ、我國ハ此ノ經濟上ノ必要ニ促サレテ滿蒙ニ向テ經濟上ノ發展ヲ試ミニトスルモノニシテ、其ノ地方ニ於ケル他ノ外國ノ利益ヲ排斥スルニアラス、然ルニ特ニ我國ニノミ、排他ヲ受クル正当ナル理由ヲ認ムル能ハザルヲ苦シムナリ、*Reviews, Miltard. (Menace of Japan)*

Blond (日本同情者) "Recent Events" 第二十二章
 從テ日本モ從來承認サレ未レル滿蒙ノ利益範圍ノ中ニ於テ、新シク鐵道利権ヲ要求シテ、民國二年十月所謂滿蒙五鐵道ノ、借款取ラ得タリ、
 一、四平街——洮南——至ルニ百三十哩、此ノ借款契約ハ大正四年ノ末ニ成

ニ至ル

- 二、自長春至冰南、一八〇哩
- 三、自冰南至熱河、四七〇哩
- 四、自南原至海龍、一三〇哩
- 五、自海龍至吉林、一〇〇哩

以上ノ五本ナリ。此中 第一ヲ除ク外ハ未ダ借款契約ハ成立ニ居ラズ、殊ニ其ノ中ニハ民間カ將來ソレヲ布設セントスル際ニハ日本カ其ノ借款ニ悉スル一種ノ優先權ヲ得タルニ止マル不定ノ性質ノモノアリ、然レ此ノ五線ニ付キテ借款ヲ得タト云フハ、即チ日本カ滿蒙ニ於テ特種ノ地位ヲ占テ居ルト云フヲ証明スルモノニシテ、列國モ本之ヲ怪マカリキ然ルニ我國カ更ニ其ノ利益ヲ確保セントシテ併セテ支那ニ於ケル列國ノ競争ヲ和ゲタメニ計畫シタル所ノ彼ノ日支交渉ニ於テ二十一條以外ノ變ヲ招ク様ニナレルハ頗ル遺憾ナルヲナリ、

日支交渉

大正四年(一九一五)ノ日支交渉カ起ニ当テ袁氏ヲ大統領トスル民國政府ハ其ノ交渉ノ内容ヲ自國ノ新聞ニ洩ラシテ日本ノ要示ヲ拒絕スレバ目ハ、七ア、拒絕セザルトモ國ハ亡ブ、聲口拒絕シテセバ可シト云フ如ク何ニモ非痛ラシキ議論ヲ新ニ掲ケシメタリ、而シテ感一擲日ノ氣焰ヲ擧タリ、又上列ノ *North China Daily News* ハ若シ歐洲列國ガ日本ノ行為ヲ黙認スレバ、支那ノ内訌開放ノ利益ハ全ク危殆ニ歸スニ相違ナシ、列國ハ此ノ際、何レニセヨ賞讃セズンバ日本ノ勢力ガ支那ヲ压倒シ終ニ其レヲ取除クハ極メテ困難ナルニ至ルベシト云フ激論ヲ舉セリ、袁氏ハ自己ノ位置ヲ固メルタメニ、殊更ニ日支交渉ヲ利用シテ日本ノ野心ヲ誇張セル傾キアレバ、ソレハ別トシテ民間ノ輿論ハ日本ニ對シテ懸慮ヲ抱キテ居タルハ明白ナリ、歐米人ノ觀察モ亦我國ニ對シテ不利益ナリキ、從テ我國ノ外交政策カ急ニ變テ以テ昨日セラルルニ至レリ、殊ニ米國ハ此ノ交渉カ全ク終結セザル中ニ日本ト民國トノ兩方ニ通知ヲ送リテ米國政府ハ支那ニ於ケル米國ノ條約上ノ權利、支那ノ政治ト領土トノ独立及ヒ支那ノ内訌開放主義ヲ侵害スルカ如キ日支間ノ條約

ハ全然承認セズト云フ意味ヲ述ベ、米ダレリ、其ノ後米目ハ我カ滿蒙ニ
対スル保護ニ付キテ絶ヘズ變ヲ概ミテ居タル故ニ我國トニアハ米國ノ該
解ヲ係ク必要ヲ認メ、其ノ結果トシテ、僅カノ時日ヲ經テ大正六年十一
月ヲ以テ所謂「石井 Lansing 條約」、成立セリ、其ハ日米兩國ハ領
土ノ相接近スル國家ノ間ニハ特殊ノ關係ノ生スベキヲ承認シ、米國ハ
日本ガ支那ニ於テ特殊ノ利益ヲ有スルコトハ承認シ、又日本ノ領土ニ接
壤シテ居ル地方ニ於テハ其ノ關係ヲ承認スト云フ意味ニ於テ、日米ハ一
致シタルナリ、此ノ條約ノ實際ノ効力ハ別トシテ、日本ハ外國殊ニ米國
ニ對シテ其ノ誤解ヲ除クコトニ苦心セザラザ得ザリキ、米國ノ排日論者
ノ露骨ナル激論ニ對シテ一々ソレヲ辯白スルニ違ナキ程排日論發表セリ、
此ノ二一ヶ條カ果シテ日本ノ侵畧主義ノ要素ヲ含ミテ居ルモノナルヤ
又日本カ米國ニ對シテ不當ナル威圧ヲ加ヘタルモノナリト云フ觀念ガア
ルヤ否ヤヲ見ルニ先ツ日支交渉ノ要領ヲ捕フル必要アリ、此ノ交渉ヲ導
キタルモノハ我カ膠州灣ノ占領ナリ、大正三年八月ヲ以テ日本カ德國ニ
宣戰シ其ノ十一月ヲ以テ膠州灣ヲ占領ス、日支交渉ハ翌四年ノ正月ヨリ

七二

地マリテ、五月七日ヲ以テ日本ヨリ最後通牒ヲ送り結局ニ十五日ヲ以テ
調印ナル、日本ヨリ提出セルニ十一ヶ條ハ次ノ五項ニ分ル、
一、山東省ニ與スルモノ
二、南滿支蒙古ニ與スルモノ
三、漢冶萍公司ニ與スルモノ
四、支那領土保全ノ目的ニ與スルモノ
五、希望條件
民國ニ於ケル日本人顧問採用、支那ニ於ケル土地所有權、支那警察制
度革新、日本ヨリ支那ヘ對スル兵艦供給ナリ、南支那ニ於ケル日本ノ鐵
道布設權、福建省ノ前線ニツキテ、日本ヨリ西カヲ異ヘルタノ日本ノ布
設權ト云フ、七ヶ條ヲ含メリ、先ツ山東省ニ與スルモノヨリ考フルニ日
本カ山東ニ於ケル他國ノ取得權ヲ奪ク結果ニシテ、倭日並向ニ於テ其ノ
優分ヲ決定シ、大レテ米國ガ承認スル一ナリシハ穩當ナル順序ナリ、
且ソ改州大戦ガ終リタル後ニ於テ膠州灣ヲ貿易港トシテ開放スルコト、
日本ノ卑高居留地ヲ設クルコト、列國ノタメニ大同居留地ヲ別ニ作ル

七三

等ノ条件ノ下ニ、日本ヨリ其ノ土地ヲ民国ニ送還スト云フ公ノ約束結ハ
ル、又山東ヲ外國ニ割譲セスト云フ約束ヲ要スル之レ、真ニ 民国
ノタメニ山東ノ保全ヲ計リシ位置ナリ、專為民苗地ヲ設クルニシテ、
海ガ開放ナルル故ニ、決シテ日本ガ海ニ開スル利益ヲ独占スルト云フニ
ハアラズ、日本ガ海ノ勢力ヲ山東ヨリ駆逐シテ、東洋ノ安全ノタメニ盡シ
タル關係上此ノ山東ニ於テニ、三特別ノ利益ヲ要求シタルニ過ギザルヲ
優惠主義ト云ハバ、從テ列國ガ支那ニ對シテ幾多ノ利ヲ要求シザルモ
ノ又優惠主義ナリ、次ニ滿蒙ノ地ニ肉シテハ滿蒙ハ連ノ租借期限及、前
滿ノ鐵道安奉鐵道ノ租借、期限ヲ更ニ凡九年間延長スルコト、南滿ニ於
ケル日本人ノ土地商租(三十一年ヲ一期トシ土地ヲ借入レ、其ノ権利ヲ
更ニ期限ノ末ニ復ニ繼續シテ得ル権利ナリ)居住權、鈔山採礦權ヲ認メ
ルコト、南滿ニ於ケル鐵道存続ニ付テハ日本ノ同意ヲ求ムヘキコト、東
部内蒙古ニ於ケル農業及其ノ附屬工業ノ日支合辦ヲ許スコト、東蒙古ノ
鐵道存続ニ付テ予メ日本ト協議スルコト、從テ日支合辦ナリニ吉林長春
間ノ鐵道ノ經營法ノ改良ノ契約ヲ結メラレタリ、之レ等ハ滿蒙ニ於ケル

日本ノ特殊利益ヲ強メタルモノトシテ解散ナル、從テ之レ等日本ノ滿蒙
優惠ヲ證明シタルモノト云フ疑ヒヲ拂ナラレ居レリ、尤未だ日本ニ於ケ
ル特殊利益ハ日露戰役ノ利益ナリ、露西亞ハ滿州ヨリ進ミテ其ノ優惠ノ
キヲ朝鮮ニ進バシタルコトハ我國ノ存立ヲ脅カシタルタメ日本ノ自營上
必死ノ努力ヲナシテ優惠ヲ被リタルナリ、讓步ヲ忍ビ各城ニ手ヲ盡シテ
而モ尚不脅カサレ止ムニ止マレメ滿ニ國家ノ存亡ヲカケテ送大敵ニ當リ
タルコトヲ余義ナクサレタルナリ、將不南滿ニ於テ自ビアル一國ノ優惠約
執クカ蕪ルコトヲ防スル事ハ當時トシテ我國ノ存立ヲ保ツタメニ緊要ナ
ル条件ナリト考ヘタリ、如斯設備ヲ施スタメニ日本ヲ戰勝ノ機會ニ求ジ
テ或ル特殊ノ利益ヲ得ントシタルハ自營ノ必要ニ基テタルタメナリ、日
本トシテハ支那ガ自ラ滿州ノ實業開發ノタメニ行ハントスル總テノ事業
ニ對シテ妨害ヲ加ヘルノハ既ニ *Portsmouth* 條約ニテ明言シタルナリ、
然ルニ水田ヲ滿州鐵道中止ラ讓渡シタリ、英米他國ノ四國借款團ガ支那
政府ヲ強權トシテ滿州ノ經營問題ニ干渉シテ日本ノ利益ヲ削ラントナシ
タメタルコトハ我國トシテ之レヲ默認シ能ハガレ如ク露國モ本自國ヲ保

凡六
ソタメニ日本ト大同ニテ列國ニ核議シタリ、日本ク自營ノ必要ト余儀ナ
クサレテ稍強ニ自己ノ利益ヲ保チスギタト云フ非難ク正當ナラバ日本
ノ立場ヲ與エテ解セザルナリ、其レハ滿州ノ一ニ味ヲ入レタ列國ノ行
爲モ亦正當ラバキ居レリ、滿州ニ於ケル利益ハ列國ニ於テハ其ノ經濟界
展ノ延長ノ目的ナリ、日本ニトリテハソレハ存立自營ノ要素ヲ存ト考ヘ
ラレタルナリ、其ノ條件ヲ確保スルタメニ二十一ヶ条ノ中ニ滿州ニ關ス
ル數多ノ要求ガ提出サレタルナリ、其ノ要求トシテモ從來列國カ支那ニ
於テテ要求シタルモノニ比ベテ殊ニ支那ハ勿論ノコト或ル外國ノ滿州ニ
於ケル經濟事業ヲ一概ニ拒絕スルテハ全然容マレ居ラザルナリ、更ニ東
蒙古ニ關スル條件ヲ加ヘタルハ兩滿一國スル利益ノ便宜上ノ強要ニシテ
其ノ方面ノ實業振興ヲ許ラントシタルモノナリ、別ニ他ノ列國ノ要求ト
相違ヒテ東蒙古ニ於ケル鐵道ノ布設ニ於ケル權利ガ日本ニ與ラレ居ル位
ナレバ二十一ヶ条ノ中ニ東蒙古ノ開闢ニ關スル條件ガ含マレ居リテモ大
レハ新規ノ條件トシテ見ルテハ出來ズ、要スルニ二十一ヶ条ノ中滿蒙ニ
關スル要求ハ從來ノ利益ヲ振興シタル點ハアルモ夫レハ從來他ノ列國カ

夫即ニ要求シタルモノト同様ノ性質ヲ有ス、強ヒテ天レヲ日本ノミノ侵
辱ト見ルテハ出來ズ、

漢治茲公司ニ付テハ之レヲ日支合辦トスルヲウ兼認ヤレ、民國政府ハ
次シテ之レヲ沒收スルコトナク又公司ニ干渉セル日本資本家ノ同意ナク
シテ次シテ之レヲ國有トセズ、且ツ日本以外ノ國ニハ公司ニ投資權ヲ與
ヘスト云フテ契約サレタリ、此キニ我カ明治四十一年ヲ以テ漢陽ノ製鐵
廠ト大冶ノ鐵山ト蕪湖ノ炭坑トノ三ヶ所ノ事業ヲ合併シテ此處ニ漢冶
公司ト云フ大ナル株式會社成立ス、此ノ製鐵事業ハ之ハ已ニ明治二十七
年ニ湖広總督張之洞ノ意見ニ基キ治メラレタルモノナリ、次テ二十九年
ヨリ林式組機トナリシド其ノ頃ハ大冶鐵山ト漢陽製鐵所トヲ合シタル
モノニシテ、當時モナク蕪湖炭坑ヲ加ヘテ三ヶ所ノ事業ヲ合併スルニ至
リ彼ノ盛衰懐ナル者其ノ在長トナレリ、大冶ノ產鐵量ハ實ニ莫大ナルモ
ノニシテ二百平方哩ノ間ニ凡ソ二億噸ヲ含ムト稱セラル、我國ニ於テ用
ヒラルル鐵ハ明若三十三年頃ヨリ歟ハ主トシテ此處ヨリ供給セラレ居レ
リ、

（武器ヲ休ルニ銀ハ日本ヨリ多ク出デズ）

次デ明治廿七年ニ日本ヨリ大老ノ採鉄事業ヲ助クルタメニ一ツノ借款
約ヲ結ビシカ、其ノ後借款ニ借款ヲ重ねテ結局其ノ事業ヲ日英合弁トシ
タルガが有利ナリト云フ意見起リ来レリ、其ノ分辯ト云フテ明治四丁
五年ニ一時実行サレントセシメ不奉ニシテ中絶セリ、其ノ後廿九年
ニ日本ヨリ英二千五百万円ノ借款ニ悉シタル所ニ此ノ借款ハ將來四十年
間ニ大老ノ銀ヲ以テ代償スレトナリ、又日本ヨリハ採鉄ノ監督及師ヲ
招クト云フ契約成立セリ、斯ノ如ク日英交渉が起リシ頃迄ニ日本ヨリ公
司ニ貸付テタル金額ハ総計三千万円道クニナリ居レリ、日本ト公司トノ
關係が斯ノ如ク直接ニ結バレ居タレ故ニ其ノ事業ヲ益々改善且ツ發展サ
スガタメニ、此ノ度ノ日英交渉ニ於テソレヲ日英合辦トスル要求ヲ提出
セリ、即チ此ノ要求ハ從來ノ關係ノ延長ニシテ他ニ別ニ弊ヲ意味ラ含メ
ルモノニアラズ、次ニ支那沿岸ノ澎湖及島嶼ヲ或ル外國ニ讓スルハ實
然シテイトスフテ支那政府自ラ宣言スルコトナレリ、之レハ始メ日
本ヨリ要求セル所ナルガ、之レニツキテノ交渉が日英條約ノ中ニモ見エ

テ居ラハ、又其ノ所屬公文各ノ中ニモ記サレ居ラス、五月十三日ヲ以テ
民國政府が自ラ之レヲ宣言スレトナレリ、日本ガ之レヲ要求シタル理
由ハ從來列國カ支那沿岸ニ根據地ヲ依リテ支那ノ領土保全ヲ害シタル
多ノ實例ヲ顧ミテ將本如斯危險ヲ生シメナイト云フ考ハニ基ケルモノ
ナリ、以上ノ四項ノ外ニ所謂希望條件トシテ知ラレタル第五項アリ、此
ノ第五項ノ中ニハ前ニ述ハシ七條ノ要求が含マレ居リ、其ノ中福建省ニ
關スルモノガ日本ノ要求トハ異ナル形ニ於テ承諾サレ、他ノ五條ハ皆
入レラレサリキ、即チ福建省ニ付キテハ民國力其ノ鐵道、金山、臺灣、
ノ設備等ニツキテ外國資本ヲ受スル場合ニハ先ツ日本ト協議スヤシト云
フコトが要求ナリキ、其レが其條ハナク次ノ如キ條件ニテ承諾セラレタ
リ、

即チ民國ハ福建省ニ於テ運糧所、軍用貯炭所、海軍根據地其ノ他
ノ軍務的設備ヲナスコトヲ如何ナルコトニモ許サズ、又民國自身モ外國借款
ニ依リテソレト同様ノ設備ヲ企テルコトヲ許サズト云フコトニ決議セリ、
日本ハ福建省ニ付キテ特ニ注意ヲ払ヒ来リタルハ全ク自若ノ必要ニ基ク

モノナリ、或ル外国ノ勢カガ福建ニ獲ルト云フハ即チ我が台湾ノ安全ヲ脅カサレル得レアリ、其レ故ニ已ニ明治三十一年ニ於テ日本ヨリ清國政府ニ要求シテ福建ヲ決シテ外國ニ割譲セバト云フ宣言ヲ發表シテ實ヒタルコトナリ、此ノ當時列國ハ自分ニ取リテ利益ノ關係深キ地方ニ就キテ種々ノ要求ヲ清國ニ提出シ居タリ、其ノ要求ノ中ニハ曠ル横暴ナルモノ少カラサルハ於テ日本ハ主トシテ台湾ノ安全ヲ目的トスル自當ノ必要ニ基キテ福建不割譲ト云フコトヲ要求シタル故ナリ、今々其ノ日支交渉ニ於テモ同ジク自當ノ必要ニ基キテ前ノ不割譲ノ契約ヲ更ニ確保セント考ヘシ歟ナリ、

最後ニ撤回サレタル五ヶ条ヲ一括シテ考ヘ見ルニ或ハ外國ノ先例ニ依リシダケノモノモアリ、例ヘハ日本人ノ布教、日本人ノ病院、学校等ノ土地所有權、及南支那ニ於ケル鐵道印款ノ如キモノ即チソレナリ、或ハ我カ居留民ノ安全ヲ求メタルニ過キタルモノナリ、例ヘハ民田ノ警備、南ノ改裝即チソレナリ、或ハ日支ノ提携ト云フコトヲ目的トセルモノナリ、例ヘハ日本人ヲ政府ノ顧問トシテ庶フコト、日本ヨリ兵艦ヲ供給スルコト等ソレナリ、

此等カ希望条件トシテ提出サレシハ山東省、南滿州、及漢冶萍公司等ノ如ク目下盛ナニ締結ヲ欲スヘキ程度ノモノニアラザリシカハムシロハ要ク取極ムルモノナリ、(Putsch article) ノ名ニテ *Shanghai* ハ日本ヲ置例セリ、)

日支交渉ノ目的ハ全ク我國ノ自衛ト日支共存トナリ得トセルモノニシテ其ノ条件其ノモノ、中ニハ情ニ便思ハ意欲ヲ含ムモノナリ、然ルニ此ノ交渉ニ就テ他日支那ノミナラス歐米方面ニ於テモ極メラ痛烈ナル排日感情ノ起来セシハ条件其ノモノ、外ニ或ハ東西ナカルヘカラス、恐ヨハ大体ニ於テ四ヶ條アリト思考セラレ、

一 此ノ要求ヲ提出セシ時期ハ甚ダシク對テ得ナリシコト、
 前チ歐州大戰ニ於テ從來支那ニ關係ナク居リシ列國ハ暫ク東洋ヲ敵ミル余暇ナカリシニ兼シ日本ハ如斯ク我ノ要求ヲ一時ニ提出セシハ頗ル日本ノ野心ヲ疑ハシメタル有力ナル原因トナレリ、當時北京ニ在リシ米國公使 *Reinick* カ最近 *Asien* ナル会月号ノ雜誌ニ於テ我ハ觀シク見聞セシ此ノ日支交渉ニ付キ裏面ノ消息ヲ秘スルモノヲ述ヘ居リシ中ニ

大段リ此ノ要求ハ甚ク時期ヲ得ナリシコトヲ強烈ニ非難シ居リ我日本ニ
対シテ曰楠ヲ表シ居ル *Bland* 及 *Blinn* *Japan* and *Korea*
News ヲ著キ此ノ中ニ元根ハ次キノ如キ意見ヲ表セリ

即チ日本ハ此ノ當時確カニ孤立ノ勝利ニ降スモノト思ヒ居リシナリ
依ツテ列國ハ日本ノ要求ニ對シ何等ノ干渉ヲ之加ヘ得スト期待シ居タル
相違ナシ夫故日本ハ如斯ク大ノ要求ヲ一時ニ提出シテ憚ラザリシナ
リ此ノ *Bland* 意見ハ果シテ當リ得居ルヤ否ヤハ判トシ當時一服ニ
外人(歐米人)ハ日本ノ要求ハ時機ヲ失シ居ルモノト非難シ居ント一致シ
今日ヨリ敵ミテ秋々ハ考フルニ此ノ非難ハ世々シテ強更ニ日本ニ對シテ
敵意ヲ含ミシ爲メニ非ラズシテ日本自ラ其ノ非難ニ對シテ大部分ノ責任ヲ
負フヘク思考セラル

二 最後通牒ヲ送レルコトナリ

上月七日日露戰爭後滿州ノ方面ニ於テ日支間ニ種々難問起リ時ニハ
日本ハ屢々最後ノ通牒ヲ用ヒタルコトアリ今尚全林ニ右ノ段ヲ繰リ返
スコトニナリシリ此ノ時ハ世々シテ我國ト戰フタケノ餘慮セシ決心ヲ持

テシコハ非ラズシテ唯威嚇ノ爲メニ此ノ手段ヲ用ヒタリシ形跡ナリ

此ノ時ニ袁氏が容易ニ屈服セシハ日本ニ取リテノ僥倖ナリ若シ袁氏
一シテ當時日本ニ對スル反抗ノ勇氣ヲ振興セシムル日本ハ右ノ勦亂ヲ
惹起セシナラントノ責任ヲ免レサルナリ殊ニ此ノ手段其自ラハ決シテ
濫用スヘキ性格ノモノニ非ラサルニ不拘此ノ時機其以前ニ於テ日本
ハ屢々之ヲ繰返シタルハ日本ノ信用ヲ傷害スルモノニシテ決シテ良好ナ
ル結果ヲ納メ得ヘキモノニ非ラサルコトハ明瞭ナリ

三 我對支政策ノ不統一ナルコト

當時ノ對支外交ハ全然軍閥ノ干渉ニ左右セラレ政府ノ意見トシテ統一サ
レ居タルニイラス例へ日本ノ要求ハ正ニ日本ノ自衛ト曰夫氏存ヲ目的
トセルモノニセヨソレガ軍閥ノ希望ノ内意ニ基クモノナランニハ勢イ優
塞的色彩ヲ帯ヒシモノナリ要求ソレ自身ノ不肖ニ非ラズトモ夫等要求
スル態度ニ於テ優容ノ色彩ノ現ハルハ不得已ナル歟ナリ此ノ文書ニ
於ケル態度ニハ送懐ナカラ強圧ニスキ居タルナリ(要求書ノ中ニスカ
シトシテ軍閥及機關誌ノ回ノ有リシコトヲ *Asahi* (本年報) 吹ノ雜誌)

四 我政府ノ外交政策ノ根本ニ於テ或ル大ナル誤解ヲ有シ居タルコト、即チ民國ノ政府ノミテ相手ニシテ民國ノ國民ヲハ全然考慮シ居ザリシナリ古來ニ於テハ政府ト國民トハ互ニ交渉ナルコト屢々ナリキ、從テラ國民ハ政治ナルモノニ對シ敏ル理解ヲ欠キ居タルコト久シ、然ルニ一革命以後右ノ事情ニハ以テ變化ヲ來タシ國民ノ知識一般ニ向上シ來タリ政府ノ行動ヨリ國民ノ知識ノ方ハ力強ク現ハレ來タリシナリ、從テラ或外國ハ其ノ政府ニ對シ或ル要求ヲ發シモ其ノ國民ノ感情ヲ害セシハ大ナル不利益ヲ招キ如キ狀況ニ成リ來レリ、如斯要求ヲ提出スルニ當リハ其ノ支那國民ノ理解ヲ求ムヘキ必要アリ、此ノ交渉ハ實ニ支那國民ヲ徹ニスシテ政府ノミテ腹中ニ於ケルモノナリ例ハ競争ニ其ノ要求ヲ發シタリト云モモトモ其ノ實行スルコトハ頗ル困難ナルヘキ故ナリ、況ンヤ其ノ政府ヲ壓迫シテ強イテ其ノ要求ヲ發シシノミニテハ其ノ國民ノ反感ニ付キ條約ハ一種ノ空文トナルヘキナリ、例ノニ十一ヶ條ノ目的ハ日支交渉トモ日本ノ自衛トモ目的トモセシモノ

ニ至テ其ノ條件タルハ優畧的意義ヲ含ミ居ルニハアラス、然レニ此ノ政ニ至リ民國及外國ニ於テ排日感情ノ惹起シタルハ条件其ノモノニアラスシテ其レヲ提出シタル時機及日本ノ態度少シク穩當ヲ欠キ居リシ故ナリ殊ニ我國ノ最後通牒ヲ提出セシ時ノ如キハ北ハ滿州ヨリ南ハ南洋ニ至レテ大規模ノ排日及排貨ノ運動國民人間ニ突然トシテ起レリ我國ノ人々ハ屢々危殆ヲ加ヘラレ殊ニ我商業ハ多大ノ損害ヲ蒙リシナリ

此ノ排日排貨ノ手段トシテ民國ノ人々ハ實行セシモノ、ハ激文ヲ散布スルコトナリギ殊ニ五月八日北京ノ商務總會ヨリ發シタル激文ノ如キハ頗ル悲憤ノ文字ヲ連ネ其ノ文中ニ五月七日ノ恥ハ子々孫々誓フテ一刺モ忘ル可カラズ、此ノ事亡フトモ此ノ志死セズ永ク此ノ志ヲ存シ國恥ヲ忘ル、勿レトスフ一節ヲアリキ、漢口ノ國民新報ハ五月七日ヲ以テ國恥紀念日トナスヘキコトヲ建議シ由國恥紀念日又國恥紀念日ヲ作リ國恥紀念日ヲ作リ國恥紀念日ヲ編纂スヘント唱テ其ノ終リニ「我力能一日奮カスンハ我志一日忘ル可カラズ天長地久時アリテ尽ク此

ノ怒ミ解カトシテ絶ユルカキナシトノ一句ヲ以テ終レリ。

他ノ一ハ団体ヲ作り國民ヲ激勵スルコトナリキ。例ハ救國儲金團ヲ作り上海ニ事務所ヲオキ全國ヨリ金ヲ集メ武器製造陸軍拡張工業刷新等ニ此レヲ使用スルト稱セリ。北京ニ於テモ救國儲金大會催サレ同種ナル目的ヲ宣告セリ。尚又國貨使用ヲ誘ムル団体諸方ニ起リ政府ニ此レヲ助ケテ日貨排斥ヲナセリ。

之等ハ國民一般ニ通スル問題ナリシニ地方ニ於テ格別ナル団体多ク出来タリ。湖南ニ於テハ討日同志會出来儲蓄及排貨トヲ奨励シ盛ンニ排日宣伝ノ新聞ヲ發刊スヘキコトヲ發議セリ。如斯運動ハ單ニ日キ一対スル故憤心ヨリ起レルモノナリト考フモハ少シク早計ニシラ中ニハ此ノ運動ヲ利用シ他ノ目的ヲ達セントスルモノ少キガリキ。例ハ政治家ハ此ヲ利用シ自党ノ利益ヲ計ラントセリ。商人トシテハ土レヲ利用シ自合ノ高品ヲ売り扱メントセリ。

外國商人ノ如キハ此ノ目的ヲ以テ國民人ヲ動かシタルコト明カナリ。宣教師ハ排日ヲ以テカシ民國ノ人々ノ熱心ヲ起メントセリ。其

ノ外職業的煽動者ト云フモアリテ愛國ノ美名ノモトニ運動費ヲ金ラントセルモノアリ。或ハ売名ノ為メニ奔走セルモノアリ。後ツラ民國一般ノ國民ハ悉ク此ノ運動ニ參加セルニアラシテ排貨ノ為メ終末僅ヒ割レシ日本品ヲ用ヒ得スシテ不便感ハ投害ヲ蒙レル者多カリキ。唯智識階級ノ人々ハ日本ニ對シ稍々深刻ナル反感ヲ有シテ排日ノ手段ヲメクラスコトヲ忌ラサリキ。

要ニ外人ノ眼ニ映シタル日支交渉ハ明カニ日本ノ野心ヲ暴露セルモノトシテ殊ニ米國人ハ將末支那ニ對スル活動ノ基礎ヲ固クセントシタル爲ニ此ノ交渉ニ付キ不快ヲ感セリ。殊ニ *The Louisville, Tennessee of Japan* 或ハ *Millard, Van Eastern Question* 我日支交渉ニ付キヲ票置リナセリ。歐洲ノ論者ニハ日本ノ立場相當ナリ解ヲ指スルモノアリシモ其ノ當時ニ於テハ日本ヲ疑フ論者ノ爲メニ反例ナレ居リ。

要スルニ此ノ交渉ハ我カ國ニ取リテ決シテ有利ナシ結果ヲ莫ハスシテ現ニ日本ハ此ノ結果ヲ得タル權利ノ大部分ハ今日ニ至ルマテ實現サレサ

ル有様ニシテ又日支ノ感情ノ距リヲ増シタル外格利ノ利益ナカリシト見
ルヲ至當トナス。

第八章 袁氏没後南北妥協ノ大勢

日支交渉ハ袁氏ニヨリテ殊更ニ重大ラシク論議サレタル所アリ。彼ハ
自己ノ地位ヲ固クセンカトモ。此ノ問題ヲ利用シタリ。其後彼ノ帝制計画
ハ熟シ未リ殆ント完成ノ同際ニ強烈ナル反対ヲ受ケ彼ノ第三革命ノ混乱ノ
内ニ彼ノ柱メヲ變化シ富メル生活の生涯ハ終リテ告ケタリ。民國五年六月
袁氏死シテ後民國政界ハ頗ル複雑トナレリ。南方革命派ハ岑春煊ノ手ニヨ
リテ累々統一ナレ居レリ。唐紹儀以下ノ元老派ハ上海ニ於テ反袁運動ニ夫
リ居レリ。孫文以下ノ旧革命党モ上海ニ入り込ミテ革命ニ参加セリ。尙カ
ウラ遠氏ニヨリテ破壊サレシ国会議院ニ百余名モ新政府建設ノ計画ヲメク
ラセリ。革命側ノ氣焰ハ斯クマラニ盛ニナルニモ不拘革命軍ハ長江ヲ越エ
ソレ以北ニ突進スル能ハサリシハ何故ナリヤテ乎ハサル可カラズ。

其主要ナル原因ハ南境ニ駐在セル江蘇將軍。馮國璋が革命軍ニ對シテ助力
スル決心ヲ定メズ南北ノ間ニハ在シテ長江ノ沿岸ノ諸將軍ト連合シテ一中
間勢力ヲ形成セルニ由ル。故ニ袁氏没後ニ於ケル北方ニハ袁氏ノ殘党アリ
南方ニハ革命派アリ中間ニハ中立的將軍團アリ。大体ニ於テ國民ノ政界三
分サレ居レリ。革命派ハ袁氏没セル爲メニ敵ト見做スルべき目標ヲ失ヒ殊ニ
其團結ガ鞏固ナリシニハ非ズシテ前ノ國民黨系ノモノアリ。進歩黨系ノ者モ
アリ。國民黨ノ中ニテモ亦岑春煊孫文黃興等ノ派ニ分レタリ。
故ニ彼等ノ共同ノ敵ナル袁氏ヲ失ヒシ後ハ頗ル動搖シ始メタリ。加フレニ
彼等ガ高引燒キテ兵力ニヨリテ民回ヲ統一セントスルニハ先ヅ資金ニ於テ
欠乏ヲ感ジ居レリ。長ク策カヲ要スルハ紳商ノ同情ヲ失フ所以ニシテ其
紳商ノ金力ニ依ラズシテ兵力ヲ維持スルハ難ハザリキ。北方ニ於テモ袁氏
ノ殘党ハ決シテ鞏固ニ團結セルニ非ズ。帝政計畫ノ実行者タル梁士詒ノ一
派ト段祺瑞ノ軍人派トハ互ニ和合セズ。北方各省ノ將軍連ノ態度モ一政ヲ
欠ゲリ。

袁氏ニ代リテ相島ノ職ヲ執レル黎元洪ハ旧革命側ト多クノ親睦ヲ有セル人

ニシテ今や革命派ト妥協シテ共和政治ヲ建テ直サントスルノ希望ヲ有スル
 モノニシテ又彼ハ段氏ニ派ヲ圧シテ我輩ヲ貫クダケノ勢力ヲ有セザリキ
 中尙勢力カレ瑪氏一派モ只南北ノ形勢ヲ窺ヒテ自分等ニトリテ有利ナル方
 針ヲ採ラントセルノミニシテ決シテ南北ノ仲裁者トナリテ南北ヲ統一セシ
 トスルノ誠意、実力共ニ有セザレナリ、
 然ルニ馮氏ハ民党ガ期待セシ文ケノ助カケルガ如キ人物ニハ非ザリキ、
 彼ハ只北方ニアル南方ニアレ其時々ノ形勢ニヨリテ自己ノ行動ヲ左右スル
 ヲ以テ自己ノ主義トセル人物ナリシカバ民党ニ取リテ信頼スベキ後援者
 ニハ非ザリキ、殊ニ民党ハ内部ノ分裂ニヨリテ其團結薄弱トナレリ、
 民党中北京ノ国会ヲ根拠トシテ活躍セシハ国民党系ニシテ内閣ノ一貫タル
 孫洪伊ト孫培シテ段氏ト切リニ反抗シテ、アリキ、孫氏遂ニ段氏ノ為メニ
 内閣ヲ追ハレタルハ民党ノ為メニ大ナル打撃ナリキ、又民党ノ中心人物タ
 レ者馮氏ハ一將外也、總長トシテ北京ニ招カレタレド種々ノ事情ニ妨ゲラレ
 終ヒニ就職スルヲ待ザリキ、又孫文ノ一派ハ此頃積極的ニ活動スルガ如キ
 勇氣ヲ欠ガレリ、ノミナラス後來ハ民党ト行動ヲ共ニセシ梁啓超ハ憲法

研究会ヲ起シ(小段党)テ遂ニ民党ニ強逆シ段氏ト通ジ段氏ヲ擁護スルト云
 フ傾向ヲ示セリ、此一派ガ切リニ国民党系ノ團結ヲ崩壊スルノ策略ヲ計リ
 居レリ、又元国民党ニ属セシ張耀曾、谷鍾秀ノ二人ハ最ニ招カレテ段氏ノ
 内閣ニ用ヒラレテヨリハ及ツテ段氏ト親シク結ブニ至リ此兩者ヲ中心トセ
 ル一派ガ新タニ政学会ト云フ政党ヲ主テ、彼ノ岑春煊ヲ主顧トシテ黨クト
 ヲツトナレリ、

岑氏ハ元米国民党系ノ一領袖ナルモ能道モ段氏ニ及坑スレト云フ岑ニハ非
 ズシテ寧ロ南北妥協ノ成主ヲ全フセシメントスル方針ヲ採リタルモノニシ
 ツ岑氏ヲ頭トスル政学会ハ自然段氏ニ利用セラレ易ク傾向ヲ有セリ、

要スルニ民党ノ歩調ハ次オニ乱レ只国民党ニ属スル一部ノ人々ガ国会ヲ
 根拠トシテ段氏ヲ中心トスル官僚軍伐ニ対シテ直接ニ對抗シツ、アリシナ
 リ、若シ国会ガ段氏ノ為メニ瓦解サレ、如キトナレバ民党ハ直チニ存在
 ノ立場ヲ失フ理トナルナリ、

以上ハ大正五年ノ形勢ナリキ、大正六年二月ノ始メニ至リ米回ガ独乙ト断
 文スルトナリ、彼イテ米回ハ国民政府ニ向ツテ独乙ニ對シテ断文ヲ勸誘シ

未レリ。此向題ニ付テ段氏ト国会トノ衝突ノ危機近ツケリ段氏ハ此時漸支ニ賛成シテ黎總統ニ向ツテ其同意ヲ求メシガ黎氏ハ先ダ国会ノ賛否ヲ質スノ要アリトノ意見ヲ有セリ。段氏ハ其必要ヲ認メザルクメニ黎氏ノ態度ヲ心良カラズトシテ遂ニ國務總理ノ職ヲ辞シ天津ナル自家へ級レリ。然レ乍ラ馮副總統ノ仲裁ニヨリテ復職シ結局段氏ノ意見ヲ實施スルコトナリ今年三月十四日漸支ヲ布告セリ。此漸支ニ付テハ段氏ノ国会ニ向ツテ其始末ヲ報告セシノミナリキ之レ国会ノ賛否ノ如キハ向題トセザリシガ故ナリ。而レテ寺内内閣ガ此対独漸支ノ決心ヲ段氏ニ誘メ段氏モ亦日本ニ信頼シテ其決心ヲ宣メタリトノ説アリ。之ハ別向題トシテモ段氏ト寺内内閣トノ握手トハ此向題ニ伴ヒテ氏國政各ノ注目ヲ惹クニ至レバ疑ヲ容レバノ余地ナキナリ。(其仲介トナリシハ石井大使ナリ)

対独國交漸支ハ一步ヲ進メテ宣戰トナリタリ。此漸支ニ付テハ約法ノ規定ニヨリ国会ノ同意ヲ要セザルモ宣戰ノ布告ニ付テハ国会ノ同意ヲ必要トス。然レニ国会ノ国民党議員ハ此宣戰ニ反対シテ段氏ヲ苦シメントセリ。

國民ガ独乙ニ対シテ宣戰シテ協商四側ト行動ヲ共ニセントスレニハ何等カノ有利ナル參戰條件ヲ求ムルノ必要アリキ。然レモ此條件ナレモノハ極メテ曖昧ナリキ故ニ国民党ハソレヲ理由トシテ參戰反對ヲ計畫セリ段氏自ラモ此條件決定ニ付テハ頗ル苦心シタリキ。

五月十日ニ至リ愈々宣戰案ガ国会ニ提出サレニ至レルモ段氏ハ猛烈ナル反対ヲ受ケテ此案ニ賛成ヲ得ル見込ミ立タザリキ。於茲北京督軍ハ段氏ヲ接ケテ議會解散セシムベキ氣勢ヲ見セシメ黎總統ハ何処迄モ国会ノ意志ヲ重シクテ解散ヲ實行セザリキ。ノミナラズ五月廿三日漸支段氏ヲ免職セシメシリ。然レモ黎氏ガ何故ニ斯クモ強硬ニ出デシカハ疑向トスル所ニシテ恐ラクハ段氏ノ後援ナル督軍ノ勢力ノ頼ムニ足ラザル者ト見込ミタルタメカ又ハ自己ノ後援者トシテノ長江一巡使張勳氏ノ助ヲ得ル見込アリタル爲ナリシカハ不明ナルモ要スルニ懸幸トモ無謀トモ云フベキ行為ナリキ。

果シテ黎氏ノ予想ニ及シテ督軍團ノ行動ガ極メテ猛烈トナリテ現ハレ未レリ。段氏ガ北京ヨリ天津へ級リテヨリ五月廿九日安徽省長タレ倪嗣冲ガ先ヅ獨立ヲ宣言シタルヲ始メトシテ河南 奉天 陝西 直隸 福建 山東等

各省督軍遂ニ独立ヲ宣言スルニ至リ高彼寺ハ天津ノ段氏ヲ中心ニ臨時政府ヲ作ラントセリ。之ガ為北京方面ノ人心動搖シテ不安ノ空氣瀰ヒタリキ。此混亂ノ中ニ於テ張勳ハ彼ノ有力ナル軍隊ヲ率ヒテ真駐在セル徐州ヨリ北上シテ先ヅ天津ヘ着セリ。彼ハ黎段兩氏ノ仲裁者タル地位ニ立テリトハ云ヘ元來北方督軍團ノ有力ナル一人ナレバ勢ヒ督軍團ノ為メニ黎段兩氏及ビ國會ヲ壓迫スル方針ヲ採ラザル可ラザレニ至レリ。黎氏ハ彼ノ西迫ニ堪ヘズシテ終ニ國會ヲ解散スルニ決セリ。之レ六月十二日ノ事ナリキ。張氏ハ一方ニ於テ黎段兩氏ヲ壓迫シ督軍團ヲ率メテ目下ノ獨立ヲ取消サシムルヲニ於テ成功セリ。彼ハ斷テ得志ノ狀態ニ至テ後未嘗カニ自己ノ胸中ニ計画中ナリシ復辟ノ計画ヲ斷行スベキ好機會到来セリト考ヘタリ。七月一日遂ニ復ハ突然元ノ宣統帝ノ復辟ヲ斷行セリ。黎氏ハ狼狽シテ日本公使館ニ逃レ保護ヲ求メタリ。其翌日堂々トシテ張勳計画ヲ宣言セシハ段氏ナリキ。副總統馮國璋又亦段氏ト同一態度ニ出テリ。馮段二氏ノ連合ハ北京督軍團ノ態度ニ大影響ヲ與ヘタリ。張勳ノ為メニ努力スルモノ一人モナカリキ。七月十二日段氏ノ軍勢ガ北京ニ入り張勳ハ和南ノ公使館ニ逃レタリ。

斯レテ復辟ハ十二日間ニテ失敗ニ終レリ。蓋シ之ハ段氏天津到着後ノ運ニツレテラレテ無分別ニモ復辟ノ成功ヲ夢見タルニ相違ナキモ何奇カニ喚ウサレタル点ナルモノ、如レ。又一説ニハ古者ノ言ヲ信ジテナレタル行為ナリトモ云ヘリ。段氏ハ張勳ノ意中ヲヨク知り居タルモノニシテ始メハ張勳計画ヲ察知シ置キテ愈々実行サレ、ニ及ンデ一挙ニ之ヲ討撃セリ。之ハ逆境ニ臨レル段氏ニトリテハ兵復治ノ為メニ最良ノ手段ナリキ。即チ張勳ノ復辟運動ハ段氏復治ノ途ヲ開ケルモノニシテ全ク段氏ニ利用セラレタルモノナリト云フベシ。何トナレバ復辟失敗ハ黎段ノ失職ヲ伴ヒ段氏ハ其後補ニ入ルノ機會ヲ得タルモノナレバナリ。

段氏ハ再ビ茲ニ北京政界ノ中心人物トナリ七月十八日段内閣成立シ馮氏ハ南京ヨリ入京シテ八月一日大總統ノ職ヲ極ルニ至レリ。斯レテ段氏ノ主張タル對德宣戰モ實現セリ。之八月十四日ナリキ。今ヤ北京ニ八國會ナリテ段氏ニ對スル及對清ナクナリ馮氏ト聯合ニヨリテ北京政界ハ益々重キヲナスニ至レリ。而シテ國會ニ對スレ段氏及其援護者タル督軍團ノ橫暴ハ深キ及對立分テ促シ復未ノ南北妥協運動ハ全ク失敗ニ終レリ。

南北対峙

広東、広西、雲南、貴州、四川、湖南、六省。即チ先ニ袁氏ニ反抗シテ相違ビレ六省ヲ更ニ再ビ聯合シテ大イニ反叛運動ヲ起サントセシモ其間ニハ利害ノ衝突アリ感情ノ不和等アリテ其偏頗ナキ聯合ヲ成立セシムルハ大ナル困難ナリ。只段氏ノ政策が専ラ民力ヲ以テ南方ヲ威圧スル方針ヲ採レル為メニソレニ対スル共同ノ反感ニ基キテ南方六省ノ聯合が稍成立シ得ル望ヲ有スルニ至レリ。

如斯クニシテ南北分高ノ形勢が次オニ顕著トナリ段氏ハ武力解決ノ方針ヲ採リテ一方ニハ四川省ニ向ヒ他ノ一方ニハ湖南省ニ向ヒテ専ラ兵力ヲ以テ威圧ヲ加ヘタリ。之ガタメ遂ニ民衆ニ高スレ一部ノ各人が零陵ニ於テ兵力ニ新ヘテ反抗ヲ企フルトナリ茲ニ南北対峙ノ形勢ハ愈々決堂サレハニ至レリ。此時段氏ハ自己ノ信任スル傅良佐ト云フ人ヲ湖南ノ督軍ニ任命シテ此者ノ手ヲ通ジテ先ヅ湖南ヲ威圧セントセシムルニ對シテ零陵ノ鎮守使劉建藩が武力ヲ以テ公然傅氏ニ反抗スルニ至レリ。之ガ一ノ動機トナリテ

之ニ別戦ナレテ南方聯合ノ色彩稍鮮明トナラントシテ、アリ。然レ其聯合ノ内面的融和ハ程メテ不純ナリキ。彼ノ軍政界ハ實力貧弱ナリキ。陸榮廷ハ此機會ニ於テ自己ノ勢力地ヲ拡張セントスルニ熱心ナリキ。唐繼堯自己ノミノ利益ノ為メニ四川省侵入ノ目的ヲ有シ在レリ。如斯表面ノ南方形勢ヲ見テ段氏ハ愈々武力解決ノ決心ヲ固クセリ。而シテ湖南、四川ニ増援ノ軍ヲ送り又當時海南島ニ警備セシ龍濟光ヲ引去レテ陸氏ニ對抗センノケルモ之等努力ノ結果ハ案外薄弱ナリキ。段氏ノ力ヲ殆ンド無敵ニ終ラシメタル原因ハ南方ノ聯合が堅固ナルニ非ズレテ北京ニ於ケル内部ノ情實ニ煩ハサレレ為ナリ。

北京内部ノ情實ハ段氏ト馮氏トノ暗闘ヨリ生ジタレヌノナリ馮氏が大統領トシテ入京セシトニ彼が自己ノ後任即チ江蘇督軍トシテ李純ト云ハル人ヲ推薦セシハ之ハ將來自己ノ後援トスルノ計画ニ基キケルモノナリキ。李純ノ外ニ江西督軍陳光遠、湖北督軍王占元一ニ名モ固ク馮氏ト聯絡ヲ保チ居レリ。之等三督軍ハ所謂長江地方ノ中間勢力トシテ馮氏ノ地位ヲ支持シ居タリキ。今十馮氏ハ南北対峙ノ形勢が著ク衰衰シ来レルニ對シテ段氏

ノ武力解決策ニ及テテ自ラ平和解決ノ必要ヲカ説セリ。彼ハオ三革命ノ頃ヨリレテ帝ニ南方派ト消息ヲ保チ居リシ關係上此際然南方派ヲ敵視スルガ如キ態度ヲ取ル下能ハザリキ。又段氏ノ武力解決ニ同意シテ段氏ノ成功ヲ助クルガ如キ一ハ固ヨリ好マザレ所ナリキ。故ニ彼ト段氏トノ間ニハ自然意志ノ疎通ヲ欠ク兩人ノ間ニ次オニ暗闘が生ジ未レル理ナリ。馮氏ハ直隸省出身ニシテ彼ノ周圍ニ集レル人々モ自然其者ノ人多ク、馮氏一派ハ通称直隸系ト呼バレタリキ。段氏ハ安徽省出身ナリシカバ之レ亦同省出身ノ人々ハ多クハ段氏ヲ援ケル傾向アリキ。故ニ此一派ヲ通称安徽系ト云ヒタリ。馮段二人ノ暗闘ハ自ラ直隸系ト安徽系トノ及目トシテ表ハレタリ。勿論直隸安徽二者出身ノ人々が判然相分レテ党派ヲ成セルニハ非ズレテ只兩派ノ主要ナル人物ニ右二者ノ出身ナリシ關係ヨリシテ直隸系又ハ安徽系ニ稱スル有力ナル因由トシテ交通系ト云フモノアリキ。之ハ内閣内ノ交通部(大藏省)ヲ根柢トシテ専ラ財政ヲ掌中ニセントセシ一派ナリキ。従来財政ノ経路ヲ獲メル梁士詒ガ中心ニシテ周自齊、陸宗輿、曹汝霖、等ガコレニ加ハリ居レリ。其内陸曹等ノ一派ガ又別ニ分レテ新交通系トナリ梁士詒ノ一派ガ旧交通系ト呼ハルルニ至レリ。其ノ新旧交通系ニ對シテ財政

ノ叔カッ申ハントシテ新ニ起レルハ梁士詒ノ率ユル研究会一派ナリキ。此梁氏ハ段氏ニ向クテ親シク有リシガ交通系トノ競争ガ有望ニ進行セザルニ憤然トシテ更ニ馮氏ニ向クテ親シク求メントシツ、アリキ。研究会ト交通系トノ及目が大イニ段氏ノ政策ニ對シテ煩ヲナセシ上ニ更ニ馮氏ノ直隸系ガ切リニ段派攻撃ノ策ヲ講シ居リシタメニ段氏ノ地位ハ次オニ困難ナル状況ニ陥レリ。

也斯クシテ馮氏ヲ中心トスレ直隸系ハ北京ニテモ、又長江方面ニテモ切リニ段氏ノ武力解決ヲ批難スル計畫ヲメグラシ南方派ハ勿論段氏ニ對スル及威ヲ強メタリ。加フルニ段氏ガ日本ハ鉄石奏ニ固スレ或利権ヲ與ヘテ借款ヲ取メ日本ヨリ武器ヲ買入レ段派自団ノ軍隊ヲ組織セントスル風説ガ段氏攻撃ノ有力ナル理由トナリ居タリキ。段氏ハ如斯キ目的ヲ有スレ借款受テ承認セシモ其策ヲ詳ク知能ハザリキ。彼ハ武力解決ノ方針ガ帝ニ密告ヲ受ケテ実行ノ望ミナキニ失望シ十一月廿日總理ヲ辭職セリ。然レ段氏ノ辭職ハ馮派ノ全勝ヲ意味スルモノニハ非ザリキ。予テヨリ段氏ト聯絡ヲ結ビシ北方督軍團ト一部ノ人々ハ此際段氏ノ為メニ一柱ノ示威運動ヲ起セリ。

後等ハ所謂天津會議ヲ用儀シ武力解決ノ必要ヲカ説レ馮氏ノ平和解決方ニ
 及対セリ。ノミナラズ段氏ハ対強宜戦ノ主唱者ニアリ従テ歐洲協商國側ヨ
 リ好意ニテ迎ヘラレフ、アリキ。故ニ段氏ヲ今昔シムレバ西政協商國
 ノ感情ヲ害スルニ至ル快レアリ。復テ馮氏ハ北方ノ分烈ト協商國列ノ意嚮
 トヲ顧慮シテ段氏ニ対シテ積極的攻撃ヲナスレハ結局自己ニ利ナラザラ
 知リ馮氏ハ止ムヲ得ズ段氏ニ向ヒ復職ヲ求メザレ可ラザルニ至ル。
 此際段氏ハ復職ニハ志セザリシモ別ニ參戰事務督弁トナルヲ承認セリ。
 民國ガ協商側ノ列國ト共ニ參戰フルトナレバ民國ヨリ歐洲ニ出兵スル必
 要起ルヤモ知レズ其為メ特別ノ軍隊ヲ編成スルノ必要アリトノ理由ノ下ニ
 段氏ノ手ニ於テ之ヲ計畫スルヲニナレリ。
 實際ハ參戰ヲ口實トシテ段派ノ為メニ用ヒラレ、新軍隊ヲ作ラントスルノ
 計畫ナリキ。即チ段氏ガ該督弁ニナリレハ段派復活ノ一手段トナリシナリ。
 段氏ハ一度其武力解決ノ方針ヲ実行スル困難ヲ感ゼンガ今ヤ新夕ニ武力ヲ
 逐養シテ後日自己ノ方針ヲ貫徹スルヲトナレリ。
 馮氏ハ一時段氏正途ヲナン得タル為メ衆ヲヨリ、平和解決ノ目的ヲ実行セ

ントシテ十二月下旬ニ至リ停戦布告ヲ發布セリ。感レニ北方ニ於テハ一度
 停戦セル段氏ガ又モ復活セントスルノ勢アルヲ見テ不快ヲ感ジ右ノ停戦布
 告ニ對シテモ何等ノ注意ヲ払ハントセザリキ。
 當時南軍ハ湖南省ニテ活躍シ翌年民國七年西南 護法聯合ガ広東ニテ組織
 セラレタリ。此際最ノ孫文一派ノ軍政府ガ除外セラレシハ注目スベキナ
 リ。右護法聯合ハ西南六省ノ督軍及ビ岑春煊ヲ中心トスル政学会ノ一派
 及善紹儀王正廷、張繼等ヲ合メ旧國民院ノ一派即チ益友社トガ互ニ聯合
 セルモノニシテ孫文一派ノ理想派ハ敬遠サレタレモノ、如シ。
 故ニ後軍政府ハ此護法聯合ニ合併セラレタリ。如斯ク南方ノ氣焰ハ益クナ
 リテ停戦ニ志セザレ如キ形勢ヲ生シ、北方ニテハ段氏ヲ援助スル督軍團ガ
 馮氏ニ向テ能シテ武力解決ノ必要ヲ要求シテ、アリキ。於茲馮氏ハ前ノ段
 氏ト同様ノ困難ナル状態ニ陥リ馮氏ノ平和解決方針ハ実行ノ望ナキニ至
 レリ。
 馮氏ハ一方ニ於テハ北方督軍團トノ意志ノ疎通ヲ計リ、他方ニ於テハ自己
 ヲ罰スル罪己布告ヲ發布セリ。終ヒニハ南方計伐ノ必要ヲ公言セシ等シキ

自己ノ措置ニ若シミ居タリ。然ルニ彼ノ後援タル長江ニ着軍ハ高平和解決
実行ノ運動ヲ止メザルノ状態ニシテ馮氏ハ自己ノ進退ニ若シミ終ヒニ降
ノ意ヲホノメカスニ至レリ。

一ニ云
彼ハ段氏ノ落勢カが意外ニ鞏固ナルニ驚カサレシガ實際段派ノ主戦方針
ハ益城ヲ逞シ其結果國民七年三月又改メテ段氏ハ國務總理ノ職ニ就ク
トナリ武ク解決ノ方針が更ニ新ラシキカヲ以テ実行サレントセリ。當時政州
ニテハ露俄ノ軍独熾和成スシ支那ノ北方ガ同盟國側ニ脅カサレントスル恐
レ起レル爲メニ参戦主唱者タル段氏ハ益々活躍スベキ好機會ヲ見出シタリ。
而シテ段氏活躍ニ関シテ之ヲ後援セントノ理由ニテ當時南方派ヨリ猛烈ニ
非難サレシガ即チ日本ノ寺内内閣ナリ。從テ段氏ト寺内内閣トノ關係ガ如
何ナル性質ヲ有スルモノナリヤヲ考フルノ要アリ。
寺内内閣が支那ニ對シテ実行セシ施設ノ主ナルモノヲ挙グれば大体次ノ如シ
一 交通銀行整理借款ニ千万円、大正六年九月貸ス。
交通銀行ハ中國銀行ト相並ンデ民國政府ノ金融機關ナリ。
二 有線電信借款トシテ二千万円貸ス。

之ハ交通整理ノ爲メニ貸與ス。從來ノ支那電信ハ外國ノ経営ナリシヲ將

來民國政府が自己ノ手ニテ經營セントノ目的ノタメナリ。

三 黑龍江、吉林二省ノ金銀、森林借款、トシテ日本ヨリ三千万円貸與ス、

北滿ノ實業開發ノ目的

四 吉金鐵道借款

準備契約ニ於テ全部五千万円ノ内一千万円ヲ前貸セリ。吉林ヨリ金銀ニ

至レ鐵道ニ奉ニ着手スル爲メノ借貸ニ充ツル目的。

五 滿蒙鐵道借款

一億五千万円ノ予定額ノ内二千万円前貸セリ。之ハ前述滿蒙五鐵道實

施ノ目的。

六 山東鐵道延長借款

之ハ契約充分成立セザリキ(山東鐵道延長費用ヲ我國ヨリ貸與スルトノ契約

山東鐵道合衆ノ契約成立セシメ之ハ公然帝表セザリシ爲メ日支間ノ密約

トシテ非難ヲ受ケタリ。

山東鐵道延長費予算七千万円ノ内二千万円ヲ前貸ス。

七、中華匯業銀行ヲ日支合辦ニテ作ル

陸宗輿其監督者トナル

八、日支軍事協定

之ハ後大イニ内題トナリタレモノナリ、歐洲大戰後露独ノ單獨協和ノ結果シベリヤ方面ヨリノ露独ノ脅威ヲ日支合力ニテ防禦セントノ目的ノ為メ作ラレタル協定ナリ、

之ニ總テ軍事借款トシテ二千万円ヲ新師團増設(三師)及シベリヤ出兵費ニ充ツレトノ名義ニテ貸與セリ、之ハ後日本ガ日支共同防衛ノ名ノ下ニ支那ヲ武力ニヨリ支配セントセルモノナリトノ誤解ヲ受ケタリ、

交通銀行借款ヲ除キテ之年ハ皆大正七年ノ出来事ナリキ、寺内内閣トシテハ之年ノ施設前ニ日支合辦ニ屬メテ日支共同防衛ノ製鉄廠ヲ建設セシムル計画ヲ有セシメ實現セザリキ、此種借款ノ發給ヲ支那關稅基金ニ充ツルノ議ハ現右ノ如ク寺内内閣ノ施設ハ全ク日支共存共營ノ必要ニ基キ一方ニハ支那ノ政治的統一ヲ助ケルト同時ニ經濟的開發ヲナサントスルニアリキ、然シ日支合辦ノ目的ハ實ニ日支共存共營ヲ目的トシテ作ラレタリ、

ド不承認ナリシナリ

民國ノ政治的統一ニ北京政府ノミヲ援助シテ作ラレタリ、其ノ目的ハ早計ナリシナリ、之ハ全ク日支合辦ノ自覚ニ依ツベキ外ニ止ムヲ得ザルモノナリ、日本ハ政府自ラ日支合辦ニ對シテ政治的、經濟的援助ヲナスヨリハ寧ロ日本國民自ラ直チニ日支合辦ニ對シテ政治的、經濟的援助ヲナスヨリハ寧ロアナスベキナリ、

寺内内閣ノ施設ハ真ニ日支共存共營ヲ目的トシテナセルモノニシテ何等ノ野心アルニ非ザリシナリ、然シ日支合辦ノ事情ニ於テハ或誤解ヲ抱キ、施設政策ニ偏セル傾向ヲ帯ビ居タリシ爲ニ此施設ガ却テ日支合辦又ハ日支論者ノ反感ヲ生スルニ至レリ、

軍事協定ハ施設ノ政策ノミナラズシテ日支合辦ニ對スル正途ノ誤解ヲ受ケタリ、寺内内閣ハ前内閣ノ日支交渉ヲ非難セルニモ尙ラズ其自ラ施設セル所ハ同シク日本ニ對スル日支合辦ノ反感ヲ強ムル如キ結果ヲ生ゼリ、

民國七年、巴里ニテ平和會議開カレ、民國八年二月上海ニ於テ南北和平會議起ル、何レモ支那ニ取リテ有利ナラザリキ、上海和平會議ガ後派ヲ

ル安福俱樂部ノ勢力強勢ナルヲニヨリテ内滿鮮決ヲ得ザリキ。平和會議ニ
テハ支那ノ要求セル山東問題ハ目的ヲ達スルヲ欲ハガリキ。大正九年七月
直隸派ハ孫文等ト合シテ段派ヲ改稱セシメタリ。直隸派ノ天下トナレモ段
派ノ系統ヲ受ケタル張作霖等ノ奉天派ガ其新ラシキ敵手トシテ西前ニ表ハ
レタリ。

民國十年ニ孫文ハ広東ニテ大總統ニ自ラ就キ果敢ヲ奉ゲ居レリ北方ニテハ
北京ニテ徐樹錚ガ大總統トナリ南北明カニ分列セリ。又スレテ隱退シ居リ
シ段氏が再び飛躍セントスレガ如キ形勢モ伺ハルナリ。民國八年以後ノ
形勢ハ未ダ明カニ定マリ居ラス。

終り。

大正十一年四月十五日 印刷
大正十一年四月二十日 發行

(非賣品)

編輯兼印刷 東京市麹町區飯田町六丁目一番地

飛行者 前田政五郎

印刷所 同上 北光社

振替二五一五一番
電話九段二六九番

14
690

終

